●山本　剛（やまもと　つよし）

1969年8月7日茨城県生まれ。気鋭のゲームデザイナー集団F.E.A.R.に所属。TRPGのデザインやライティングを中心に活躍中。主なゲームに『アラベスク　運命の風』（ホビー・データ）がある。趣味はスポーツをすること。特に好きなのが、アメリカンフットボールと格闘技。

カバーイラスト/壱
カバーデザイン/小林博明（K Plus artworks）
ぷよぷよは(株)コンパイル登録商標です。

魔導物語3
ぷよぷよ大司教の陰謀っ！

山本　剛

©COMPILE

角川スニーカー文庫

56-3
520

魔導物語3　ぷよぷよ大司教の陰謀っ！　山本　剛　角川スニーカー文庫

ISBN4-04-415603-4
C0193　P520E　定価520円（本体505円）
9784044156039
1910193005203

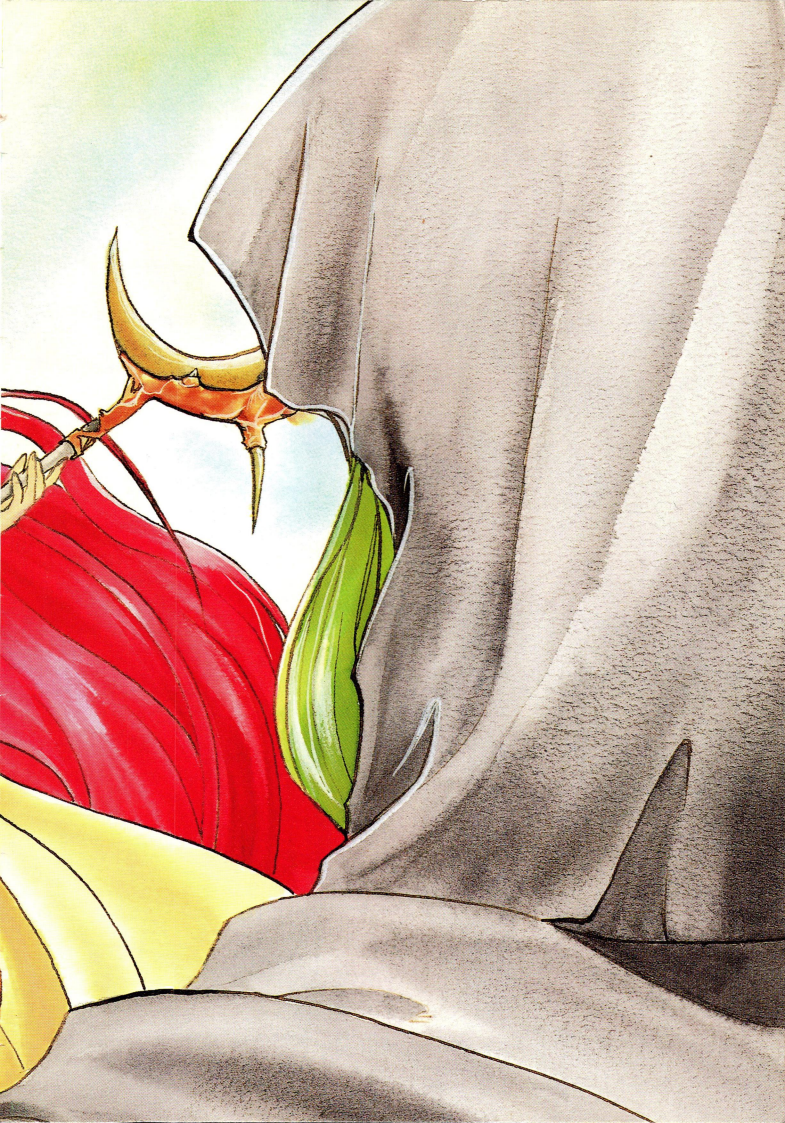
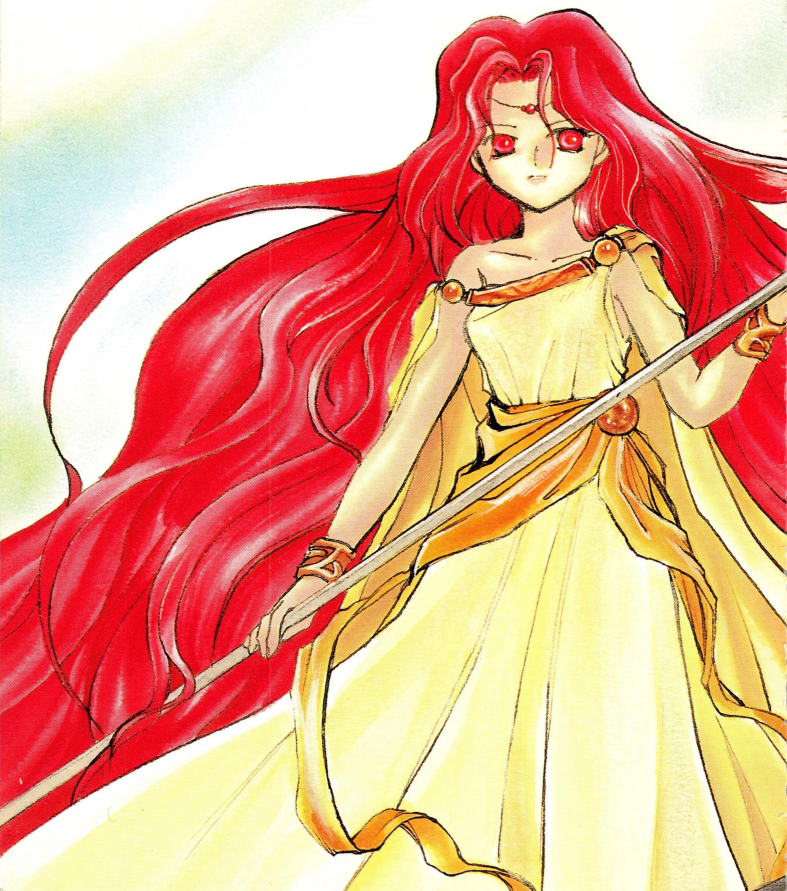
「おまえを逮捕する」――“ぷよ類憐れみの令”を発したぷよぷよ大司教によって、アルルは突然捕らえられてしまった！　さすがのサタンも驚いてすぐさま救出に向かうが、ルシファーのほうはなぜか姿を消してしまうのだった。一方アルルは、大司教に呪いをかけられて飛べない鳥になってしまったキャメロットの城主・アーサーたちを連れてなんとか牢から脱出するが、手ごわい刺客が次々と放たれる……面白すぎる大逃避行が始まる!!

角川スニーカー文庫
山本　剛作品集

魔導物語
ぷよぷよ大魔王の降臨っ！
魔導物語2
ぷよぷよ大明神の復活っ！
魔導物語3
ぷよぷよ大司教の陰謀っ！

カバー　暁印刷

魔導物語3
ぷよぷよ大司教の陰謀っ!
山本剛
角川文庫 9822
魔導物語3 ぷよぷよ大司教の陰謀っ!
山本剛
角川文庫
9822

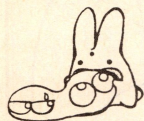
「おーい！ アルルちゃーーーん！」
カン高い女の子の声が、
窓の外から飛び込んでくる。
お手伝いのキキーモラちゃんだ。

「お珍しいですね、あなたがいらっしゃるなんて……」
出し抜けに、声が空間じゅうに響き渡った。
涼やか、という形容がぴったりあう、
それでいて神々しい威厳を持った女性の声だ。

漆黒の刀身から発するパワーが、
いきなりルルーの精神に襲いかかった。
それは、怒りや憎しみといった、
邪悪な波動だった。

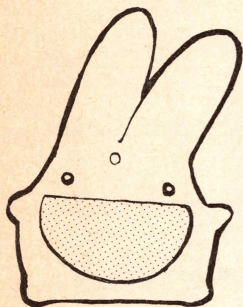
魔導物語3

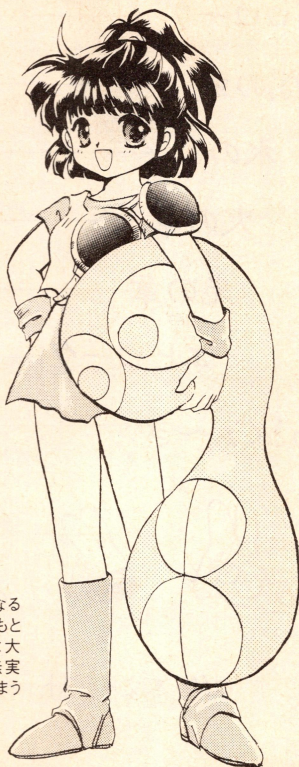
ぷよぷよ大司教の陰謀っ!

山本剛

角川文庫 9822

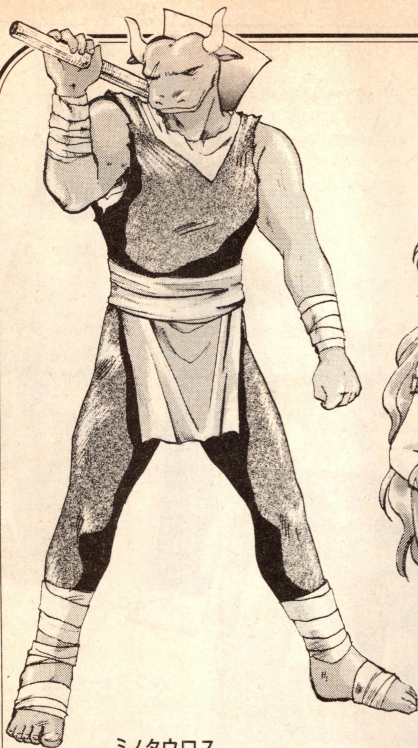
目　次

口絵・本文イラスト――壱

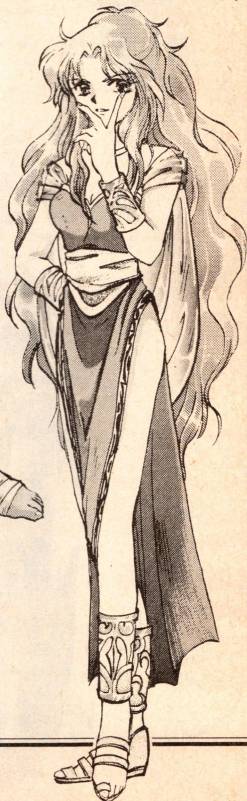
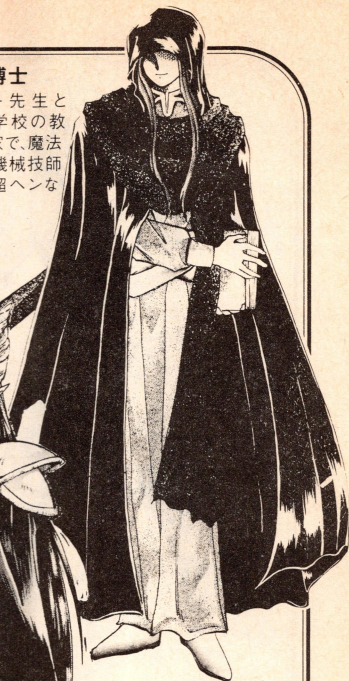
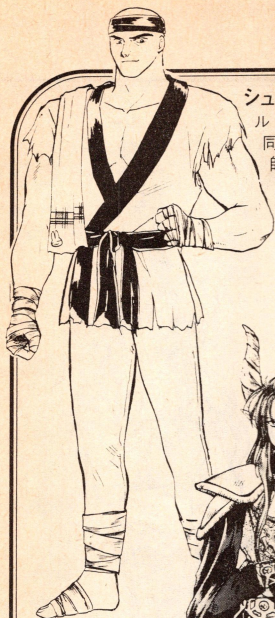
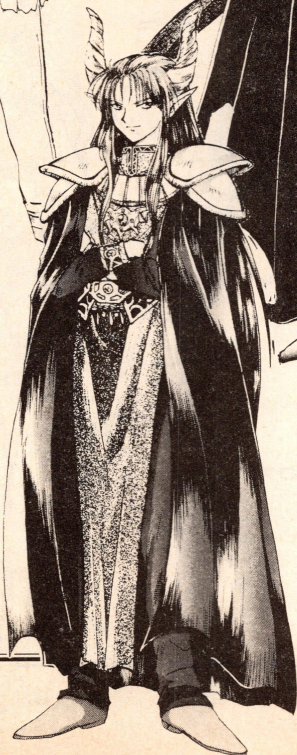
アルルと魔導ワールドの仲間たち

カーバンクル

以前はサタンのペットだったが、なぜかアルルについてきてしまったおかしな生き物。女のコと食べ物が大好きで、踊りがじょうず。

アルル

一人前の魔導師になるためにルシファーのもとで修行中。ぷよぷよ大司教の陰謀により無実の罪で捕えられてしまう……ピンチ！

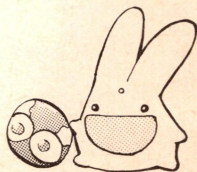
ルルー

魔界の王・サタンのお嫁さんになるために、サタンに仕えているお嬢サマ。そのためアルルをライバル視している。

ミノタウロス

ミノタウロスは、タカビーなお嬢様・ルルーのわがままにもゼッタイ怒らない優しい従者。でもとっても強くてたよりになる。

シュテルン博士
ルシファー先生と同じ魔導学校の教師。格闘家で、魔法使いで、機械技師という、超ヘンなヒト。
ルシファー先生
かっこよくて優しくて、みんなの憧れのマトの魔導学校の先生。ちょっとドジで、変な魔導師だが、今回意外な顔が明らかに……！
サタン
魔界の貴公子。アルルを妃にしようとあれこれ誘惑したが、どれも失敗。今度こそは……

プロローグ
嵐の予感！　王立騎士団現る！
……ええっ！　ボク罪人なのぉ？

あ〜、いいお天気だねぇ。

初夏の、うららかでサッパリした午後の日差しが、庭に植えられた木々や周りに広がる草原にふりそそいで、キラキラと輝いている。真っ青な快晴の空を、小鳥たちがオニゴッコするみたいに横切っていったりなんかして。それから、草原とお庭との境界線がわりの、ひと目で手入れが行き届いてるってわかる生け垣のバラたちも、これ以上ないってくらい鮮やかな紅い色をしてる。

ボク——アルル・ナジャは、この季節が大好き。いろんな色のパステルで描いたような、ほんわかした春の風景が、だんだん、若葉の緑が多くなっていってシャープな感じになっていく。その中間の、「ああ、もうすぐ夏なんだなぁ」っていう微妙なところがいいんだよね。気温も暑くもなく、寒くもなくって丁度いいし。

そんな風景を、ボクは両手で頬杖をついて、じっと――というよりはぼぉ～っと、草原の真ん中にポツンと建った家の2階にあるボクの部屋の窓から見下ろしていた。

家、といっても正確にはボクのじゃない。ボクのお師匠の、ルシファー先生のものなのだ。ずぅっと前、魔導学校にいたころ、ルシファー先生はボクの担任だった。それの縁がもとで、ボクは学校を卒業したいまも先生のおうちに住み込んで、魔法を教えてもらっちゃってるってワケ。早いハナシが、押し掛け弟子ってヤツ。

ボクの夢は、一流の魔導師になること。魔導幼稚園にも通ってたし、小さい頃から魔法の勉強してきた。だけど、魔導学校を卒業しました、ハイ！　あなたは今日から一流の魔導師です、っていうワケじゃあない。もっともっと勉強しなきゃダメ。だから、ボクと同じような夢を持ってる魔導学校の卒業生は、たいてい、一流とか、どこそこの賢者とかって呼ばれてるヒトのところに弟子入りするのだ。

そんななかで、ボクが選んだお師匠サマが、ルシファー先生ってワケ。

実をいうと、魔導師の世界には、ルシファー先生より有名なヒトはいくらでもいる。それでどうしてルシファー先生を選んだかというと、なんとなくそうなっちゃったっていうのもあるんだけど、ボクが思い描いている一流の魔導師の姿にピッタリ一致するから。

魔法のウデは超一流でも、ほかのコトはからきしダメ、っていう魔導師にはボクはなりたくない。世の中にはそういうヒトはいっぱいいるケド、やっぱり、いろんなコトもできて、その

うえで魔法のウデもよくなくっちゃ。
そのてん、ルシファー先生はスゴイ。魔法の使い方をちゃあんと心得てるし、世の中の常識とか、学問とかが頭の中に詰まってるし、お料理も、勉強の教え方もウマイ。ときどき、イタズラやちょっとしたポカをやったりするけど、そのへんは愛敬愛敬。パーフェクトすぎるっていうのもナンだしね。
あと、なんといってもイイのは人柄。ぜぇ〜ったいに怒らないし、先生と一緒にいると心地好くって、なんか優しい気持ちになってくる。いつもはマントのフードで顔の上半分を隠してるけど、素顔はとってもカッコイイし。
ボクも、そんなふうになれるといいなぁ。魔法のウデも超一流で、ほかのコトもなんでもできて、器量もよくって、みんなから慕われるような魔導師に……。
その、ボクが憧れているルシファー先生は、いまはお家にはいない。魔導学校に行っているのだ。そういえば今日は、先生方の会議があるので帰りが遅くなるっていってたなぁ。夕ごはんはどうするのかなぁ……。
などと、ルシファー先生にいいつけられた課題そっちのけで、ゴハンの心配をする悪いボクであった。頬杖をついたボクの肘の下には、呪文の書き取りが遅々として進んでないノートが広げてある。
同じ呪文を何回も書き取りして、眼と指先に叩きこめば、いついかなるときでも呪文を間違

えないで唱えることができるようになる。それが、一流の魔導師としての第一歩だっていうのはわかってるんだケド……。やっぱ、こんなラッキョの皮むきみたいな単調な作業は、監視するヒトの眼がなかったら、ちょっと手を抜きたくなるのが人情ってもの。

お外もいい天気だしねぇ。こんな日に、ルシファー先生と庭のテラスでお茶したり、どっかにピクニックにでも行ったりしたら、楽しいだろうなぁ……。

「ぐ〜ぅ、ぐ〜ぅ……」

ボクの友達——人間じゃないケド、ペットというワケでもないから友達——のカーバンクルなんか、机のうえの、イチバン日当たりのいいところで居眠りしちゃってるし……。

黄色いおまんじゅうみたいな身体にくっついた、ちっちゃな眼をつぶって、逆に口は大きく開けちゃって。ウサギみたいな耳や、ボクの指先くらいしかない手足なんか、だらぁ〜んとだらしくなく投げ出してる。

「ぐ〜ぅ、ぐ〜ぅ……」

ぷ〜ぅ、ぷ〜ぅ……。

カーバンクルの寝息にあわせて、ハナ——だと思う、眼と口のあいだ——のチョウチンが、おっきくなったりちっちゃくなったり……。

「ふわ〜ぁ……」

それを見てたら、なんだか眠くなってきちゃって、思わずあくびが出た。ボクもお昼寝しちゃおうかなぁ……。ルシファー先生だったら優しいから、呪文の書き取りが終わってなくても『明日に続きをやればいい』とかって許してくれるよ……。
「ン〜〜……」
などとヨカラヌことを考えながら、ボクは羽根ペンを置いてのびをした。その瞬間、ふとあることが頭をよぎる。
「そういえばここんとこ、サタン出てこないなぁ」
〝魔界の貴公子〟サタン——。
ボクを妃にして魔界に連れて行こうとしてる、シッコイ男のヒト。
なんで突然、彼のコトを思い出したかっていうと、実は、カーバンクルはもともとサタンのペットだったから。魔導学校に入るずぅ〜っと前、とある迷宮でサタンを〝ばたんきゅ〜〟させてから、なんでかわかんないケド、カーバンクルはずっとボクにくっついているのだ。
それからそれから、もうひとつ驚くべき事実がある。実は、サタンとルシファー先生は、なんと双子の兄弟なのだ！　魔導学校の卒業直前にルシファー先生の素顔を見せてもらったけど、確かにソックリ。見た目の違いは、サタンにあって先生にないリッパな角くらい。持ってる雰囲気はだいぶ違うから、角があってもなくても、見分けはつくケドね。サタンは威圧的で、氷みたいな鋭いカンジだけど、ルシファー先生はとっても優しくて、春の日差しみたいにあった

かで、ずぅ〜っと一緒にいたくなるカンジ。

そういえば、昔はルシファー先生も角を持ってたってシュテルン博士——ルシファー先生とサタンの知り合いで、このヒトも魔導学校の先生——がいってたなぁ。どうしてなくなっちゃったんだろ? こんど先生に聞いてみよっと。

あり……? なぁんか話題がズレてるような気がするなぁ。

そうそう、サタンが顔を出さないなってハナシだったっけ。

〝日出る国〟でぷよぷよ大明神の大騒ぎをなんとかしてから、サタンの顔を見てないような気がするなぁ。……ってコトは、ぷよぷよ大明神の持ってた不思議なヒョウタンにサタンを詰め込んで、それをシュテルン博士がとぉ〜く——多分、ボクのソーゾーを遥かに越える遠い場所まで——にブン投げちゃって、それっきりっなのかぁ。そういえば、ルルーがそれを追っかけてったっけ。

ルルーはボクよりふたつ年上の、良家のお嬢様で、一方的にボクのコトをライバル視してる。その理由は、彼女はサタン——ルルーにいわせるとサタン様——ひとすじで、そのサタンはボクを妃にしようと躍起になってるから。でも、一緒に魔導学校で勉強したりして、けっこう仲のいい——と一応ボクは思ってる——友達でもあるんだけどね。

彼女、うまくサタンの入ったヒョウタンを見つけられたかなぁ……。

友達として心配であると同時に、できるだけ見つかって欲しくないというフクザツな気持ち。

だって、またサタンが出てくるようになったら、うるさくて魔法の修行どころじゃなくなっちゃうもんね。
そりゃぁ、ボクのコトを好いてくれるっていうのは、気持ちとしてはうれしい。だけど、やり方が強引でしつこいのが、ちょっと、というか結構イヤ。それに、もしサタンと結婚すると、したら、魔界に行かなきゃなんないってのもねぇ……。やっぱりボクは、この人間界で一生を終えたいし、そうなる前に一流の魔導師になるっていう夢があるんだ。それが果たせるまでは、そうそうサタンなんかにつきあってはいられない。
「とはいうものの……」
ボクはつぶやきながら、かる〜くため息をついた。
修行し続けて、そのままおバアさんになっちゃったらどうしよう……？
最近、それがちょっと心配。それはそれで、かなり悲しいモノがあるもんねぇ。やっぱ、少しは恋愛もしてみたい。ルルーみたいにサタンを追い回すような、そこまで激しい恋っていうのも、ずっと見てるとうらやましくなってくる。
彼氏にするなら、そうねぇ……やっぱルシファー先生みたいな、優しくて、なんでもできて、それでいてちょっと謎めいているヒトがいいなぁ……。
だからといって、ルシファー先生を彼氏にしたいワケじゃぁない。先生はあくまでもボクのお師匠サマだし、年齢のコトとか、いろいろモンダイあるしね。なにしろ、ルシファー先生は

魔界の住人で、人間の尺度で何百年生きてるかわかんないんだもの。双子のお兄さんであるサタンだってそうだし。愛と年齢は関係ない、とはよくいうケド、それでも程度ってもんがあるよ。

そういえば、〝日出る国〟に行ったとき、ボクに一目惚れしたおサムライさんがいたっけ。そのマサムネさんも、ボクの理想とはちょっち違うケド、とってもシブくてカッコイイんだよね。剣のウデもムチャクチャいいし。……ただ、モンダイは、この人も四十過ぎたおぢさんなんだよねぇ。

どうせするなら、〝フツー〟の恋愛がいいなぁ……。

ボクと同い年くらいで、それでいてルシファー先生みたいなカッコイイ系かマサムネさんみたいなシブイ系の顔で、優しくておもしろくて、なんでもできて、ミステリアスなヒトっていないかなぁ。

ボクって、もしかして理想が高すぎる……？

「はぁ〜あ……。ま、いいか……」

ため息をひとつついてから、ボクは気を取り直してつぶやいた。

ルシファー先生がいつもいってるように、いずれ時が解決してくれるでしょう。いつかきっと、ボクも燃えるような恋愛が訪れることを信じて、それまでは夢に向かって修行あるのみ！だね。

とはいうものの……。

ボクはチラっと机のうえのカーくんを見た。鼻チョウチンを自分の身体よりもおっきくふくらまして、気持ちよさそうに眠ってる。

とりあえず、ボクもお昼寝しましょうか。寝るコは育つっていうし、修行もあとで気合い入れてやればいいことだし。

「ああっ、ボクって悪いコ……」

とかなんとか、思ってもないコトを、ルルーみたいに自己陶酔にひたりながらつぶやいて、ボクはノートを閉じた。

そこへ……、

「おーい！　アルルちゃ――ん！」

カン高い女の子の声が、窓の外から飛び込んでくる。

見ると、真っ赤でシンプルなドレスと真っ白なエプロンというメイドさんみたいないでたちの女の子が、バラで囲まれた庭の真ん中に立って、ボクのいる2階の窓を見上げていた。お手伝いのキキーモラちゃんだ。

彼女を見て、ボクは思い出した。今日はお掃除の日だっけ。

いまボクのいるルシファー先生の家は、先生と、ボクと、カーくんというふたりと1匹が住

むには、あまりにも広すぎる。1階と2階をあわせると、十をはるかに越える部屋があるのだ。それに加えて地下室もあるし、お庭なんか、バラの生け垣のまわりをぐるっと回るとかなりの運動になるくらい広い。だもんだから、家のお手入れはとってもタイヘン。先生は学校の授業があって忙しいし、ボクひとりじゃキレイにお掃除なんてできやしない。だから週に一度くらいの割合で、キキーモラちゃんに来てもらって、ふたりでお掃除をしてるってワケ。

「玄関なら開いてるよぉ！」

ボクは窓からちょっと身を乗り出していった。

「はぁ〜い！」

キキーモラ——略してキキちゃんの返事を聞いてから、ボクは部屋を出て階段をててっと降りた。そしてダイニングを抜けて玄関のほうに行き、彼女を迎え入れる。

「失礼しまぁ〜す」

「やっほー。今日はどこからお掃除する？」

「その前に、アルルちゃん、お昼ごはん食べた？」

「ううん、まだ」

「じゃあ、先になにか食べましょう。お掃除はそれからね」

「そうだね、腹が減っては戦はできないもんね」

家のお掃除は、まさに戦といってもいいくらいタイヘンなのだ。お手伝いのキキちゃんがい

てくれるといっても、かなり広い家だからねぇ。
「じゃあ、なにか作ってくるね」
といい残し、キキちゃんは短めのキレイな金髪をなびかせて、パタパタとキッチンのほうに消えていった。
この家のキッチンはスゴイ。最高級レストランの厨房にも負けないくらいの広さと、リッパな調理道具が置いてあるのだ。それだけ、ルシファー先生はお料理が大好きだってことで、先生は道具を自分の手と魔法で使いこなしちゃう。キキちゃんの料理も、先生に負けないくらいオイシイ。ちなみにボクは、悲しいことにあんまりお料理が得意じゃない。しくしく……。
「さて、と……」
気を取り直してボクは、キッチンに入り、もうお料理を始めているキキちゃんの邪魔にならないようにふきんを探した。そのふきんでダイニングのテーブルをふいて、それからお皿やフォークなんかを並べて……。これくらいのコトはやんなきゃね。
「ぐっぐぐっぐっ、ぐっぐっ」
いつのまにか、カーバンクルがテーブルのうえで踊ってる。さっきまでグゥグゥ寝てたくせに、ごはんだとわかるとスグこれなんだから。
「カーくん、踊ってないで手伝って」
「ぐー!」

ボクがお皿やフォークをまとめてテーブルに置くと、カーくんはちっちゃな手を器用につかってそれらを並べはじめる。前はお皿でもなんでも、スグ食べちゃおうとしてたんだけど、最近はどれが食べ物かそうでないかわかるようになったみたい。これも、ボクの教育のタマモノってヤツ？　ちっちゃな弟かなんかを世話してるみたいで、なんだかカワイくて、なんとなくうれしいね。

じゅ～、じゅ～。

ボクとカーくんのふたりで食器を並べていると、やがて、お肉を焼いてるような音と、匂い(にお)がキッチンのほうから流れてくる。

「キキちゃーん！　今日のメニューはなぁに？」

とボクが問いかけると、キキちゃんの元気な声がキッチンの向こうから返ってくる。

「ハンバーグですよぉ！」

「おー！」

「ぐー！」

わー、ぱちぱちぱち。

ボクとカーくんは、思わず歓声(かんせい)をあげて拍手(はくしゅ)した。キキちゃんのハンバーグって、ジューシーでとってもオイシイんだよね。これだけは、さすがのルシファー先生もかなわないかもしれない。カレーライスの次に、ボクらが大好きなメニューだし。

はんばあぐっ
ふきん

なぁんてボクらが喜んでると、突然(とつぜん)、

ドンドンドン！

誰(だれ)かが玄関(げんかん)を、ちょっと荒(あら)っぽく叩(たた)いた。

「はいはぁ〜い、いま開けますよぉ〜」

キキちゃんの特製ハンバーグが待っているといううれしさから、ボクは踊るように玄関に近づいた。なんだろう？　速達の郵便かなんかかな？

ガチャッ。

と玄関を開けた瞬間(しゅんかん)、ボクのウキウキ気分はいっぺんに吹(ふ)き飛んだ。

突然のお客さんは、ボクより頭ふたつくらい背の高い、何人もの騎士(きし)さんたち。みんな、威(い)圧的(あってき)でトゲトゲしい装飾(そうしょく)をした黒い鎧(よろい)に身を包んでいる。いかめしい兜(かぶと)のマスクをおろしているので、顔は見えない。

鎧の胸につけた、ぷよぷよをかたどった紋章(もんしょう)がちょっちオチャメだけど……。

「ナニか、ご用ですか……？」

いいながらボクは、悪い予感がじわじわとわき上がってくるのを感じた。よくないコトが起こる。もしや騎士さんたちは、キキちゃんのハンバーグを奪(うば)おうと……？　いやまさか。

「我々は、キャメロット城の者だ」

騎士さんのひとりが、重々しくいった。兜のマスクのおかげで、声がちょっとくぐもってる。

キャメロット城……？

たしか、この辺一帯を治めている王様の城じゃなかったっけ？　そこの騎士さんが、いったいどうしてここに……？

「ルシファー先生なら、いまは学校ですよ」

ボクはいった。

先生のウデを見込んで、ここにはいろんなヒトたちが先生に仕事を依頼にやってくる。キャメロット城のヒトたちも、そういえば何度かここに来たっけ。そのときは、こんなにモノモノしい騎士さんじゃなくて、宮廷魔導師とか司祭様とかだったケド。

「アルル・ナジャだな？」

ボクの言葉を無視して、騎士さんはいった。ボクは反射的に答える。

「はい、そうですケド……」

もしや、ぷよぷよ大魔王や〝日出る国〟のぷよぷよ大明神を倒したボクのことを知って、先生じゃなくてボクに仕事の依頼が……？　それはちょっと、いや、かなりうれしいぞ。なんだか、いっぱしの魔導師みたい。

だけど、次にでてきた騎士さんの言葉は、そんなボクの甘い予感をものの見事に破壊した。それどころか、飛び上がるほどボクを驚かせるモノだった……。

「アルル・ナジャ、おまえを逮捕する」

＊　＊　＊

『どうしたんだ？　明かりもつけないで』

夕刻、陽が完全に沈みきった頃に授業と職員会議を終えて帰宅したルシファーは、いぶかしみながら玄関を開けた。

中は暗く、月明かりだけがかろうじて真の闇から守っている。家に入る前から、ある程度は予想できた光景だった。

ルシファーのこの家は、魔導学校の校舎から少々離れた、見晴らしのいい草原の真ん中に建っている。したがって、遠くからでも明かりがついているかいないかは即座にわかるのだ。

いつもなら、自分の帰りを待ちわびている愛らしき弟子の心情を表すかのように、こうこうと明かりがついており、玄関を開けると同時に彼女とその友達の元気な顔が飛び出すはず。しかし、今夜はいつもと違う。

ルシファーは賊の存在を懸念し、すぅっと神経を集中させた。意識の網を家中に張り巡らせ、侵入者の有無をさぐる。

『…………』

しかし、そのような存在は感じられない。

「……ん、くすん……」

代わりに、奇妙な、かすれた音が耳に飛び込んでくる。

「……くすん、くすん……」

それは、嗚咽だった。キッチンのほうから聞こえてくる。

ルシファーは足音を殺して、まるで幽霊のようにキッチンに近づき、パチンと指を鳴らした。

それを合図に、キッチン、そして広い家全体に明かりが灯る。

キッチンの奥で、脅えて縮こまり、嗚咽をもらしていたのは弟子ではなかった。背格好は同じくらいだが、赤いシンプルなドレスに、白いエプロンをまとっている。

『キキーモラくん……』

「あっ！　ルシファー様ぁ！」

家の主に気がついたキキーモラは、わっとルシファーに駆け寄り、泣きついた。ルシファーは軽くかがみ、彼女を安心させるように優しく抱く。

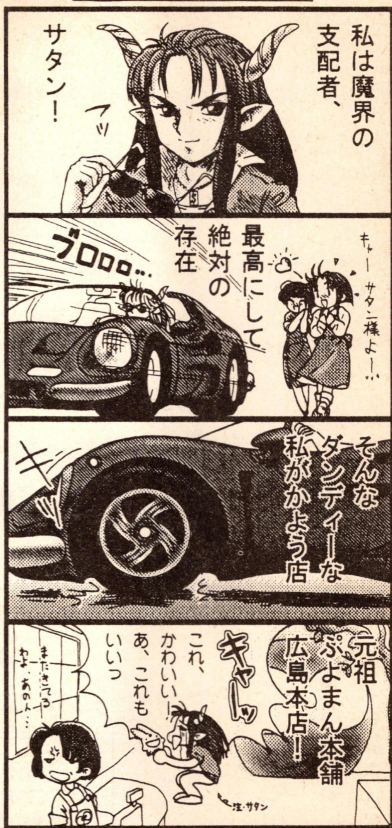
『キキーモラくん、これはいったい……？』

いいながら、ルシファーはキッチンを見回した。何者かに荒らされた形跡はない。ただ、作りかけのハンバーグが、悲しげにフライパンのうえに乗っているだけだ。

ふと、自分が来た方向――ダイニングのほうを見やる。そこのテーブルのうえでは、きちん

と並べられた食器たちが、出来上がった料理が並ぶのをじっと待っていた。そこも荒らされた様子はない。
『いったい、なにがあったのだ?』
「あ、アルルちゃんが……」
ルシファーの再度の問いに、キキーモラはようやく、嗚咽まじりながらも声を発した。
『アルルくんがどうしたと?』
「アルルちゃんが、コワイ騎士たちに連れてかれちゃったんですぅ……!」
『なんと!』
滅多に感情を表に出さないルシファーが、珍しく、目深におろしたフードの奥で驚愕の表情を見せた……。

闇の章

ダンディズムとは

by 宇宙帝王

デーモンサーバント
その名のとおり、悪魔の使いだ！ご主人様の命令には絶対服従だけど、自信過剰ぎみで世の中をなめきってる。

一　気がついたら、そこは牢屋

……ボク、なんにもしてないのにぃ！

朝——。
初夏の、早くに昇(のぼ)りきった太陽が、さんさんとテラスに陽光を投げかける。
テラスのテーブル、イス、そのほかの食器などはすべて、この季節のさわやかさとは対照的な黒系統の色でまとめられているが、それが不思議と、まわりの緑と見事な調和をかもし出していた。
『ふむ……』
いつもの朝食を終え、サタンはナイフとフォークを置いた。その動きにあわせて、彼の身を包んだ漆黒(しっこく)のローブがかすかな衣擦(きぬず)れを起こす。
ガチャッ。
出し抜(ぬ)けに、サタンの背後で、ドアを開ける音がした。彼の家の、玄関(げんかん)の音だ。

サタンは、双子の弟であるルシファーのものと、まったく同じ造りの家を建てていた。2階建ての、まるで王侯貴族の別荘と見紛うような、部屋数の多い建物。立地条件も同じで、見晴らしのいい草原の真ん中だ。ただし、色合いが決定的に異なる。弟の白系統に対して、サタンの家はテラスと同じく黒系統である。草原と庭とを隔てるバラの生け垣も、花は真紅ではなく、限りなく黒に近い藍色だ。

「サタン様、食後のお茶ですわ」

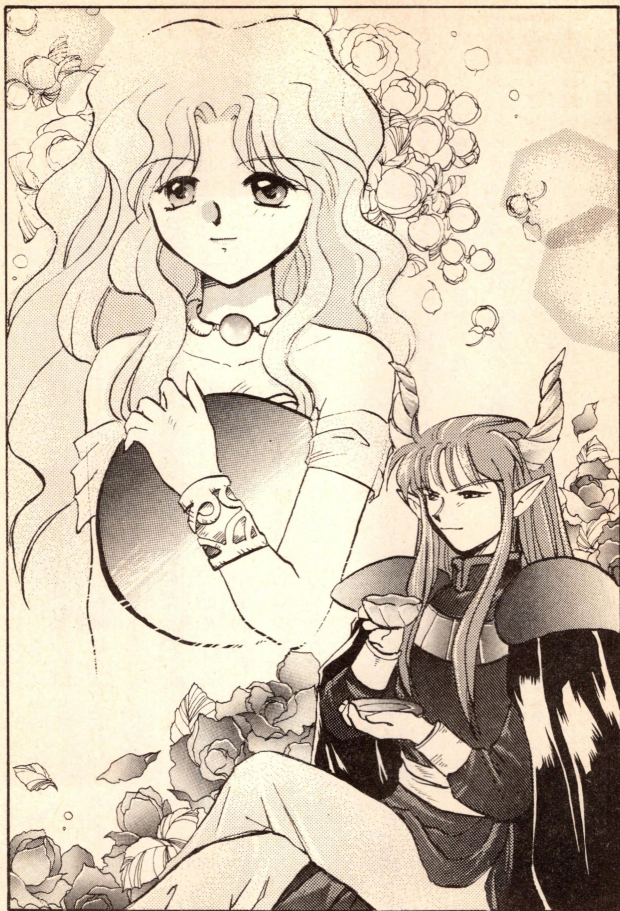
彼の家から出てきたのは、漆黒のティーセットを持ったルルーだった。玄関から庭へと続く階段を降り、まっすぐサタンのたたずむテラスへとやってくる。その優雅な動きにあわせて、豪奢な水晶色の長い髪と、同系統の色の少々露出度が高めのドレスが揺れる。

『うむ、今朝の料理もなかなか美味かったぞ』

芳醇なお茶で満たされたティーカップを受け取りながら、サタンはいった。ルルーは、顔を赤らめながらそれに応える。

「お誉めいただいて、光栄ですわ」

ルルーにとっては、夢にまで見たシチュエーションだった。

ひとつ屋根の下で暮らし、毎日、愛するサタンに心尽くしの料理を出して、それを彼が、あくまでもなにげなく誉める。その、まるで夫婦のようなサタンとの生活に、ルルーは心から憧れていたのだった。惜しむらくは、それが本物の夫婦でないこと。それでもルルーは、このよ

うな生活がいつまでも続けばいいのに、と思う。

少なくともこれまで、彼女の憧れの暮らしは誰にも邪魔されずに続いていた。〃日出る国〃で不思議なヒョウタンに封印され、どこの国かもわからない砂漠に飛ばされたサタンを助け出してからずっとだ。サタンは、ルルーにヒョウタンから出してもらってからすぐに、転移の魔法でここまで移動し、さらに魔法を使って家を造りあげたのだった。

サタンは、妃にと目する――ルルーにとっては憎っくき恋敵の――アルルに対して、魔物たちに徒党を組ませてぶつけようと計画している。つまり、圧倒的な力で彼女をモノにしようと考えているわけだが、いまのところ、それに着手する様子は見せていない。

ルルーにとってはうれしい限りだが、ふと気になって、以前それについて問いかけたことがあった。しかしサタンは、

『やろうと思えば、いつでもできる。しかも最近、現界と魔界とのバランスが以前にも増して不安定で、うまく魔物どもを呼び出せんのだ』

と、少々不機嫌に語っただけだった。

ともあれ、いまはこうして、自分のいれたハーブティーを味わっているサタンの姿が目の前にある。アルルが顔を出すでもなく、なにか事件が起きるでもなく、平和な日々が続いている。ルルーにはいまのところ、それで充分だった。多少のイタズラ心が、ハーブティーの中に込められているが……。

なにしろ、ハーブティーのブレンドは、ルルーの魔導学校時代の担任であり、サタンが執拗に毛嫌いする双子の弟、ルシファーに教えてもらったものなのだ。それを知ったときのサタンの顔を想像すると、少々恐ろしくもあり、楽しくもあり……。

「……★」

そんなような考えを頭の中で巡らせながら、ルルーは、緑の木漏れ日を受けながらお茶を飲むサタンの姿をうっとりと眺めていた。そこへ、

「ぶもー」

牛の鳴き声とともに、体格のよい人影が、アーチ状のフレームに茨をからませた門をくぐって現れた。牛のような声は、別にふざけているワケではない。彼の顔を見ると、誰もがその理由を納得する。

門から現れた人影は、身体はたしかにかなり立派な部類の男性のものだが、頭部は牛のそれだった。

「あら、おかえり、ミノタウロス」

ルルーは、この牛頭人身のモンスターに、穏やかに声をかけた。彼こそ、長年ルルーに仕える従者であり、ボディガードでもあるミノタウロスだった。

「ぶもぉー……」

ミノタウロスは大きく息をついて呼吸を整え、肩にひっかけたタオルで額の汗をぬぐった。

かなりの運動をしてきたらしく、厚い胸はリズミカルに弾み、筋骨たくましい腕や脚はパンプアップしている。
彼は毎朝、ルルーやサタンよりも早く起きて食事を済ませ、外でロードワークをはじめとするトレーニングをこなすのが日課だった。主君であるルルーを守るために、常に鍛練を怠ってはならない、そうミノタウロスは考えている。実際には、格闘家としてかなりの実力を持っているルルーが、彼の助けを必要とすることはそうそうないが……。
『それはなんだ？』
サタンが、ぶ厚い革のベルトにはさんだ紙きれに視線を向けながらいった。
「ぶも」
ミノタウロスが紙きれを差し出すと同時に、ルルーが通訳する。
「新聞の号外だそうですわ」
『どれどれ……』
サタンたちがいまいる地域は、かなり平和なところである。政治的、社会的不安も、戦争もない。彼は、英気を養うには静かなところがよいだろうと考え、この場所を選んだのだった。別の理由も多分に含まれているが……。
そのような、静かで牧歌的な場所に号外などとは珍しい。以前、この辺りを治めるキャメロットの城主が急死したときに、号外で発表されたことがあったが。

サタンは興を覚えてそれを受け取り、広げて見た。
『……！』
出し抜けに、サタンの表情が曇った。そして記事を読み進めるにつれ、肩がぶるぶると震えはじめる。
紅茶をすするルルーが、そんなサタンの変化に気がついた瞬間、
『ぬぁんじゃこりゃぁ～～～～～～～～～っ！』
ビリィッ！
テラスはおろか、庭全体、家までをも震わせるような大声を、サタンは号外を引きちぎりながらあげた。庭の木々に集まってさえずっていた小鳥たちがそれに驚き、慌てて別の安息地を求めて飛び去っていく。
『おのれぇ！　ルシファーのヤツはなにをやっていたのだ！』
「ど、どうなさったのです？　サタン様」
これまで見たことのない勢いの怒りを見せるサタンの姿に怯えながらも、ルルーはきいた。
『アルルが領主に逮捕されたのだ！』
「なんですって？」
卓越した——同時に歳を重ねた——格闘家のように、あまり物事には動じないルルーだが、

さすがにこれには驚いた。ドジで、マヌケで、幼児体形のチンチクリンで、サタン様のよさも、恋愛(れんあい)のレの字も知らないようなアルルが、まさか犯罪をおかすとは思っていなかったのだ。

『これは、なにかの間違(まちが)いだ！』

サタンは吠(ほ)える。口には出さないが、ルルーもその意見には同調してうなずく。

『いくぞ、ルルー！　アルルを救出する！』

バサァッ！

サタンはマントを大仰(おおぎょう)にひるがえし、踵(きびす)をかえした……。

＊　＊　＊

ボクは突(つ)き飛ばされるように、証言台に立たされた。

まわりは真っ暗で、なんにも見えない。まるで、闇(やみ)の空間の中に放り出されたようなカンジだ。裁判所って、こんなところなの……？

だんだん心細く、恐(こわ)くなってきて、ボクはベランダの手すりみたいなかたちの、古くて黒ずんだ木の証言台をぎゅっとつかんだ。

「罪人、アルル・ナジャ……」

不意に、ボクの目の前で声がした。それと同時に、ロウソクに火がついたみたいにボゥッと、

机を前にした裁判長が現れる。
ルシファー先生みたいに黒いローブのフードで顔の半分を隠してるので、表情はわからない。顔の下半分――アゴのかたちとか、唇とか肌のツヤとかを見ると、かなり若そうなカンジ。裁判長っていったら、――いかめしくて、しかつめらしい――オジサン、ってイメージがあったんだケド……。
その裁判長はいった。
「これより、罪人、アルル・ナジャに判決をいい渡す」
「そんな！　ボクはなにもしてません！　なにかの間違いです！」
「では……」
ボクの必死の抗議にも、裁判長はまったく動じずにいう。
「以前、〝ぷよぷよ大魔王〟なるものと戦ったことがあるのは覚えているか？」
「は、はい……」
ボクが魔導学校にいたころのハナシだ。
卒業試験の課題として、ボクは遠くにいるシュテルン博士のところに〝メタドライヴ〟という呪文を増幅する機械を取りに行った。実は、それは、現界と魔界との次元の歪みが生んだモンスター、ぷよぷよ大魔王に対抗するためのもので、その〝メタドライヴ〟を使って――正確には、それが壊れて暴走したおかげなんだケド――ぷよぷよ大魔王を倒したのだった。

裁判長は、淡々と続ける。
「その戦いの際、一二億七八五三万、とんで六八三匹ものぷよぷよを次元のかなたに葬り去ったな？」
「はい……」
確かに、大魔王との戦いのとき、そうしたのを覚えてる。
大魔王が空から降らせたたくさんのぷよぷよを、〝メタドライヴ〟で〝オワニモ〟の呪文を増幅して、どんどん消し去っていった。〝オワニモ〟っていうのは、魔物を時空のはざまに消し去るスゴイ呪文なのだ。同じ色のモンスターを四匹そろえなきゃいけないっていう弱点があるんだけど、同じ色のが何匹もいるぷよぷよにはうってつけってワケ。
だけど、もうズイブン前のコトなのに、よく裁判長は正確な数字を覚えてるなぁ……。
「さらに、これまでに天文学的数のぷよぷよを殺害しているな？」
「………」
ぷよぷよは、いわゆるザコモンスター。外を歩いてると必ずといっていいほど出てきて、飛び掛かってきたり、ばっちい液体を吐き出したりしてくる。だからといって、よっぽど小さい子なら別だけど、普通はぷよぷよに殺されたりなんかはしない。
だけど、出てくるとやっぱりうっとおしく感じるし、見た目はカワイイけど、液体もキタナイ。だからついつい、攻撃呪文で〝ばたんきゅ～〟させちゃうのだ。お台所に出てくるゴキブ

りみたいなカンジ。
　まぁ確かに、ちょっちヤリすぎかなぁ〜ってコトもしたことあったケド……。
「でも、どうしてそれでボクが逮捕されなきゃなんないんですか？」
　ボクは抗議した。
「ぷよぷよを殺しちゃいけない、っていう法律でもあれば別だけど……」
　いくら見た目が可愛くても、ぷよぷよはやっぱりモンスターなワケだし、いまのところ、そういう法律がある国なんて見たことも聞いたこともない。
「ふっ……」
　無表情だった裁判長の口許が、まるでボクをバカにするかのように歪んだ。
「お前は知らんのか？　〃ぷよ類憐れみの令〃を……」
「え――――っ！　ナニソレぇ！　そんなの知らないよぉ！　いつできたんですかぁ？　そんなワケわかんない法律！」
　ルシファー先生と一緒に住むようになってだいぶたつケド、そんな決まりが領地にあるなんて聞いたことないよ！
　しかし裁判長は、ボクの言葉を無視した。
「無知は、時として罪にもなりうる。従ってアルル・ナジャ、お前は有罪だ。判決は死罪。〃ぷよ責めの刑〃に処す。ぷよぷよの海の中にて、お前の犯した罪の深さを味わうがよい！」

コォ——ン！

と裁判長は、机の上の木槌を叩いた。その乾いた余韻を響かせて、裁判長の姿はフッと闇の中にかき消える。

ボクは、また果てしない闇の中に取り残された。

その途端！

ドドドドドドドドドドドドドドドド！

いきなり、ボクの頭上から怒った顔の大量のぷよぷよが降り注いだ！

「わぁ————っ！」

ぷよぷよたちは、あっという間にボクを埋めつくし、それでもなお、どんどん降り積もっていく。

こ、このままじゃ、窒息して死んじゃう……！

「オワニモ！」

ボクはとっさに呪文を唱えた。

……だけど、なんにも起こらない。

「ファイヤー！　アイストーム！　ジュゲム！　るいぱんこ！」

次々に攻撃呪文を唱えたけど、やっぱりダメ。ボクの魔導力がなくなっちゃったワケじゃな

いみたい。……ということは、この闇の中には魔法封じの結界かなにかが張られているのだ。
「うっ……」
どんどん降ってくるぷよぷよに、ぎゅうぎゅうに押されるのと同時に、まわりの空気が薄くなってきて、すごく苦しくなってきた。
だけど、もう身動きできないし、呪文も唱えられない……。
「も、もうダメ……」
ホントに死んじゃうよ！
誰か、ルシファー先生、助けて……！

＊　＊　＊

「ハッ！」
ボクは眼を覚ました。上半身を起こした拍子に、ボクのおデコの上から、濡らしたタオルがポロリと落っこちる。
……ってコトは、いままでのは夢？
と思った瞬間に、ボクはすべてを思い出した。

いかつい騎士団につかまったボクは、キャメロット城に連行され、そのまま地下の裁判所に連れ込まれて裁判を受けた。そこで、夢と同じような罪で死刑をいい渡されたのだ。だけど、さすがにその場で〝ぷよ責めの刑〟にはされなくて、明日の死刑執行まで牢屋に入れられることになったんだっけ。

で、そこに入れられるとき騎士さんに乱暴に押されて、なにかにつまずいて転んで、気を失っちゃったのだ。

「ぐー!」

「気がつきましたかぁ?」

カーバンクルがボクの胸に飛び込んでくるのと同時に、女のヒトの、澄んだ、それでいてちょっと間延びした声がした。

ボクはそちらの方向を見た。

牢屋の壁と床はしっかりとした石造りになっていて、壁にひとつだけつけられた燭台で、ロウソクが弱々しく光を投げかけている。そのおかげで、牢屋はそんなに広くないケド、奥のほうまではちゃんと見えない。そっちのほうに池みたいなのが掘られてて、そこに入ってるヒトがいる、っていうのがようやくわかる程度だ。

ボクはカーくんを抱いてそっちに近づいた。

牢屋に掘られた池の中にいたのは、〝うろこさかなびと〟だった。上半身がキレイではかな

げな女のヒトで、下半身が銀色に光るウロコを持った魚というモンスターだ。

「このタオルは、キミが？」

「はい。カーバンクルさんに手伝っていただいてぇ」

問いかけると、うろこさかなびとさんは、ちょっと哀しげな緑色の眼でボクを見つめてそういった。

「どうもありがとう」

「いいえぇ、どぉいたしましてぇ」

なんだか、聞いててアクビが出そうな口調だ。でも、ボクを介抱してくれたのは確か。感謝感謝。

「キミは、どうしてここに入れられたの？」

「ぷよぷよ大司教がぁ、この城の新しい領主様のペットにしようと私を捕まえたんですぅ。だけどぉ、それを断ったらぁ、牢屋に入れられてしまったんですぅ……」

「ぐぅー……」

まるで、子守り歌みたいな口調のおかげで、カーバンクルはいつのまにか眠っちゃった。ボクもあやうく寝ちゃうところだったケド、なんとか持ち直して相槌をうった。

「なるほどねぇ……」

ぷよぷよ大司教はボクも知ってる。黒いローブの裁判長が、そう名乗ってた。

新しい領主様のことも、ちょっとは知ってる。ちょっと前に、先代の領主様が亡くなって、代替わりしたんじゃなかったっけ？

なんだか、イヤな予感がするぞぉ……。また、とんでもない事件が起こりそうなカンジ。もう起きてるって気はするケド……。

「私ぃ……」

うろこさかなびとさんは、すがるような眼でボクをみつめた。

「次の満月までに、故郷の〝妖精の泉〟に戻らないとぉ、力がなくなって死んでしまうんですぅ」

「ええっ！　それはタイヘン！」

ボクもこのままじゃ死刑にされちゃうし、なんとかしなきゃ！

とはいうものの……。

ボクは牢屋の扉のほうを見た。ブ厚そうな鉄でできていて、鉄格子がはめられた、ちっちゃな窓があるだけ。その鉄格子は狭くて、カーくんでも抜けられそうにない。扉はかなり頑丈そうだけど、強力な攻撃呪文なら、なんとか破れそう。でも、おっきな音がするから、すぐ騎士さんたちが駆けつけてきて、別の牢屋に移されちゃうのがオチだ。

どうしよう……。

「う～ん……」

床に座り気持ちよさそうに寝てるカーくんを膝の上に置いて、ボクは腕を組んだ。
なんとかウマイ手を見つけないと、ボクもうろこさかなびとさんも、ぷよぷよ大司教に殺されちゃうよ……！

＊　＊　＊

「わたくしはイヤですわ」
『なぜだ？』
テラスのイスを蹴倒さんばかりの勢いで立ち上がったサタンは、不機嫌を露にした表情のルルーを見下ろした。サタンの顔からは、突然に舞い込んできたニュースによる憤慨も、驚愕も消え、奇妙な落ち着きを見せている。むしろそれは、ルルーの答えをなかば予測していたような冷静さだった。
『お前は、アルルを助けに行かんというのか？』
「そうですわ」
サタンとは眼をあわせずに、ルルーは答えた。プイとよそを向いたというより、サタンに胸のうちを気取られるのを避けるためのように見える。
「わたくしには、アルルを助ける義理なんてありませんわ。それに、わたくしは、敵に塩をわ

ざわざ送るほど、お人好しじゃありませんの。サタン様も、あんなボゲボゲ娘などほっといて、お座りなおしくださいな」

『お前、アルルとは同窓の仲だろう』

ルルーはアルルよりふたつ年上だが、魔導学校時代は、なんの因果か卒業まで同じクラスだった。魔導師を目指す者すべてに対して門戸を開いている魔導学校は、年齢など関係ないのだ。事実、ルルーたちの同窓生の中には、壮年や老年の者もいる。

それ以前に、ルルーとアルルは、魔導学校を目指して共に旅をしてきた仲だった。アルルと出会い、いつか彼女を越え、サタン様に認められるような魔導師を目指すと決意したルルーは、なかば強引にアルルと魔導学校を目指したのだ。

『それに、オレは知っているぞ』

からかうような笑みを浮かべながら、サタンは続ける。

『お前が、友人であるアルルを見捨てられるほど、冷酷で悪い娘ではないことをな』

「……!」

あやうく、驚愕を表に出すところだった。しかしルルーは、なんとか踏みとどまり、視線をサタンからそむけたまま、平静を保つ。

サタンの言葉は、図星だった。

たとえ恋敵であっても、愚かであっても、アルルは、かつては共に旅をした仲間だ。長い人

生のうちで得られる、数少ない親友のひとりかもしれない。それに、彼女に出会って初めて、魔導師になることを決意したわけで、ある意味では純粋な魔導師としての――ひとまずの――目標の人物でもある。
　サタンのいうとおり、そんなアルルの危機を黙って見過ごせるほど、ルルーは非人道的な人間ではなかった。これまでにも――決して誰にもいっていないことだが――、オッチョコチョイながらも一流の魔導師めざしてひたむきに頑張るアルルの身を、何度案じてきたことか……。
「………」
　それでもルルーは、精一杯の虚勢をはって、冷静さを保ち続けた。
『どうしてもイヤだというのなら……』
　サタンは出し抜けに心持ち屈みこみ、右手でルルーのあごにそっと触れた。そのまま、自分を向かせる。まるで、口づけを誘うかのように。
　サタンの眼が、ルルーの心の動きを読み取るかのように、彼女のそれを見つめる。
『このオレの頼み、というのならどうだ？』
　ここで、即座にうなずいてもよかったのだが、ルルーの気丈な性格が、それを許さなかった。
「ひとつだけ条件がありますわ」
『なんだ？』
「どうして、あの娘にサタン様は執着なさるのか、その理由をお聞かせください」

『よかろう。アルルを無事に救出できたら、教えてやる。本当の理由をな……』
ルルーは内心、うまく逃げられたと思ったが、本当の理由を聞くことができるのなら、それでいいとした。もともと、虚勢から出した条件だ。
「わかりましたわ、サタン様。行きましょう」
ルルーは立ち上がった。主人のその動きにあわせて、ミノタウロスも起立し、イスにたてかけておいた巨大なオノを帯びる。
「キャメロット城に行くんですの？」
『いや、まずはルシファーのところだ。あいつがついていながら、なぜアルルをみすみす逮捕させてしまったのか、それを問い詰めてやる』
「では、ワープの呪文を……」
『それは必要ない。翔んで行ける』
いうが早いか、サタンは呪文を唱えはじめた。
『たおやかに疾りたる風の精霊たちよ……。我がもとに集いて、我らを運べ……！』
シュォォォォォォォッ……！
やがて、サタン、ルルー、ミノタウロスの身体にほのかな光を帯びた風が集まり始めた。
『よし、翔ぶぞ』
「え？　ど、どうやって……？」

『オレの後に続いて、そのままジャンプすればいい。行くぞ！』
「はいっ！」
「ぶもー！」
サタンを筆頭に、ルルー、そしてミノタウロスの順で三人は地面を蹴った。
ブォッ！
三人の身体が、風の精霊の力で空高く舞い上がり、目的地に向かって一直線に進む。全力疾走する騎馬よりも早い速度だ。
ほどなくして草原がとぎれ、眼下をルルーにとっては懐かしい、魔導学校の校舎が通過していった。そして、再び草原が広がりはじめ、前方にサタンのものと同じ造りの白い家が見えてくる。あれがルシファーの家だ。魔導学校にいたころ、ルルーが何度となくルシファーのお茶を相伴しに訪れたところである。
そのとき初めて、ルルーは、自分たちの家が地理的におおよそどの位置にあるのかを把握した。太陽を見て方角を確認すると、さらによくわかる。
なんとサタンとルシファーの家は、魔導学校をはさんで、南北に対称な位置にあった。サタンの家が北で、ルシファーのほうが南だ。いまは空を飛んでいるから正確なところはわからないが、おそらく、歩いてもそうたいして時間はかからないだろう。近所、といっても差し支えないくらいだ。

「サタン様のお屋敷って、ルシファー先生のところとこんなに近かったんですのね」
前方を飛ぶサタンに向かって、ルルーはたったいま感じた驚きを口にした。
『そうだ。だから前にいったろう、アルルに手を出そうと思えば、いつでもできるとな』
「はぁ……」
以前にその言葉を聞いたとき、ルルーは、多分サタン様からルシファー先生の家はそれほど遠くないのだろうと推理した。しかし、これほどまでに近いとは思わなかった。
やがて風の精霊たちは、見えない力で三人をルシファーの家の庭に着陸させた。
着地するが早いか、サタンはずかずかと庭から玄関へと続くちょっとした階段をあがり、ノッカーを荒々しく叩く。
ゴンゴンゴン！
『ルシファー！　開けろ！　オレだ』
「は、はぁい……」
怯えた返事をしながら玄関を開けたのは、ルシファーではなく、キキーモラだった。
「あ、サタン様」
来客の姿を見て、キキーモラは安堵の表情を見せた。彼女は、またあの騎士団がやってきやしないかと心配していたのだ。
サタンは、その騎士団と大差ない威圧感をもって、キキーモラを見下ろす。

『ヤツはどこだ？』
「ルシファー様は、昨晩から外出しておられます」
『ちっ、逃げたか……？』
「サタン様へ、ルシファー様からご伝言があります」
『なんだ？』
「ルシファー様は、事件を根本から解決するために行動なさるそうです。ですので、アルルちゃんの救出は、サタン様にお任せする、と……」
『ほほう……』
不意に、不機嫌を露にしていたサタンの表情が、勝ち誇ったような笑みに変わった。
サタンは、ルシファーのこの伝言を、敗北宣言と受け取ったのだ。
彼は以前から、双子の弟がアルルに対して自分と同じような感情を抱いていることを知っている。かつて〝日出る国〟でぷよぷよ大明神に兄弟そろって囚われたとき、本人の口からそれを確認した。
そのルシファーが、アルルのことを自分に任せるという。これが敗北宣言でなくて、なんなのか！
しかし、ここで有頂天になってはならない。ルシファーのヤツは策士だ。それもハメられた当人——特にサタン自身——にとっては、かなり悪質な部類の。子供の頃から、彼のいいなり

になって調子に乗り、何度痛い目にあってきたことか。
いかにルシファーの伝言が敗北宣言に取れると思っても、慎重に事を運ばなければならないだろう。それさえ注意していれば、必ずやアルルを自分の手中に収めることができるはずだ。
『よし！』
心の中での考えに結論が出たところで、サタンは声をあげた。
『キキーモラ、アルルはオレが必ずなんとかするとヤツに伝えろ』
「わかりましたぁ」
『ひとまずオレはキャメロット城に行く。ルルー、ミノタウロス、ついてこい！』
バサァッ！
例によってマントを大仰にひるがえし、サタンは踵をかえした……。

二　牢屋を出たのはいいけれど……
……そして、ウラで渦巻く大司教の陰謀！

見張りの騎士さんたちを、ボクとうろこさかなびとさんのダブルな色仕掛けでだまし、なん

とか牢屋から脱出することができた。
　ところが、これが大誤算！
　よくよく考えたら、うろこさかなびとさんは下半身が魚だから、地面を歩くことができないのだ。しょうがないので、手近にあった桶に水と彼女を入れて、それをロープを使ってボクが背負っていくことになった。
　これがまた、重いのなんの！
　うろこさかなびとさんはスリムだから、彼女だけならなんとかなったんだろうケド、これに水と桶の重さが加わってるからタマラナイ。だからといって、水がないと彼女は干からびて死んじゃうから、水を捨てるワケにもいかないし……。
　おかげで、出口を探して歩くボクの速度は、カメさんやカタツムリさんに負けないくらい遅い。おまけに、さっきまで気を失ってたショックで、どこをどうやって通って牢屋まで連れられたか忘れちゃった……。
　ボクらの目の前にはいま、石造りの地下回廊が伸びている。この地下回廊が、また迷路みたいに複雑なのだ。分かれ道があって、そのうちの一方を進むとまた分かれ道があって……延々とこれのくり返し。左右の壁沿いにずらりと並んだ燭台で、ロウソクがチラチラと燃えていて明るいのが唯一の救いってカンジだ。でも、景色に変化がないから、なんだかおんなじところをグルグルと回っているような気になってくる。

「はぁ〜あ……」

「すいませぇん、重くてぇ……」

ボクがため息をつくと、背中のうろこさかなびとさんが心からすまなそうにいった。

「だ、だいじょぶだから、心配しないで……」

とはいったものの、実は、かなりキツイ。こんなとき、シュテルン博士とかミノちゃんとかいてくれたらなぁ、と思う。あのふたりなら、桶を背負ったボクごと、軽々と運んでくれちゃうんだけどなぁ……。

「ぐっぐぐっぐっぐっぐっ」

ボクの頭のうえで、カーくんが踊ってる。見えないケド、ちっちゃな足をピョコピョコさせながらステップを踏んでるのが感触でわかる。彼なりに、ボクをがんばれがんばれって元気づけてくれてるのだ。

がんばって、早く出口を見つけなきゃ！　でないと、ボクらが逃げ出したことがバレちゃう。そうなったら、また捕まっちゃうのは時間のモンダイだ。なにしろこっちは重いものを背負ってるから、走って逃げるなんてできないんだから。

などと考えながら歩いてると、また分かれ道に突き当たった。無意識的にその一方の角を曲がった途端、

バッタリ！

ボクらはいきなり、ふたりの騎士さんたちに出っくわした……！

＊　＊　＊

キャメロット城、謁見の間——。

いまは新しき領主に謁見を求める者もなく、豪奢な装飾の、ビロードの緞帳が降ろされ、玉座は完全な密室となっている。

その玉座の目の前に立ち、アルルに死刑をいい渡した張本人——ぷよぷよ大司教は、そこに座る若き領主を見下ろしていた。

いかな大司教という高い地位にある者とはいえ、領主を目の前にしてひざまずきもせず、あまつさえ見下ろすなど、一介の城づきの僧侶がしていい行動ではない。その場で手討ちにされても、文句はいえないだろう。無論、本当に斬り殺されてしまったら、化けて出ない限り文句はいえないが。

しかしキャメロットの若き城主は、そのような無礼を働く大司教に対して、寛大にも怒るそぶりすら見せなかった。

それどころか、視線はまっすぐ前を見ているものの、まるで魂が抜けてしまったかのように焦点がまったくあっていない。背筋をピンと伸ばした姿勢で玉座にすわり、ピクリとも微動だにしないその姿は、神か悪魔によって造られた彫刻か蠟人形のようだ。不気味なほど整った顔立ちと、すぎるほどバランスのよいスリムな体格が、彼の妖しさを倍増させている。

「フ……」

目深に降ろしたフードの奥で、沈黙の領主を見つめていた大司教が、不意に邪悪な笑みをもらした。頭の中で巡らせていた考えが、あまりにもおかしく、嬉しくて、ついに我慢しきれなくなったという感じだ。

なにしろ、計画が思い通りに進んでいるのだ。これが笑わずにいられようか。何年も前から城付きの僧侶としてキャメロットに入り込み、時を待っていた甲斐があったというものだ。

いま展開している計画において最も邪魔な存在であるアルル・ナジャを、とにもかくにも捕らえることができた。それだけでもう、計画は半分ほどクリアできたといっても過言ではない。ルルーとかいう娘もいるが、こちらはアルルを処刑し次第、手を下すことになっている。

もう少しだ、もう少しで我が計画は成就する……！

「申し上げます！」

突然、大司教の思考に水を差すかのように、ガチャリという鎧の音とともに緞帳の向こうから声がした。

「何事だ」
少々語気荒く、大司教は応える。相手の声の慌てぶりからして、よい報告でないことは明らかだ。
「アルル・ナジャが脱獄いたしました！」
「なんだと！」
「現在、うろこさかなびととともに逃走中と思われます。鋭意捜索中ですので、見つかるのは時間の問題かと……」
「わかった……。お前も捜索に当たれ。見つかったという以外の報告は聞かんぞ」
「はっ！」
「まったく……」
緞帳の向こうで慌てて去っていく鎧の音を聞きながら、大司教はつぶやいた。まったく、格好ばかり立派で、この城の騎士どもはちっとも役に立たない。
「…………」
しばらく思案したのち、大司教はおもむろに懐から呪符を取り出した。それを足元に置き、呪文を唱える。
「札に封印されし悪魔の使いよ、古の血の契約に基づき、我の前に現れ出よ……！」
ボッ！

呪文が唱えおわると同時に、呪符が爆発的な煙を発した。その煙の中から、大司教に向かってひざまずく人影が現れる。炎のように逆立つ銀色の髪に、一角獣のような額の角、先が鋭く尖った両耳……。

その人影を見下ろして、大司教は命令する。

「アルル・ナジャを見つけしだい捕らえよ。抵抗するようなら、殺しても構わん。ただしその場合、遺体は必ず回収しろ」

「御意」

ボッ！

再び爆発的な煙に包まれ、悪魔の使いは姿を消した。

「ご報告いたします！」

煙が晴れる頃、また緞帳の向こうで声がした。さっき、アルル脱獄の報告をしにきた人物とは違う声だ。

「なんだ？」

「サタンと名乗る者が、大司教様にお目通りを願っております」

来訪者の名を聞いた瞬間、大司教の顔がこわばった。

「サタンだと……？」

＊　＊　＊

「わぁ――――っ！」

ボクは大声をあげながら、地下回廊を全力疾走した。もちろん、うろこさかなびとさんを入れた桶を背負ったままで。さっきまで、重くて重くてどうしようとか思ってたのが、ウソみたいなスピードだ。

通路のカドを曲がった瞬間に、見回りの騎士さんとバッタリ出っくわしたボクは、まるでオバケでも見たみたいに叫び声をあげて、まわれ右をした。そして、そのまま全力ダッシュ！

これが火事場のナントヤラ！

実は、見回りの騎士さんたちと出会った瞬間、そぉんなに驚いたワケじゃない。でも、ちょっとした計算が働いて、ボクは思いっきりおっきな叫び声をあげて、一目散に逃げ出したのだ。

相手がなにかする前にこっちがそうすれば、騎士さんたちはビックリするだろうと思ってね。

で、その作戦は大成功！　騎士さんたちはだいぶたってから、ボクらのコトをあわてて追っかけ始めた。

「待てぇ――っ！」

「やだよ――っ！」

騎士さんたちが重くて動きにくそうな鎧を着てるのも、ボクらにとってラッキーな方向に働いた。なにしろこっちは、うろこさかなびとさんっていうハンデを、文字どおり背負ってるんだから。そのおかげで、差はほとんど縮まってない。

モンダイは、めっちゃくちゃな方向に走ってるってコト。騎士さんたちを振り切るのに精一杯で、出口探しどころじゃない。自分がいまどこにいるのかも、牢屋のあった方向がどっちなのかもわかんなくなっちゃった。

そんなこんなでデタラメに走ってるうちに、最初はふたりだった騎士さんたちの数が、どんどん増えはじめている。鎧の音や声でそうだなってわかるだけで、何人いるかなんて数えてないケド。

多分、っていうかカクジツに、ボクらが逃げ出したことがバレちゃったのだ。そりゃぁ、大騒ぎしながら走ってればムリもないし、ボクらが牢屋を抜け出してから、だいぶ時間もたってるはず。

こうなったら、騎士さんたちのほうが有利だ。多分、向こうは地下回廊の構造をよく知ってるだろうから、先回りしてくるのは時間のモンダイだ。

だからといってボクのほうは、立ち止まって、なんかウマイ手を考えるなんてコトはできない。そんなコトしたら、あっという間に追いつかれちゃう。いまはほとんど慣性で走ってるよ

うなものだから、止まった途端に疲れがドッと出てきて、もう二度と動けなくなっちゃうだろうし……。

どうしよう……。

と悩みながらも、ボクはいくつもある分かれ道をデタラメに曲がりつつ、最初の勢いを利用して全力疾走し続ける。

「あらぁ……？」

突然、背中のうろこさかなびとさんが、間延びした素っ頓狂な声をあげた。

「ど、どうしたの？」

「誰も追ってこなくなっちゃいましたわぁ」

「へ？」

キキィッ！

ボクは急ブレーキをかけた。その途端に、案の定、いままでの疲れがドッと押し寄せてくる。

「ちょ、ちょっと桶を降ろすね」

「はぁい」

「だぁ〜、疲れたぁ〜〜……」

ボクは背中の桶を降ろして、呼吸を整えた。確かに、そのあいだにも騎士さんたちの声や鎧の音が近づいてくる様子はない。振り向いてみても、やっぱりイカツイ鎧の姿はなかった。

そこで初めて、ボクは廊下が暗くなってることに気がついた。よく見るとここには、燭台がない。ボクらが来たほうの廊下がかなり明るいから、モノが見える程度にはなんとかなってるってカンジだ。

それでもさすがに、廊下の先には光は届いてなくて、奈落の底とか地獄とかに続いてそうな闇になっている。

お城とかによくありがちな、〝開かずの間〟に続いてそうな廊下だ。モノスゴイ魔物とかが封印してあるような……。もしかしてホントにそうだから、騎士さんたちはここまで追って来なかったの……？

「どうしましょう……」

うろこさかなびとさんが、ボクの心を代弁するようにいった。

ホントにどうしようかなぁ……。

もと来た廊下に戻ったら、たっくさんの騎士さんたちが待ち構えてるだろうし、このまま先に進んじゃうのも、なにがあるかわかんなくてコワイ。それにもう、なんにもしたくないくらいに疲れちゃったよ……。

「はぁ～あ……」

ため息とともに、ボクは床にへたりこんだ。とりあえず、騎士さんたちはここまで来れないみたいだし、いまのうちに体力を回復させとかなきゃ。

「ぐー！」
しゅたっ、とカーバンクルがボクの頭の上から飛び降りた。そして、トコトコと暗闇のほうに向かって歩き出す。
「あらら ぁ、行っちゃいましたわぁ」
「歩く元気があって、いいなぁ……」
……って、うらやましがってるバアイじゃない！
「カーくん！　そっち行ったら危ないよ！」
とボクがいうと、カーくんはくるりと振り向いて、ぴょこっとちっちゃな右手をあげた。
「ぐー！」
だいじょぶだいじょぶ、だからおいで。……っていってるみたい。
「ホントぉ？」
「ぐ」
ボクの頭よりもちっちゃな身体を折り曲げて、カーくんはうなずく。
気力を振り絞(しぼ)って、ボクは立ち上がった。カーくんがだいじょぶだっていうんなら、だいじょぶなんでしょう、多分……。
それに、ここでいつまでもジッとしててもラチがあかない。騎士さんたちのほうに戻って、また捕(つか)まっちゃうのもシャクだし、このまま先に進んでみましょう！

と心の中で元気を奮い起こして、ボクはカーバンクルのあとに続いて歩き始めた。そのとき、
「ああっ、置いてかないでくださぁい……」
後ろから、すがるようなうろこさかなびとさんの声が聞こえてきた。
そういえば、彼女を背負ってくの忘れてた……。

三　呪いをかけられた領主様！

……見えてきたぞ、ぷよぷよ大司教の野望！

通路を進んでいくと、どんどん暗くなっていく。ついに、ボクらが来た方向からの光も届かなくなっちゃった。それでもまだ、行き止まりかなんかに到着する気配はない。
「ライト！」
ボクは呪文を唱える。すると、ボクの目の前にゲンコツくらいの光の球が現れて、通路を明るく照らした。これで、暗闇でもこわくない。
歩いてくうちにわかったんだけど、この通路はゆるやかな坂になってるみたい。もちろん、先に行けば行くほど、深くなっている。

なんだか、ホントに奈落の底に続いてるみたいでヤだなぁ……。魔法の明かりがあるから、まだちょっと安心できるケド。
「こわいですわぁ……」
「う、うん……」
怯えながらうろこさかなびとさんを背負って歩くボクを尻目に、カーバンクルはずんずんと先に進んでいく。
ホントに大丈夫なのかなぁ……。ちょっちシンパイ……。
なんてビクビクしながら、ボクらは歩いた。ホントはヘトヘトに疲れてるケド、こわさが先に立っちゃって、それどころじゃない。
やがて、頑丈そうな鉄の扉に突き当たった。とりあえずは、ここが通路の終着点みたい。
扉は、ボクらが閉じこめられてた牢屋よりもはるかに硬そうで、大きい。まぁ、人間よりおっきなモンスターが出入りできるほどじゃないケド。鉄格子のはまったちっちゃい窓もない。
カーバンクルが、ちっちゃな手で扉をペンペンと叩いた。
「ぐー！」
「え？　ここを開けろって？」
どうやって……？
こんな重そうな扉を開ける力なんか、もう残ってないよ。それに、カンヌキとか鍵とかがつ

いてないから、魔法でロックされてるんだろうし……。

「ぐー！」

ボクが悩んでると、カーくんは右手を振り上げて、それを扉に向かって振り降ろすしぐさをした。呪文を使えっていってるみたい。まぁ、呪文一回くらいを唱える元気ならなんとか残ってるケド……。

大丈夫かなぁ、扉の向こうにコワイ魔物とかいたりして、物音にビックリして怒ったりしないかなぁ……。

でもこのままじゃ、牢屋に入れられてるのとあんまり変わんないし、状況を打破する望みがあるんなら、それに賭けてみましょう！

ボクは、うろこさかなびとさんが入った桶を降ろした。

「カーくん、どいてて」

「ぐ」

扉をジッと見つめて、ボクは深呼吸をした。そして……！

「ファイヤー！」

ドッカ――――ンッ！

至近距離で唱えた炎の呪文は、爆音とともに重そうな扉を跡形もなく蒸発させた。

爆風と煙(けむり)が完全に消え去ってから、ボクは、さっきライトの呪文で造った光球を扉——があった場所——の向こうに飛ばした。

そこは小さな部屋(へや)になってて、ボクらがいた牢屋よりもずっと狭(せま)い。ボクの身長はそんなに高くないケド、それでも横になって寝(ね)れないくらいだ。そんな部屋のすみっこで、なんか、ちっちゃいものがブルブルとふるえてる。

光球をそっちに誘導(ゆうどう)して見ると、それはくちばしを長くしたペンギンみたいなモンスター、〝飛べない鳥〟だった。カーバンクルとおんなじくらいの重そうな鉄球と右足とが、クサリでつながれてる。

「あの〜……」

「ぴよ……？」

ボクが声をかけると、飛べない鳥さんは、ボートのオールみたいな羽でおおっていた顔をこっちに向けた。眼がカーくんみたいに丸くてちっちゃくて、カワイイ。

「キミは、誰(だれ)だぴよ？」

外見からは想像もつかないような、年頃(としごろ)の男のヒトみたいな声で、飛べない鳥さんはいった。最後の〝ぴよ〟っていうのが、その声のかっこよさをブチ壊(こわ)しにしてるケド……。

「ボクはアルル、黄色くてちっちゃいのがカーバンクルで、桶(おけ)に入ってるのがうろこさかなびとさん」

ひとしきり眺めて、飛べない鳥さんは、ボクらを悪者じゃないと判断したみたい。安心したように身体をこっちにむけていった。
「わたしの名は、アーサーだぴよ」
「アーサー……？」
どっかで聞いたコトがある名前だなぁ……。
「確か、キャメロットの城主様がおんなじ名前じゃなかったっけ……？」
ボクの言葉に、〝飛べない鳥〟アーサーさんは、ちょっと怒ったように羽をパタパタさせながらいった。
「同じなのではないぴよ、本人だぴよ」
「え――――――っ！　ホントにぃ？」
「ホントだぴよ！」
「でもでも、ボク、領主様が新しくなったときに肖像画を見たことあるよ。すんごくカッコイイ人だったじゃない？」
「それはダミーだぴよ！　わたしのほうが本物だぴよ！　ぷよぷよ大司教に呪いをかけられて、こんな姿にされてしまったんだぴよ！　それで、こんなところに閉じこめられてしまったんだぴよ……」
「はぁ～……」

「まだ信用してないぴよ？」

「い、いや、そ～いうワケじゃないんだケド……。どうして、大司教が領主様をそんな姿にする必要があったのかなぁ～って思って……」

「それは、ヤツの野望を達成するためだぴよ」

「野望……？」

とボクが聞き返すとほぼ同時に、後ろから恐ろしげな声が響いてきた。

「見ぃ～たぁ～なぁ～……？」

＊　＊　＊

キャメロット城を訪れたサタンは、応接室に案内しようと群がる衛兵や執事らを無視して、ズカズカと一路謁見の間を目指した。槍をつきつけてきた者もいたが、文字どおり悪魔の眼光でそれを跳ねつける。

謁見の間に入ると、玉座に向かって伸びる、真紅のビロードの絨毯がまず眼に飛び込んできた。サタンはそれの先を睨みつけながら、絨毯を荒々しく踏みつけて進む。

奥の、演劇の舞台のように一段高くなっている場所に、何者かが立っていた。彼の背には緞帳があり、公式的な謁見では、その向こうから玉座にすわった城の主が顔を出すのだろう。

サタンを待ち構えるように立っていたのはしかし、領主ではない。服装から、サタンはそう判断した。

金モールの縁取りがついた、いくぶん宗教がかった漆黒のローブをまとい、ルシファーと同じようにフードを目深に降ろしている。そのために表情をうかがい知ることはできないが、フードからはみ出した縮れた長髪、口許、アゴのかたちから見るに、かなり若そうだ。自分と同じように、あくまでも外見上だけかもしれないが。

『領主はどこだ？』

挨拶もせずに、いきなりサタンは聞いた。

「お初にお目にかかります、私はこの城に仕える大司教です。城主アーサー様はまだお若くていらっしゃるので、執務に関する全権を私に任せてくださっております」

大司教は、慇懃無礼に挨拶する。〝魔界の貴公子〟サタンの名を知っている。だからこそ、衛兵からサタン来訪を告げられたとき、一瞬だけではあるが表情をこわばらせたのだ。

「御用でしたら、私がお伺いいたしますが……？」

『…………』

サタンは、大司教とやらの言葉に、ウソがあることまでは見抜いていた。だが、どれがそれかまでは、まだわからない。一部分か、それとも全部か……。

まあいい……。

と心の中でかぶりを振り、サタンはひとまず、本来の目的を実行することにした。ヤツがどんなことを考えていようが、オレには関係ない。もしそれが自分の障害になるようならば、そのときにオレの圧倒的な力を思い知らせてやればいい。

『オレのアルルを返してもらおう』

サタンはいった。

「非常に残念ですが、それはできません」

うわべだけさも申し訳なさそうに、大司教はゆっくりとかぶりを振る。

『なぜだ？』

「号外をご覧になりませんでしたか？　彼女は罪人だからですよ」

『〃ぷよ類憐れみの令〃の著しい違反、とやらか？』

「そうです」

うなずく大司教を、サタンは腕を組んで睨みつけた。

『ずっと気になっていたのだが、いつそんな令を施行したのだ？　オレはちっとも知らなかったぞ。それに、そんなものを作った理由はなんだ？』

「通達に関する不手際については、心よりお詫びいたします。なにしろこちらとしても、城主の交替という時期と重なってしまったもので……。また、宗教上の理由、というのが第二のお

答えです。ですからこうして、私がお仕えしているわけです」
ふん、とサタンは心の中で鼻を鳴らした。
先代領主の急死といい、わけのわからぬ令の施行といい、アルルの逮捕といい、あまりにも突発的な事件が多すぎる。そのすべてに、いま目の前でサタンを見下ろしている大司教とやらが関わっているのは間違いない。そんな事件を引き起こして、いったいこの大司教は、なにをしようというのか……？
一方の大司教は、怪訝そうなサタンの表情から、あらゆる嫌疑が自分に向けられていることを悟った。鋭い洞察力や、そのほか高い能力をもつサタンは、できれば敵にまわしたくない人物である。自身の野望の、多大なる障害になるに違いない。いっそのこと、うまく仲間に引き入れてしまうか、それとも、奇襲をかけてこの場で排除してしまうか……。
『…………』
「…………」
それぞれの思いを胸に、サタンと大司教は、しばし無言で視線を戦わせた……。

＊　＊　＊

「見られたからには、生かしてはおけない……」

ボキボキッ……！

と指を鳴らしながら、人影が暗い通路のほうから近づいてくる。ボクはとっさに、〝飛べない鳥〟アーサー様が閉じこめられていた牢屋の入り口に置きっぱなしだった、うろこさかなびとさんの入った桶を抱え、かばうようにしながらひとまず牢屋の中へと入れた。

「お前たちに恨みはないが、この場で死んでもらう……」

ライトの呪文で作った光球が、だんだんその人影の姿をハッキリさせていく。

革のグローブを両手にはめ、格闘家の胴着みたいなシンプルな服に身を包んだ、わりとカッコイイ顔立ちの男の人――というよりは男の子ってカンジ――だ。

だけど、人間じゃない。

銀色のキレイな髪は炎みたいに逆立っていて、おデコには立派にまっすぐ伸びたツノ、とんがった耳……。悪魔の使い――デーモンサーバントだ！

「さぁ～て、どいつから先にオレの必殺パンチを食らいたい……？」

舌なめずりするようなデーモンサーバントを、ボクは、カーバンクル、〝飛べない鳥〟アーサー様、うろこさかなびとさんを背中でかばいながら睨みつけた。

とはいうものの……。

ボクにはもう戦う力なんて残ってない。うろこさかなびとさんを背負って走りまわってたおかげで、もうヘトヘト。魔導力だって残ってない。走ってるときに、魔導力まで体力――気力

にまわしちゃったからだ。ファイヤーやアイスストームみたいな簡単な呪文なら、魔導力がなくてもいいんだケド、疲れちゃって疲れちゃって、それを唱える元気もない。それに、デーモンサーバントはかなり強力な相手だ。ファイヤーやアイスストームなんかが効くかどうか……。

「へへへっ……」

なぁんて考えてるあいだにも、デーモンサーバントはジリジリとボクらに近づいてくる。

早くなんかテを考えないと、あっという間にオダブツになっちゃうよ！　もう、攻撃を避ける力も、攻撃を受けて耐えられるだけの体力もない……。

ひとつだけテがあった……！

ファイヤーとかみたいに魔導力がいらなくって、強力——になる可能性のある呪文が……！

ボクはいちるの望みをかけて、精一杯の声でその呪文を唱えた。

「るいぱんこ！」

シーン……。

ボクの声は、空しく壁に反射して、そして消えていった……。

これが、〝るいぱんこ〟の最大の弱点。ものすごぉーく強い破壊力を持つ代わりに、ときたまこうして、なぁんにも効果を表さないことがあるのだ。

だけど、こんな大ピンチなときにそれが起こんなくたって……！

もう泣きそう。神サマはボクを見捨ててしまったの……？

「なにをやろうとしたのかわからんが、残念だったな……」
いいながら、デーモンサーバントはがばっと右手を振りかぶり、
「くらえっ！」
ボクめがけて渾身のパンチを繰り出した！
その瞬間……！
「ぐー！」
ビシィッ！
ボクの後ろからカーバンクルが飛び出して、デーモンサーバントのパンチをちっちゃな両手で受け止めた。
「ナニィッ！」
「ぐー！」
どかばきどかばきどかばきどかばき……！
デーモンサーバントが驚いてるスキをついて、ちょこまかした、だけど強力なパンチキックの連打を浴びせる。
必殺の〝カーくん乱舞〟だ！
「ぐー！」

バキィッ！

「バカなぁ——っ！」

最後のイッパツで、デーモンサーバントの身体が大きく吹き飛ぶ。

「トドメだぴょ」

今度は、〝飛べない鳥〟アーサー様が前に出た。そして自分の足につながれた、大きな鉄球を持ち上げて、デーモンサーバントに向かって投げつける！

ぶぉんっ！

「ぎゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」

無情にも鉄球は、床に倒れたデーモンサーバントに襲いかかった……！

*　*　*

『…………』

「…………」

謁見の間で、サタンと大司教は睨み合っていた。

そこへ突然、大司教の傍らに、デーモンサーバントが煙とともに現れた。大司教が呼び出し

シュッ
くらえっ
ぐっ
ぐいっ
はっ

たときとはうってかわって、身体中キズに覆われ、息も絶え絶えの瀕死状態である。
「す、すいません……。やられました……」
それだけいうと、デーモンサーバントは大司教にもたれかかるように気絶して倒れた。
その突然の出来事に、サタンも大司教も、しばし唖然としていた。
先にそのショックから立ち直ったのはサタンで、すかさず鋭い洞察力を働かせる。
おそらく、アルルは逃げ出したのだ。それを知った大司教が、デーモンサーバントを送り出したものの、返り討ちにあったに違いない。
さすがはオレの妃となる娘だ……。
サタンは心の中でつぶやいた。
彼に遅れて同様の結論を出した――こちらは洞察力を働かせるまでもなかったが――大司教は、なんとか平静を装いながら、サタンを再び見下ろした。
「ひとつ、取り引きをしませんか?」
『ほほう、どんな取り引きだ?』
「あなたにはもはや、何が起こっているのかおわかりのことでしょう。そしてあなたは、アルル・ナジャに接触しようと試みるはず。それを、できるだけ隠密裏に行ってほしいのです。そしてそれが首尾よく終了したら、すみやかに私に報告してください」
『なるほど……』

サタンは、ニヤリと口の端をつりあげながらいった。
『ようするに貴様が欲しいのは、アルル逮捕という事実だけなのだな？』
「そうです。そして、あなたが欲しいのは、アルル・ナジャの身柄でしょう？　こちらとしては、アルル・ナジャが脱獄してしまったという事実が他人に知られなければいいのです。あとはどうにでもできますし……。どうです？　悪い話ではないでしょう？」
『よかろう。貴様が何を企んでるかはわからんが、ひとまず取り引きには応じてやる。ただし、貴様のほうでアルルを押さえたら、即刻オレに引き渡すのを忘れるな！』
「それはもちろん。それが、取り引きというものでしょう？」
『よし』
バサァッ！
サタンはマントをひるがえし、威風堂々と謁見の間をあとにした……。

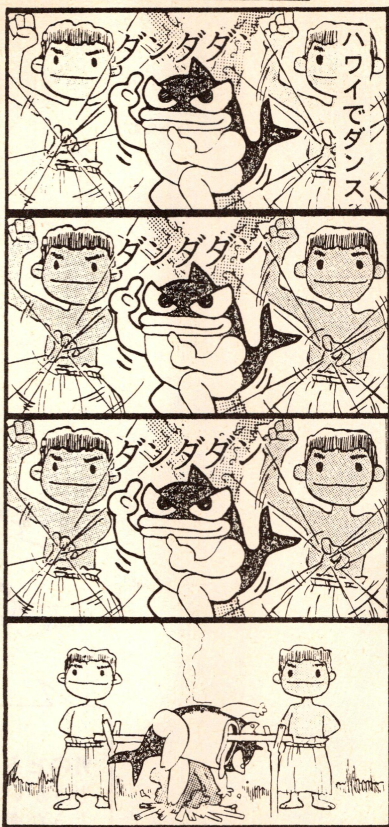
＊　　＊　　＊

「はぁ〜……」
デーモンサーバントがボロボロの身体で逃げるように消えてから、ボクは、その場にヘナヘナとへたりこんだ。

カーくんとアーサー様のおかげで、なんとかピンチを切り抜けることができた。感謝感謝。
いっつも食べて寝てばかりのカーくんだけど、ごくごくタマにこうしてスゴイ力を発揮して、ボクのピンチを救ってくれたりするのだ。それにアーサー様も、いくら飛べない鳥に姿を変えられてるといっても、さすがに一国の領主様ってところだね。
これで、とりあえずのモンダイはひとつ……。
「どうやって、ここを脱出しよう……？」
ボクはつぶやいた。
「抜け道ならあるぴよ」
いきなり、アーサー様はいった。
「そうなんですか？」
「ぴよ」
ボクが聞き返すと、アーサー様はうなずく。
「ここは、わたしが子供の頃、イタズラをしたときに閉じこめられていたところなんだぴよ。そのとき、抜け道を掘っておいたんだぴよ」
「じゃあ、どうしてそこを使って逃げなかったんですか？」
「この手じゃ、抜け道にはめ込んだ岩を外せないんだぴよ」
といいながら、アーサー様はペンギンさんみたいな羽をペタペタと振った。なるほど、確か

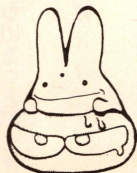
にその手じゃあ、岩と岩のスキマに突っ込んだりはできそうもない。
「ここだぴよ」
アーサー様は牢屋のすみっこに行き、床にはめ込んであるひとつの岩をペンペンと叩いた。
そんなに大きくはないケド、確かに、ボクでも通れそうな穴のフタにはちょうどいいカンジだ。
「この岩をどかせば、城の外に出る抜け道があるぴよ」
「もう、そんな力なんか残ってないよぉ……」
地下回廊をずっと走りまわってた疲れなんか、ゼンゼン回復してない。
「だいじょぶだぴよ。子供が持てる程度のものだから、そんなに重くない」
「はぁ〜あ……」
ボクはため息をつきながら、アーサー様のいるほうに四つんばいで行った。もう、立って歩く元気だってないよ……。
でもまぁ、なんとか脱出はできそうだ。そしたら体勢を整えて、ぷよぷよ大司教に反撃だ！
うろこさかなびとさんを〝妖精の泉〞に帰してあげなきゃいけないしね……！

水の章

ファイヤーダンス

原案＝木戸福三郎　絵＝むらさき朱

サキュバス
男のヒトをたらしこむことを生きがいにしてる悪魔。同じような悪魔にインキュバスがいるけど、こちらは女のヒト専門。

一　ドロだらけの脱出！

……はぁ～あ、おウチに帰りたいなぁ

「ぷはぁっ！」
ボクは木のフタを持ち上げて、水の中から顔を出すみたいに穴を抜け出した。頭の上の、木のフタのはじから、土や雑草とかがパラパラと落ちてくる。抜け道の出口にかぶせておいたフタが、誰にも見つからないように隠してあったみたい。まぁ、当然といえば当然だね。
その土とかが穴の中に入り込まないように注意しながら、フタをそっと穴の脇に置いて、ボクは穴から身体を引きずり出した。
穴のまわりは、鬱蒼――っていうホドじゃないケド、けっこう木々がたくさん生い茂っている――とした森だった。サンサンとした太陽の光が、木々のあいだから降り注いでいる。
「ん～っ……！」
ボクは大きく伸びをしながら、空を見上げた。お日サマの顔を見るなんて、何日ぶりだろう。

たぶん、一日とか二日くらいだとは思うんだけど、牢屋には窓もなんにもなかったから、わかんないのだ。なんだか、何週間とか何年も経ったようなカンジもする。
ルシファー先生はどうしてるかなぁ……。
ふと、ボクの頭の中に、ボクのことを探してあちこち走り回ってる先生の姿が浮かんだ。先生のコトだから、そんなにオロオロしたりはしないと思うんだけど……。
やっぱり、ボクのこと心配してくれてるのかなぁ……。
先生って結構ノン気なとこあるから、お手伝いのキキーモラちゃんと一緒に、ヨロシクお部屋の掃除かなんかしてたりして……。って、そんなコトはないか。
「おぉ～い、早く出してくれだぴよ」
「あ……！」
穴の中からの、悲痛なアーサー様の声で、ボクは我にかえった。いまはとりあえず、アレコレ考えてる場合じゃない。みんなを出してあげなきゃ。アーサー様は人間みたいな手がないし、カーくんはちっちゃいし、うろこさかなびとさんは足がない。だから、穴から出ることができないのだ。
「……？」
ボクは穴の中に右手を突っ込んで、〝飛べない鳥〟アーサー様の羽をつかんだ。
あり？　なんかカタイぞ、この羽。まぁいいや。

ボクは畑のダイコンを抜くときみたいに、力を入れてひっぱった。飛べない鳥さんの身体はちっちゃな子供くらいしかないんだけど、足に鉄の球がクサリでつながれてるので、けっこう重い。

「よぉ〜いしょっ！」

ずぼっ。

アーサー様の身体が出た。そのとき初めて、ボクがつかんだカタイものの正体がわかった。

「ん〜〜〜〜〜っ！」

口をふさがれて、苦しそうにアーサー様は両方の羽をパタパタさせる。ボクがつかんだのは、アーサー様のくちばしだったのだ。

「ああっ！　ゴメンなさい！」

ボクは思わず手を放した。やっぱ、人間、慌てるとロクなことがないってのはホントで、穴から出してそのまま手を放しちゃったもんだから、さぁタイヘン。

「ぴよ〜〜〜〜〜〜〜っ！」

〝飛べない鳥〟アーサー様は、また穴の中に落っこちた……。

＊　＊　＊

巨大で荘厳な造りの城門を、ひとりで出てきたサタンを見て、ルルーは少々いぶかしんだ。
アルルがいない……。
サタンは城主に直接かけあうと息巻いていたから、もしその城主がアルルは返さないとでもいおうものなら、いまごろ城の中は大騒ぎになっていたに違いない。しかし、アルルがいないにも拘わらず、サタンの顔には勝ち誇ったような笑みが浮かんでおり、歩き方も威風堂々としている。
少なくとも、よくないことが起こった、というワケではなさそうだ。
「アルルはどうなったんですの？」
ルルーは、サタンに駆け寄って聞いた。
『脱獄したらしい』
「へぇ……。あのボゲボゲ娘も、なかなかやりますわね」
と憎まれ口を叩きながらも、ルルーの顔には、心なしか安堵したような表情が浮かんでいる。
『うむ、さすがはオレの妃と見込んだだけのことはある。なかなか根性の入った娘だ』
「で、どうするんですの？」

アルルに対するサタンの賛辞に、今度はいくぶんムッとしながらルルーは聞いた。
『この事件の黒幕は、城にいる大司教とかいうヤツだ。たったいま、そいつと取り引きをしてきた』
「と、申しますと？」
『向こうとしては、要は、アルルが逃げたことが世間にバレなければいい』
「つまり、こっちがアルルを見つけても、秘密にしておけってことですね？」
サタンはうなずく。
『さすがルルー、聡明だな』
「お誉めいただいて光栄ですわ」
いいながら、ルルーはポッと顔を赤らめた。
そんな彼女を、サタンはなかなかに面白い娘だと心の中で評価した。コロコロと表情がよく変わり、一生懸命自分につくそうとする姿もいじらしい。これでアルルのような、潜在的魔力が備わっていれば妃に迎えてもいいのに、と思う。確かにルルーも、自分自身では自覚していない強大な力が眠ってはいる——サタンにも、そしてルシファーにも、それはすでにお見通しであった——が、アルルには遠く及ばない。
しかしやはり、魔界の将来を考えると……。
「どうなさったんですの？」

心配そうなルルーの声で、サタンは我にかえった。
『いや、なんでもない。気にするな』
「これから、アルルを探すのですね？」
しかしサタンは、ゆっくりと首を振る。
『その前に、〝闇の剣〟を探す』
「は？」
出し抜けなサタンの言葉に、ルルーは眼を丸くして素っ頓狂な声を上げた。
「闇の剣……、ですか？」
『うむ。ちょっと、この城にまつわる伝説を思い出したのでな』
「伝説とは……？」
『この城には代々、〝光の剣〟と呼ばれる聖剣が継承されているのだ。だからこそ、キャメロットが単なる領主に過ぎないにも拘わらず、一国に値する力を何世代も持ち続けていられるのだといえる』
我ながら、ルシファーのような論法だと思いながら、サタンは話し続ける。
『そしてこの現界には、その光の剣と対をなす、闇の剣というものがあるらしい。その両方をそろえると、この世の理が明らかになり、世界を手中に収められるほどの力が得られるという。人間の考え出したくだらん話だが、代々の城主は闇の剣を追い続け、しかしついに見つからな

かった』
「その、闇の剣とアルルと、いったいどういう関係が……？」
『アルルではなく、大司教に関係しているのだ。ヤツは腹黒い輩だ。うまく城主を騙して、この城にもぐりこんだに違いない。その目的が剣にあるのだとしたら、こっちがそれを先に押さえてしまおうと思ってな。そうしておけば、もしヤツが取り引きを反古にしたとしても、簡単に覆せる』
「でも、アルルは……？」
『心配か？』
意地の悪い笑みを浮かべて、サタンはルルーを見つめた。図星をつかれたルルーは、その心の中を見通すような眼差しを避けるように、慌ててよそを向く。
「そ、そんなことはありませんわ！」
『アルルはああ見えても、お前と同じでなかなかにパワフルな娘だ。カーバンクルもいるし、大抵の危機は乗り越えられるだろう』
「あんな、おマヌケ娘と一緒にしないで欲しいですわ！」
『そう怒るな。それに、闇の剣探しもそう時間はかからんはずだ』
「どうしてですの？」
『ルシファーのところに行けば、剣について書いてある本がひとつやふたつは見つかるだろう。

ヤツは、人間のくだらん書物を集めているからな』
「なるほど」
『それよりルルー、お前も気をつけろ。よくわからんが、〝ぷよ類憐れみの令〟というものが城から出てるらしいからな。お前にもヤツの手が及ぶかもしれん』
「まぁ……★」
ルルーは顔を赤らめて、眼をキラキラと輝かせた。
「サタン様に心配していただけるなんて……」
その姿を眺めながら、慌てたり、怒ったり、赤くなったり、アルルに似て表情の豊かな娘だ、とサタンは再び思った……。

*　*　*

いろいろ騒ぎがあったケド、とにもかくにもボクらは穴から出た。
あの牢屋からの抜け道は狭くて、はっていかなきゃなんなかったから、ちょっち疲れた。でもその代わり、うろこさかなびとさんも自分ではっていけるから、背負っていく必要がなくって、ヘトヘトっていうホドじゃない。
ただひとつだけ、モンダイが……。

「ドロだらけになっちゃいましたねぇ」
ちっとも困ってないようなノ～ンビリした顔で、うろこさかなびとさんがいった。
そう！
領主のアーサー様が、ちっちゃい頃に作った抜け道だけあって、中がものすごくセマイ。しかも、ちっちゃいコが掘れる程度にやわらかい土だから、ポロポロポロポロくずれていくのだ。だからもう、服も髪もナニもカモがドロだらけ。
「おウチに帰って、スグお風呂に入りたいよぉ」
「風呂はないが、池なら近くにあるぴよ」
ボクがブーたれると、アーサー様はボートのオールみたいな羽で森の奥を指した。
「この穴を出たあと、いつもそこの池で身体を洗ってたんだぴよ」
「そうなの？　じゃあ、早く行こう！」
「ぐー！」
「わたしも、水が恋しいですわぁ」
ボク、カーバンクル、うろこさかなびとさんの喜びに水を差すように、アーサー様はいった。
「先に行ってくるがいいぴよ。わたしはここで待ってるぴよ」
「どうして？　みんなで行ったほうがいいじゃないですか。時間の節約にもなるし、そのほうが楽しいし……、ねぇ？　カーくん」

「ぐー！」

だけどアーサー様は、プイとボクらに背中を向けちゃった。

そんなに、ボクらと池に行くのがいやなのかなぁ。ってムッとすると同時に、どうしちゃったんだろうって、ちょっち心配になってくる。

「わたしは……」

背をこっちに向けたまんまで、アーサー様はいった。

「大司教にこのような姿にされても、誇り高きキャメロットの城主だぴよ。女人と一緒に水浴びなどできるわけないぴよ」

「あ……」

そうだった。

アーサー様は、ペンギンさんをふたまわりくらいおっきくして、クチバシを長くしたモンスター、〝飛べない鳥〟の姿をしてる。だけどそれは、ぷよぷよ大司教の魔法で、ムリヤリ変えられちゃったものなのだ。

本当の姿は、ボクよりふたつかみっつ年上くらいの、すんごくカッコイイお兄さん。先代の領主様と交替した頃に、商店街の掲示板に張り出された肖像画を見たことがある。ルシファー先生とかサタンみたいな、なんだか人間を超えたような美しさに、シュテルン博士ほど豪快じゃないけど、初夏の、ちょうどいまごろの日差しみたいなサワヤカさがあって、さらにマサム

ネさんみたいなシブさもちょっち持ってる、そんな顔だった。
肖像画では、眼がうつろで、ちょっとアブなそうだなぁとかって思ってたケド、実際にこうして会ってみると、そうでもないね。礼儀も知ってるし、勇敢だし、いいヒトじゃない。ただ、姿が飛べない鳥になっちゃったおかげで、声が〝ぴよぴよ〟だけど……。
つまり、表がモンスターでも、中身はリッパな年頃のお兄さんなワケだ。それじゃぁ確かに、ボクらと一緒に水浴びなんて恥ずかしくてできないよねぇ。それが目的でここまで来たワケじゃないから、水着だって持ってきてないし……。
ふと、ボクの頭にある光景がよぎった。
ボクと、カーくんと、うろこさかなびとさんと、それから本当の姿のアーサー様とで、水着もつけずに水浴びしてる姿が……。

カァ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ……！

は、恥ずかしいっ……！
アーサー様の本当の姿を忘れてたとはいえ、要するにボクは、そういうコトを平気でやろうとしていたのだ。おヨメに行けなくなっちゃうよ……。
領主様は、それがわかったから、ボクらを先に行かせようとしたのだ。それをボクは、一緒に行こうとかなんとかいったりして……。ボクのコトを、おバカな娘だとかって思ったかもし

れないなぁ……。
ここはやはり、これ以上気まずくならないウチに、さっさと水浴びに行くしか……！
「じゃ、じゃぁ、行ってきますね」
ボクはギクシャクとまわれ右をして、さっきアーサー様が指した方向に歩き出した……。

＊　＊　＊

「くそっ……！」
誰もいない独房を見つめながら、大司教は憎々しげにつぶやいた。明かりの呪文で作り出した光球が、なぜか扉のない独房の中を、空しく、そして弱々しく照らしている。
サタンが城を去ったあと、大司教はデーモンサーバントの報告を自ら確認するために、この地下回廊の奥底にある独房へと足を運んだ。
果たして、そこは報告通りだった。
扉は恐らく魔法により跡形もなく消し去られ、そこに閉じこめておいた人物の姿もない。
「ん……？」
大司教はふと、独房の隅の、石造りの床が掘り返されているのに気がついた。近づき、屈みこんで見ると、そこにはモグラが掘ったような穴があった。ヤツらは恐らく、ここから脱出し

たに違いない。
「よく、こんな抜け穴を掘る元気があったものだ……」
大司教はつぶやく。
彼は知らなかった。彼が魔法で姿を変え、この独房に閉じこめておいた人物――キャメロットの若き城主、アーサーが悪戯ざかりの子供だった頃、先代の父王によって同じようにここに入れられていたことを。
「それにしても、よもやアーサーにまで逃げられるとは……!」
「どうして、すぐに殺してしまわなかったのです?」
つぶやく大司教の背後で、いまだ傷の癒えきっていないデーモンサーバントが問いかける。
「ヤツだけが、光の剣のありかを知っているからだ」
大司教はかつて、野望の第一段階として先王ウーサーを自らの手で殺害した。その現場を、あろうことかアーサーに目撃されてしまったのだ。当時すでに元服を済ませ、光の剣を継承されていた聡明なアーサーは、大司教の陰謀を即座に看破し、光の剣をどこかに隠してしまったのである。
その場所を吐かせるために、大司教はアーサーに魔法をかけて魔物の姿にさせ、独房に閉じこめておいたのだった。いま現在、玉座にいるのは、大司教が魔法で造りあげた、替え玉の人形である。

「大司教様、いかがなされましょう?」

「………」

デーモンサーバントの問いに、大司教は考えこんだ。

恐らくアーサーは、どこかで魔法を解いて、事件を明るみに出さんと、そして先代のかたきを討たんとここに戻ってくるだろう。しかしそうなってしまっては、せっかくの計画が水の泡だ。ここまで人知れずに進めてきたのに、人目につくような騒ぎを起こすわけにはいかない。

城の騎士たちにも、明かすことのできない事実だ。彼らは大司教にではなく、城主に忠誠を誓っているのである。もしそこへ本物のアーサーが現れたとなれば、大司教に味方する者はいなくなってしまう。彼らを、アルル捜索に向かわせるわけにもいかない。恐らく、アルルとアーサーはまだ一緒にいるはず。それと騎士団が邂逅したら、結果は同じだ。そのため大司教は、騎士たちにアルル捜査は自分がやるといい、自らこの独房まで来ざるを得なかったのである。

「………」

いっそのこと、殺してしまうか……?

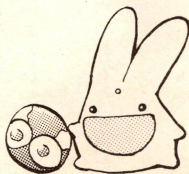
大司教は考えた。

ようは、事件が明るみに出さえしなければいいのである。つまりは「死人に口なし」。そういうことだ。それに、もともと闇の剣のありかすらわかっていないのである。それと対になっている光の剣も、時間さえかければアーサーなどいなくとも発見することはできるだろう。

そう結論づけたところで、大司教は懐から三枚の呪符を取り出した。
「札に封印されし吸血鬼、そして邪悪な淫魔どもよ、古の血の契約に基づき、我の前に現れいでよ……！」

二　さて、これからどうしよう？

……〝妖精の泉〟って、どこ？

「あ〜、サッパリしたぁ！」
「ぐー！」
アーサー様が教えてくれた池でドロだらけの身体をキレイに洗ったボクとカーバンクルは、木漏れ日の下で濡れた身体を乾かした。そこは日当たりがとってもよくて、洗って干しておいた服も、ボクらが水浴びしてるあいだに乾いてて、モンダイなーし！　おウチでお風呂に入ったあとみたいなサッパリ感だ。
「とっても冷たくって気持ちがいいですわぁ」
とうろこさかなびとさんが、池の水を入れた桶の中で、ぴちゃぴちゃと気持ちよさそうにし

てる。抜け穴から出るときに、この桶を忘れずに持ってきてよかったよかった。桶がなくても、ダッコかオンブして運べば大丈夫だろうけど、水がなくて妖精の泉に着くまえにうろこさかなびとさんが干からびちゃったらタイヘンだもんね。

「それにしても、アーサー様は遅いねぇ」

池のほうを見ながら、ボクはいった。

ボクらのあとにアーサー様が身体を洗いに行ってから、もうだいぶたってるような気がする。お日サマも、そろそろ傾き始めてるよ。

長風呂するヒトってよくいるケド、いつキャメロットの人たちとかが探しに来るかわかんないし、そんなコトしてる場合じゃないと思う。その辺は、アーサー様のほうがよくわかってるはず。

なんかあったのかなぁ……。よくよく聞いてみると、水浴びしてるような水の音もないみたいだし……。

「心配ですわねぇ」

「いってみよう！」

「ぐー！」

ボクは桶にくくりつけたロープをよいしょと背負って、池のほうに向かって歩きはじめた。

池、といってもそんなにおっきくはなくて、どちらかといえば大きめの水たまりってカンジ

だ。でも、森のけっこう深いところにあるおかげで人に荒らされた様子とかがなくって、水がとっても澄んでる。広さはそれほどじゃなくても、深さは結構あって、魚もちょっといるみたいだ。

だけどその池に、飛べない鳥の姿をしたアーサー様はいなかった。

「あれ……？」

どうしちゃったんだろ……？

「お～い！　アーサー様ぁ！」

ボクはおっきな声を出して呼んでみた。……だけど、返事はまったくない。

「ドコ行っちゃったのかなぁ……？」

「ぐー！」

「どうしたの？　カーくん」

「ぐ」

いきなりボクの前に立ったカーバンクルが、自分の右足をちょいちょいって指した。

「あ――――――っ！」

思い出した！

よく考えたら、アーサー様の右足に、結構おっきな鉄球がクサリでつながれてたんだっけ！

げないよ。
デーモンサーバントが出てきたときは武器にもなったケド、さすがにそれつけたまんまじゃ泳

「もしかしたら、アーサー様おぼれてるかも……！」

「それはタイヘンですわぁ。ここは、わたしにまかせてくださいぃ」

キンチョー感もなにもない間延びした声でいうと、うろこさかなびとさんは尾ビレを使って桶からジャンプして、そのまま池に飛び込んだ。

ドッポォ――――ンッ！

ぶくぶくぶく……。

うろこさかなびとさんが飛び込んだあとに広がる波の輪を、ボクはじっと見つめた。それから、どれくらいたっただろう……。波の輪が消えてしばらくしてから、水の中をなにかが浮き上がってくるのが見えた。

ザバァッ！

「見つけましたわぁ」

と水面から顔を出したうろこさかなびとさんの腕の中で、アーサー様が気を失っている。おぼれて水をたくさん飲んだみたいで、お腹がパンパンだ。

ボクはアーサー様を受け取って地面に寝かせ、お腹を力いっぱい押した。

ぴぅ――――っ！

力なく開いたクチバシから、たくさんの水が噴水みたいに出てくる。それに混じって、何匹かのお魚も出てきた。これで、今夜のオカズはバッチリだ。……って喜んでる場合じゃない。

「アーサー様！　しっかりして！」

「う、うぅ〜ん……」

ボクが揺り動かすと、アーサー様はやがて、うめき声とともに眼を覚ました。

「ぴよ？」

「あ、気がつきましたわぁ」

「ぐー！」

「もぉ〜、心配したよぉ」

「面目ないぴよ……」

アーサー様はちょっとうつむいて、ペンギンさんみたいな羽で後ろ頭をポリポリかいた。

とまぁいろいろと大騒ぎがあって、アーサー様の身体が乾いた頃には、もう夕方になっちゃった。

ボクらは池のほとりで焚き火を起こして、アーサー様がつかまえた――そうする意志があったかどうかは別として――お魚を焼くことにした。お腹も空いたことだしね。

「さて、これからどうするんだぴよ？」

お腹いっぱいになって、ひと息ついたところで、アーサー様はいった。この頃には、もう空

は真っ暗になってる。この辺は結構深い森だから、お月様やお星様の光はほとんど届かなくて、ちょっちコワイ。
「このまま、ずっとここにいるワケにはいかないだろうぴよ?」
「うん。とりあえず、うろこさかなびとさんを妖精の泉に帰してあげなきゃ」
ボクは空を見上げた。木々のあいだからなんとか見えたお月様は、あと二、三日もすれば満月ってカンジだ。つまり、あんまり時間はないってコト。
「光の剣は、それからになるぴよか」
「そうですね」
ボクはふと、池につかりながらこの作戦カイギに参加している、うろこさかなびとさんのほうを見た。焚き火を池のほとりでやることにしたのはこのためだ。必要がないなら、せまい桶に入れられてるよりはラクだろう、というワケ。ちなみに、カイギに参加してるのは三人。カーバンクルは、人よりはるかにたくさんのお魚を食べて、もうぐぅぐぅと気持ちよさそうに寝ちゃってる。
「ねぇねぇ、うろこさかなびとさん、妖精の泉ってドコにあるの?」
「わかりませぇん」
「わかりませんって……、そこから来たんでしょう?」
とボクがちょっとおっきな声をだすと、うろこさかなびとさんは怯えて眼をうるうるさせた。

「だってぇ……、わたし、泉から一度も出たことなかったんですものぉ。それにぃ、捕(つか)まったときは気を失ってて、どこをどう行ったのかわからないんですぅ」
「そうかぁ……」
それじゃぁ、しょうがないよねぇ。ナットクナットク。
って、落ち着いてる場合じゃない。
「コマったなぁ。場所がわかんないんじゃ、次の満月までに、妖精の泉に行けないかもしれないよ」
「そ、そんなぁ……」
「ちょっと待つぴよ」
困るボクとうろこさかなびとさんのあいだに、アーサー様が口をはさんだ。
「妖精の泉って、〝妖精の森〟の中にある泉のことぴよか？」
「え〜とぉ……。確か、そうだったと思いますぅ」
「妖精の森だったら、わたしが知ってるぴよ」
「ホント？」
ボクがいうと、アーサー様はうなずく。
「ぴよ。キャメロット城から南に行ったところに、妖精の森があるぴよ。以前、地図で見たことがあるぴよ」

「なるほど。じゃあ、朝になったら方角をカクニンして、出発しましょう」
「いや、まだひとつだけ問題があるぴよ」
重々しい口調でアーサー様がいう。でも姿が飛べない鳥のまんまで、表情が変わんないから、イマイチ迫力がない。
「モンダイって？」
「ここが、城からどっちの方向に、どれだけ離れてるのかがわからないんだぴよ」
「え――――っ！　あの抜け穴って、アーサー様が掘ったんでしょう？」
「そうだぴよ。だけど、ムチャクチャに掘ったから、どこに出たのかわからないんだぴよ。子供の頃は覚えてたかもしれんぴよが、もう忘れてしまったぴよ」
「それで、よく助かりましたねぇ……」
「あの頃は、帰り道がわからなくて泣いているところを、父上がわざわざ助けに来てくれたんだぴよ。それだけはハッキリ覚えてるぴよ」
「はぁ～……。なるほど……」
美しい親子愛だぁねぇ。しみじみ……。
って、ンなことしてる場合じゃないっての。
「ここがドコかもわかんなくて、妖精の泉がドコにあるのかもわかんないんじゃ、オハナシになんないよ」

「ここが妖精の森だったりしたら、ラッキーなんですけどねぇ」
うろこさかなびとさんが、マジメな顔で、ノンビリしたことをいう。確かに、それだったら大ラッキーだけど、そう甘くはないのが世の中のツネ。
ここがどこかわかんないんじゃ、ルシファー先生のおウチにとりあえず帰るってワケにもいかないし……。困ったなぁ……。
「う〜ん……」
と三人で途方に暮れているとき、
ボクはふと、森のほうに妙な人の気配を感じた……。
「……！」

＊　＊　＊

ルシファーは、この世でも、あの世でもない空間を歩いていた。
おおよそ地面と呼べるものはなにもなく、ただそこに足がついているから、歩いているに過ぎない。上下も、前後左右も、昼も夜もなく、ただ青と白がマーブル状に入り組んで、風か水の流れのようにうねりながら広がっている。
あるのは、己の意志力だけ。自分が前だと思えばそこに〝前〟があり、目的地の存在を信じ

れば、いずれそこにたどり着ける。
知るものは、ここを〝時空の狭間〟と呼ぶ。過去と未来、そして現界と魔界とを結ぶ空間だ。
ルシファーは、ある一点をただひたすらに目指して、時空の狭間を歩き続けていた。もう、どれほど進んだかわからない。常人には堪えられない無間地獄だ。かつて、幾人もの賢者、大魔導師と呼ばれる人物が、過去と未来を求めてこの時空の狭間に訪れたかわからない。しかし人間、魔族に拘わらず、誰ひとりとして無事に帰還した者はいなかった。ある者は瀕死の状態までに衰弱し、ある者は気がふれ、またある者は二度と故郷の土を踏むことがなかった。
ルシファーは、そのような時空の狭間を渡ることができる、唯一の存在だった。ここに住む、ある人物を除いて。
その、ある人物に会うために、ルシファーはここまでやってきたのだ。
黙々と歩く、フードに覆われたその顔には、珍しく焦りの色が見え隠れしている。しかしそれは、なかなか目的地に着かないからではない。ただひたすらに、目的地の存在を信じて歩き続ければ、いやでもたどり着ける。ルシファーの焦りは、現界で起きている事件に対するものだった。
それほどまでに、根が深く、複雑な事件だった。解決方法はまだ見つからないが、その事件が引き起こす、結果はわかっている。
現界と魔界、そして時空の狭間のバランスが完全に崩壊し、世界は消滅する……!

それだけは、なんとしてでも防がねばならない。せっかく見つけた逸材（いつざい）を、無下（むげ）に殺さないためにも……！

「お珍しいですね、あなたがいらっしゃるなんて……」

出し抜けに、声が空間じゅうに響（ひび）き渡った。涼（すず）やか、という形容がぴったりあう、それでいて神々（こうごう）しい威厳（いげん）を持った女性の声だ。

『時の女神様……』

ルシファーは、声の主の名をつぶやいた。ようやく目的の人物に会えた、そんな安堵（あんど）の色を心なしか含（ふく）んでいる。

「今日は、なんの御用（ごよう）ですか……？」

その言葉と同時に、ルシファーの目の前の空間がいきなり光りはじめた。見る者の眼を焦（こ）がすように激しく、そして邪悪（じゃあく）なる者を浄化（じょうか）するように真っ白な光だ。しかしルシファーは、そのような光から眼をかばうようなことはせず、じっと前を見続ける。

やがて光は次第に弱まっていき、代わりにひとりの人物が姿を現しはじめた。

乳白色の、薄（うす）くゆるやかなシルクのドレスに身を包み、手には先端（せんたん）に三日月をあしらった長い杖（つえ）、足元まで届きそうな長いルビー色の髪（かみ）の下には、すぎるほど端正（たんせい）に整った美しい顔……。

この女性こそ、時空の狭間の主にしてルシファーが探し求めていた人物、時の女神だった。

「あのとき以来ですね、ルシファー様……」

慈母のような優しさを込めて、女神がいう。その顔が、次第に悲しみを帯びてくる。
「ああなりさえしなければ、あなたも……」
『その話は、また今度に致しましょう』
ルシファーは女神の言葉を制した。
『今日は、時の女神としてのあなたにお願いがあって来たのです』
「大司教の件ですね……？」
『そうです』
女神としての威厳を取り戻した彼女の問いに、ルシファーはゆっくりとうなずいた。
『彼の望みが成就すれば、空間はたちまち崩壊してしまいます。それほどまでに、魔界と現界と時空の狭間との連結は弱まってきているのです。あなたには、すでにおわかりのはずでしょう？』
いつになく、ルシファーは感情を込めて力説する。時の女神はそれに対し、暗闇の地獄に差し込む一条の光のような、まさに女神の微笑みを彼に向けた。
「大丈夫、時が満ちれば私も参ります……。ご安心ください……」
『そうですか……。それを聞いて安心しました』
ルシファーは心から安心したというようなため息をつき、そしてようやく、いつもの飄々とした笑顔に戻った。実は、女神の答えははじめからわかりきっていた。しかし本人の口からそ

れを聞くまでは、なんとなくいてもたってもいられなかったのだ。
そんなルシファーの心根を見抜いて、女神が悪戯っぽくいう。
「らしくなく、慌てていらっしゃるのね……」
『実は、この件には私の弟子が巻き込まれておりまして……。早急に解決しないと、彼女の身が危ういのです』
「ずいぶんと、可愛がっていらっしゃるようですのね……」
『これまでに、お目にかかったことのない逸材ですからね。ゆくゆくは、私、もしくはあなたの後継にと思って育てているのですが……』
「それだけですの……？」
女神の悪戯っぽい笑みは変わらない。ルシファーは、つかみ所のない優しげな表情でそれに応えた。
『いやまぁ、その弟子というのが、私の初恋の女性の、子供の頃にうりふたつでしてね。ついつい情が移ってしまったようですね』
「そうでしたの……」
ふふ……、と女神は楚々とした鈴のような、小さな笑い声をあげた。しかしその表情の中に、ほのかな悲しみが見え隠れしている。「初恋」という言葉が、ルシファーと女神とのあいだに起きた、ある事件を嫌が応にも思い出させたのだ。しかも、時の女神という彼女の立場を慮

って、ルシファーはその事件の責任をひとりで被ってしまった……。
神と魔族という、許されぬ恋の罪を……。

三　おひさしぶりっ！　の妖精さんたち

……なっつかしいなぁ

「ん～……？」
ボクは、気配を感じたほうをゆっくりと見た。……だけど、変わったものはなにもない。
森は鬱蒼としていて、暗くてし～んとしてる。ボクらがおこした焚き火のパチパチという音と、池でうろこさかなびとさんが奏でる水音が、ヤケに大きくボクの耳の中でこだまする。
それでも、森は恐そうな雰囲気なんてゼンゼンなくって、魔物だとか、キャメロット城の追っ手とかが出てきそうなカンジはない。むしろ、ホンワカしてなんとなくあったかくて、森の神様と夜の神様が一緒になってボクらを守ってくれてる、そんな気がする。
「どうしたんですかぁ？」
「ううん、なんでもないよ」

うろこさかなびとさんの言葉に首をふりながら、ボクは作戦カイギに戻った。……といっても、この場所と、妖精の泉の場所がわかんなくちゃオハナシにならない、ってところでずっと止まっちゃってるんだけどね。

アーサー様なんかもう、コックリコックリしはじめてる。だいぶ疲れてたんだろうね。そりゃぁ、あんな小さなところに閉じこめられてれば、気が張っちゃって疲れなんか取れやしないだろうし。

かくいうボクも、今日イチニチでだいぶ体力を使った。うろこさかなびとさんを背負って走りまわったりとかして、もうヘトヘトだよ。妖精の泉が見つかるまで、またこれからもおんなじコトしなきゃいけないし、ボクもとりあえず寝て体力を回復させなきゃなぁ……。

「ふぁ〜あ……」

背中をぐ〜いと伸ばして、ボクはおっきなアクビをした。

その瞬間！

「…………！」

また気配を感じた。やっぱり、誰かがボクらのコトをそっとうかがってるんだ。

「誰かいるのっ？」

ボクはパッとそっちを見た。それと同時に気配のヌシはまたどっかに隠れたみたいで、姿は見えない。

「おっかしいなぁ……」
いいながら、また焚き火のほうに向き直る。
と思わせといて……！

「わっ！」

イキナリまた森のほうを振り返った。さすがに相手は、これは見切れなかったみたい。
「きゃっ！」
といいながら、ナンかちっちゃいものが、慌てて木の陰に隠れた。
ふっふっふ、見たぞみたぞぉ……！
「そこにいるのは誰？　おとなしく出てこないと、食べちゃうよ！」
なんてオドシをかけながら、ボクはナニモノかが隠れた木のほうに近づいた。……のはいいんだけど、むっちゃくちゃ恐いモンスターが、あんぐりと口を開けながら待ってたりして……。
それはイヤだなぁ。
「………」
相手を威圧するように、逆に内心はおっかなびっくりと、ボクはその木の向こう側を覗きこんでみた。
そこにいたのは……、

「〜〜〜〜〜〜〜ッ……！」

ちぢこまってブルブルふるえながら宙に浮いている、ちっちゃな妖精さんだった。もう、いまにも泣き出しちゃいそうなくらいに怯えてて、三角帽子の、折れ曲がった先っぽについた丸い毛糸の玉も、身体と一緒になってふるえてる。身体はカーバンクルくらいの大きさしかなくて、ボクの手のひらや肩とかに乗っちゃいそう。羽根とかはなくって、なにか魔法みたいな力で宙に浮いてる。

「大丈夫。食べちゃうなんてウソウソ。そんなコトしないよぉ」

精一杯の優しさをこめて、ボクはいった。

「オドかしたりして、ゴメンね」

ホントは、先にこのコがボクらをビックリさせたんだケド……。

「だから、こっち向いて、ね★」

「…………」

妖精さんは、ようやくこっちを向いた。エメラルドの長い髪とおんなじ色の眼が、まだちょっとオドオドしながらもボクを見つめる。うろこさかなびとさんみたいにハカナゲで、なんだか「守ってあげたい！」と思わせる顔だちだ。

「え、えと……、あの、その……」

ボクのほうに敵意はないと見てとった妖精さんは、モジモジしながら、なんとか言葉を出そ

うと努力する。顔を真っ赤にしちゃって、なんだか、とっても恥ずかしがりやの妖精さんみたいだ。

「あり……？」

おかしいな……。いまとおんなじ光景を、どっかで見たような気がするぞ。もしかして、デジャ・ビュってヤツ？

いや、そんなコトはない。

よくよく見ると、この妖精さんもどっかで見たことあるぞ。ドコだったかなぁ……？

「ねぇねぇ」

まだシドロモドロしてる妖精さんに、ボクはいった。

「キミ、どっかで会ったコトない？」

「え？　あ……、えと、その……」

ボクの問いに、この恥ずかしがりやの妖精さんはちょっと驚いた。だけど、イエスとかノーとかいう前に、またシドロモドロ状態に戻っちゃう。

でもこの驚きようからして、やっぱりどっかで会ったことがあるんだ。ボクはそう判断した。

「ほらほらぁ、やっぱそうなんだよ」

どっかでヒソヒソ声がする。

そうそう、やっぱりどっかで会ってるんだよ。ボクは、ヒソヒソ声に同調するようにうなず

いた。

　って……。

「え……？」

　ボクは辺りを見回した。

　ナニ？　いまの声……？

　少なくとも、目の前にいる妖精さんの声じゃないコトは確か。この妖精さんは、顔真っ赤のシドロモドロ状態で、それどころじゃない。うろこさかなびとさんでも、アーサー様でも、カーバンクルでもない。

　じゃ、じゃぁ、「ほらほらぁ、やっぱそうなんだよ」っていったのは、誰……？

「上だよ、う、え」

「うえ……？」

　クスクスっていうたくさんの笑いと一緒に、また声がした。それに導かれるママに、ボクは上を見る。

　そこにいたのは、木の葉っぱに隠れるようにしながらボクを見下ろしてる、たっくさんの妖精さんたちだった。みんな、恥ずかしがりやの妖精さんと同じ若草色の服を着て、思い思いの色のトンガリ帽子をかぶってる。全部で、十人くらい。

「やっほー★」

そのうちのひとりが、ボクに向かって手を振った。

「アルルちゃん、だったっけ？　ひっさしぶりだねぇ」

ボクがぼぉ～っとして見てると、みんなタンポポの綿毛みたいにフワフワと降りてきた。そして、ちょうどボクの眼の高さくらいのところで止まる。

ドコだったっけなぁ～。どっかで会ったコトあるんだよなぁ～、この妖精さんたち……。

「あ！　思い出した！」

ボクは、ポンと手を叩いた。

そうそう、ボクがう～んとちっちゃい頃に会ったんだ。確か、魔導幼稚園に入る前じゃなかったっけ……？　お母さんに、お薬をおばあちゃんに届けてってお使いを頼まれて、それで迷子の森に入っちゃって……。その迷子の森で、恐いモンスターから助けたのをキッカケに、妖精さんたちとお友達になったんだっけ。

「思い出した？　アルルちゃん」

さっき、木の上で手を振ってた妖精さんが、フワっとボクの顔の前に飛んできていった。

「うん！　みんな、元気そうでナニヨリだね」

「アルルちゃんも、すっかり大きくなっちゃって」

「みんなもすっかり……って、あり……？」

ボクは、妖精さんひとりひとりをジッと見た。よくよく見たら、みんなゼンゼン変わってな

ろルル 4才.

いよ。
「どうしたの？　アルルちゃん」
「いや、みんな元気なのはいいんだケド……。あれから何年もたってるのに、ゼンゼン変わってないなぁ～って……」
「あたしたちは妖精だからね。人間界とはゼンゼン違う時間の流れで生きてるんだ。だから、アルルちゃんから見て変わってなくって、あたりまえだよ」
　うんうん、と妖精さんがみんなでうなずく。
「へぇ～、そうなんだ」
「ところで、どうしてアルルちゃんはこんなところに？」
　ボクは、これまでのイキサツを話した。騎士さんたちに捕まって、ぷよぷよ大司教に死刑をいい渡されて……。それから牢屋でうろこさかなびとさんやアーサー様と出会って、アーサー様が昔掘った抜け道を使って牢屋を脱出して……。
「へぇ～、タイヘンだねぇ……」
　カンガイ深げに、妖精さんたちは腕を組んでうなずく。
「ねぇねぇ、ところでさー」
　ボクはいった。
「ココって、迷子の森なの？」

いまボクらがいる辺りは、キャメロット城からそんなに遠く離れてはいないはず。少なくとも、お城の近くにそんな森があるなんて聞いたことがない。それに、ボクがちっちゃい頃に迷いこんだのは、お城から遠く遠く離れた、ボクの実家のほうだ。だけど、この妖精さんたちがいるってコトは……。
「ううん、違うよ」
ボクの問いに、妖精さんのひとりが首を振った。
「ここは妖精の森。ずっと前に、迷子の森から引っ越してきたんだ。ここには、仲間がいっぱいいるからね。ちなみにキャメロットとかっていうのか知らないケド、北にちょっと行けばお城があるよ」
「そうなんだ」
ナットクナットク。
って、ちょっと待って。
「いまなんていった？」
ボクは、妖精さんのひとりにグイっと顔を近づけた。その勢いにちょっと怯えながら、その妖精さんは話す。
「え……？　北にちょっと行けばお城があるって……」
「違う、その前！」

「ここには、仲間の妖精がいっぱいいるって……」
「そのもっと前！　ここがなんだって？」
「ああ、ここは妖精の森だよ」
「じゃぁさ、妖精の泉って知ってる？」
「知ってるよ。ここからだったら、南に半日くらいかな」
「どうしちゃったの？　アルルちゃん。そんなに慌(あわ)てちゃって」
　別の妖精さんが、ボクをなだめるようにいう。
　ボクは、うろこさかなびとさんのコトをみんなに詳(くわ)しく話した。次の満月までに妖精の泉に帰らないと、うろこさかなびとさんは死んじゃうのだ！　で、ここがドコだかもわかんないし、どうしようかって困ってたところだったって。
「ええっ！　それはタイヘン……って、もうそんなに慌てる必要はないね」
「そうそう、ここから何日もかかるワケじゃないし」
「ゆっくり寝(ね)てからでも、じゅーぶん間に合うよ」
「明日になったら、あたしたちが案内してあげるよ」
　妖精さんたちは、口々にいった。なんだか、困ってるボクを安心させようと一生懸命(けんめい)ってカンジだ。もう感謝カンゲキ！　うれしくって、涙(なみだ)が出てきちゃうよ。
「みんな、ありがとう」

「なんのなんの、トモダチじゃない！」

ボクがお礼をいうと、妖精さんのひとりが、ちっちゃな胸を張って、これまたちっちゃな手で叩いた。

「じゃあ、とりあえずみんなのところに戻ろう。ボクの新しいお友達を紹介してあげるよ」

「ホント！」

きゃっきゃっとはしゃぎながらボクの周りを飛ぶ妖精さんたちを引き連れて、ボクは焚き火のところに戻った。だけどもう、カーくんも、アーサー様も、うろこさかなびとさんもグッスリ眠っちゃってる。

「寝ちゃってるね……」

妖精さんのひとりが小声でいった。

「そうだね。いまから起こすのもナンだし、ボクたちも寝よう。朝起きたら、みんなを紹介してあげるね」

というワケでボクは、たくさんの妖精さんたちに囲まれて、横になった。

なんだか、すごいラッキーな展開だ。まさかこんなところで昔会った妖精さんたちと再会するとは……！　しかも、その妖精さんたちが、妖精の泉の場所を知ってるとは思わなかったよ。

まあ、落ち着いて考えてみれば、名前が名前だけに、妖精さんたちが知ってても、ちっともフシギじゃないケドね……。

『しかし……』
時空の狭間の、うねるような空間の中で、不意にルシファーは生真面目な口調でいった。
『この空間の歪み……、早急になんとかしなければ』
魔界と現界、そしてそれらをつなぐ時空の狭間……。そのみっつのバランスが、日を追うごとにずれてきている。それは、ルシファーと彼に対峙する時の女神を取り囲んでいる、時空の狭間が物語っていた。いまや時空の狭間は、白と青を中心とする色彩の嵐だ。平静なときのここは、雲の上を歩くように軽やかで、深海のように穏やかで静かなところなのに……。
そして、そのバランスのズレを起因とする事件が、ここ数年のあいだに多発しすぎている。ぷよぷよ大魔王なる魔物が現れたのもしかり。また、かつてサタンが〝日出る国〟に残した意識体に、サタンの魔力が流れ込み、ぷよぷよ大明神と名乗る魔物に成長したのもしかりだ。今回アルルを巻き込んだ事件も、空間のズレが原因であることは、これまでの調べですでに判明している。

＊　＊　＊

そろそろ、根本的な解決を試みなければならないのではないか……？
ルシファーはそう判断し、この時空の狭間の主である時の女神のもとへとやってきたのであ

った。

『女神様、やはり〝オワニモ〟は封印すべきなのでしょうか？』

〝オワニモ〟は、この世における最大級の魔法といわれている。それは、どんな強力な魔物であっても、有無をいわせずに時空の狭間の無間地獄へと送り込んでしまうものだからだ。ただし発動には条件があり、同色同種の魔物が四匹以上そろっていなければならない。めったに発生しない状況ではある。

数百年前にこの呪文を産み出した〝賢者〟は、その威力と発動機会の少なさから、〝オワニモ〟をしたためた魔導書を封印してしまった。またこの呪文は、現界――もしくは魔界――と時空の狭間とを、一瞬とはいえ強引に連結させるものである。賢者は、それがみっつの空間に歪みをもたらすことを見抜いていたのだった。

しかし、隠した秘密はやがて暴露される……。

数年前に、何者かが〝オワニモ〟の封印を解いてしまった。それだけなら大した事件ではないが、この世には、〝オワニモ〟が通用する唯一の、かつ大量の魔物が存在する。それが〝ぷよぷよ〟である。

かくして、ぷよぷよに対して〝オワニモ〟が使われるたびに、少しずつ世界のバランスはズレ始めていった。それがやがて〝ぷよぷよ大魔王〟を産み出し、さらにその事件をキッカケに、〝オワニモ〟は世界的に広がっていった。

『やはり、あの呪文を広めたのは失敗だったか……』

ルシファーは歯噛みした。アルルやルルー、サタンには決して見せない表情だ。

実は、ルシファーこそが〝オワニモ〟を世に広めた張本人だった。かつて、アルルとルルーとの戦いに敗れ、無数のぷよぷよとなって各地に散っていった〝ぷよぷよ大魔王〟の身体を消し去るために起こした行動である。果たしてそれは首尾よく運び、一度は一面のぷよぷよ地獄になるのではと目された地上も、いまではもとの落ち着きを取り戻している。ルシファーは、事態が完全に落ち着いてから〝オワニモ〟を再び封印すればよいと目算していたのだが、それが甘かった。空間の歪みは予想以上に早く、激しく、彼が気づいたときには、もはやすでに修復不可能なほどまでになっていたのだ。

ルシファーは、空間の歪みを修復せんと奔走した。その関連で〝日出る国〟に赴いたのだが、そこで〝ぷよぷよ大明神〟なるものと遭遇し、空間の歪みは遥かに複雑な方向に向かっていることを知った。そして、今回の〝ぷよぷよ大司教〟の出現である。もはや、この事態を収めるには、時の女神の力を借りる以外になかった。

「確かに、〝オワニモ〟を封印することは必要最低限です……」

先程まで、友人のようにルシファーに相対していた女神が、ふと自分の職務を思い出したように、毅然とした表情でいった。

「しかし、事態を安定化させるためには、それだけではダメです……。現界は現界らしく、魔

界は魔界らしく、もとあるべき姿に戻すことが必要です……。わたくしのいっている意味がわかりますね……?」

『……』

女神の口調には、咎めるようなものがあった。その意味が痛いほどわかっているルシファーは、言葉を返すことができない。

つまり女神は、ルシファーに魔界に帰れといっているのだ。魔導学校の可愛い生徒たち、愛弟子アルルと決別して……。

「魔王様もこぼしておられましたよ……」

『父上が……?』

珍しい名を聞いて、ルシファーは反射的に言葉を漏らした。その心の中で、父親である魔界の王に、いったいどれくらい会っていないのだろうと考える。少なくとも、ここ数百年のレベルで会っていない。

「あなたやサタン様、それにケーニヒス・ティーゲル・フォン・シュテルン博士のような、魔界の大物がいつまでも現界に居座っていては、他の者にしめしがつかない、とね……」

いつのまにか女神の口調からは、咎めるような雰囲気が消え、悪戯っぽい友人のようなそれに変わっていた。

「お妃様や後継者を探すのも結構ですが、あなたもサタン様も、もう少し御自分の立場という

ものをお考えになったほうがよろしいのでは……？」

女神は、今度は乳母か御つきの家庭教師のような口調でいう。しかし、諫めるというよりは、その言葉は完全に慈愛に包まれていた。

「でないと、今度は角だけでは済まなくなるかもしれませんよ……」

これは、いった本人のほうが心を傷めた。ルシファーが角を失った事件に、女神自身も深く関わっていたからだ。

『御忠告いたみいります。考慮に入れておきましょう』

ルシファーは女神の言葉に、うやうやしく頭を下げた。

「忠告ついでに、もうひとつ……」

『なんでしょう？』

「かの大司教が、光の剣と闇の剣を狙っているようです。あれも、もとに戻したほうがよいでしょう」

『わかりました。現界でお目にかかれることを楽しみにしております。では……』

ルシファーはゆっくりと女神に背を向け、歩きはじめた……。

四 着いた着いたよ〝妖精の泉〟！

……カッコイイお兄さんが出てきてクラクラ？

朝起きて、驚くアーサー様たちをなだめて妖精さんたちを紹介し終えたボクらは、早速、妖精の泉に向かって歩きはじめた。もちろん、朝ゴハンはちゃんと忘れない。うろこさかなびとさんが捕まえてくれたお魚と、妖精さんたちが摘んできてくれた木の実で、お腹いっぱい、パワー全開だ！

背負ったうろこさかなびとさんを入れた桶も、アーサー様とカーくんのおかげでだいぶ楽。アーサー様の上にカーバンクルが乗って、桶を下から支えてくれるからだ。

妖精さんたちの案内で、ボクらは妖精の森の奥へと進む。朝に出発して、さっきお昼ゴハンも済ませたから、あともうちょっとで妖精の泉かな？　ってカンジだ。

この辺りになるともう、けもの道くらいしかなくって、歩くのがちょっちタイヘン。気をつけてないと、転んじゃいそう。

森もだいぶ深くなって、鬱蒼としてきている。お日サマの光があんまり届かなくってワリと

薄暗いケド、そんなに恐いカンジはしなくて、むしろホンワカしててあったかいカンジがするのは、もしかして妖精さんたちのおかげ……？　ボクらを案内してくれてる妖精さんたちのハナシによると、この森には数え切れないくらいの妖精さんたちがいて、いまこうして歩いてるボクらのコトを、じっと見守っててくれるんだって。ホントは、この森に入った人間を魔法で迷わせて、二度と出られないようにしちゃうらしいんだケド、ボクは妖精さんたちとお友達だから大丈夫みたい。あとほかに、〝光の剣〟を持ってる人もこの森に入れるらしいんだけど、〝光の剣〟ってナニ？　まぁ、いいか……。

そのおかげで、この森はキャメロット城からあんまり離れてないっていうのに、あのコワイ騎士さんたちにまた捕まる心配もないんだもんね。妖精さんたちに感謝感謝！

なぁんてコトを考えながら歩いてると、いきなりアーサー様がボクの後ろで口を開いた。

「ずっと気になっていたぴよが……」

「なんです？」

「よく、わたしを本物のアーサーだってイッパツで信じたぴよな。普通、ちょっとは疑ってかかるもんぴよ」

「そういえばぁ、そうですわねぇ」

相変わらず間延びした口調で、うろこさかなびとさんがいった。

確かに、そういえばそうだねぇ。考えてみたコトもなかったケド。

「どうして、イキナリそんなコト聞くんですか？」
ボクは前を向いたままで尋ねた。
「これがワナだったりしたら、どうするのかと思ってぴよ。なんにも考えてないとしたら、お人好しにもホドがあるぴよ」
「えへへぇ～。ホントになぁんにも考えてなかったりして……。でも……」
ボクは、歩きながら空を見つめた。
「少なくとも、会った瞬間には、ワナだとかなんだとかっていうカンジしなかったもんなぁ。それに、カーくんについてったら、アーサー様の牢屋に来たんですよ。カーくんがだいじょぶだっていうなら、まぁ、大丈夫かなぁって思って……」
「なるぴよ……」
「アーサー様だって一緒じゃないですか？　デーモンサーバントを追っ払ってからだけど、抜け道を教えてくれたりして……。ボクらのほうだって、ワナかもしれないでしょ？」
「そういえば、考えたコトなかったぴよ……」
えへへへぇ～、とボクとアーサー様は、同時にテレ隠しの笑いを浮かべた。
「お互い、似た者同士、お人好しってところぴよか」
う、なんだかラブロマンスかなんかにありがちなセリフ。そりゃぁ、うららかな昼下がりにルシファー先生のおウチのテラスみたいなところで、本当の姿のかっこいいアーサー様に、

「わたしたちは似た者同士、うまくやっていけそうだね……」
なぁんてささやかれたりなんかしたら、クラクラしちゃいそうだけど……。いまのこのシチュエーションはちょっとねぇ……。ボクが桶しょって、それを飛べない鳥の姿のアーサー様がカーくんと一緒に支えてるっていうんじゃ、ムードもなんにもナイ。
「ほらほら、見えてきたよ！」
という妖精さんの言葉で、ボクは我にかえった。見ると、前のほうの木々のあいだで、なんだかキラキラ光るものがある。そろそろ傾きはじめたお日サマを浴びて輝く、ものすごくキレイな水面だ。
ボクらは、それ目指してまっすぐ進む。するとやがて森がとぎれ、ボクらの目の前いっぱいに水面が広がった。
「うわぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……」
ボクは思わず、ため息のような感嘆の声をもらした。
泉そのものは、そぉんなにおっきくはないケド、すんごくキレイ。もうすぐ夕方ってカンジの、微妙なお日サマの光を浴びて、虹色のカガミみたいにキラキラしてる。一瞬、虹ってココから生まれるのかなぁ、ってホンキで思ったほど。ところどころで水が湧き出してて、ポコポコと出てくる泡が水面を静かに波立たせてる。それが、ゼンゼン鏡にキズをつけてるってカン

ジになってないのがミソ。

そんな水面を、たくさんのちっちゃくて淡い光の球が、チョウチョやホタルみたいに優雅に飛び交ってる。たぶん、あれはボクらを案内してくれたヒトたちより、ちっちゃい種類の妖精さんだ。ルシファー先生の書斎にあった図鑑で見たコトがある。

それにしても、キレイな景色だなぁ……。

「あ、あのぉ〜……」

泉を見つめるボクに、背中のうろこさかなびとさんがおずおずと声をかけた。

「わたしを、泉に帰して欲しいんですけどぉ……」

「あ、そうか。ごめぇん」

ボクはアーサー様に手伝ってもらって桶を降ろして、うろこさかなびとさんを泉に帰してあげた。するとうろこさかなびとさんは、途端に元気になったみたいで、しばらくバシャバシャと潜ったり跳ねたりを繰り返した。うんうん、よかったよかった。

「ありがとぉございますぅ。おかげで元気になりましたぁ」

元気になっても、アクビが出ちゃいそうな口調は変わらないのね。

「よかったね★」

ボクはウインクした。

「できればぁ、なにかお礼をしたいんですけどぉ」

「お礼かぁ……。大司教にボクの罪を取り消させる、っていうのはできる?」
「そ、そういうのはちょっととぉ……」
「ちょっといいぴよか?」
いきなり、アーサー様が口をはさんだ。
「可能なら、知りたいことがひとつあるぴよが……」
「じゃあ、アーサー様どうぞ」
「すまんぴよ」
「なんですかぁ?」
「実は以前、とある賢者に光の剣を預けたぴよ。その賢者の居場所が知りたいぴよ」
「賢者って、もしかして〝南の賢者様〟?」
ボクは聞いた。
「そうだぴよ」
〝南の賢者様〟といえば、この辺じゃかなり有名なヒトだ。魔導学校の教科書にも載ってるくらい。いつも南のほうからやってくるから〝南の賢者様〟って呼ばれてるらしいんだけど、ドコに住んでるかは誰も知らない。
数百年前に〝魔法〟をカクリッさせた偉人だって学校で習ったケド、アーサー様の話しぶりだと、いまでも生きてるみたい。だとしたら、いま何歳なのかしら……?　ルシファー先生と

かサタンとかとおんなじくらいかなぁ。まさか、ルシファー先生とかシュテルン博士が〝南の賢者様〟だってオチは、ないよね……。
「大司教が現れる前、賢者様はよく城に来て、魔法の手ほどきとかをしてくれたぴよ。その賢者様に、大司教に奪われる前にと思って、光の剣を預けたぴよ」
「へぇ〜」
「それを返してもらって、大司教に対抗しようと思ってるぴよが、賢者様の家を知らないんだぴよ」
「じゃあ、預けたときはどうしたんですか？」
「ちょうどよく賢者様が城に来てたから、そのときに預けたんだぴよ」
「なるほど。うろこさかなびとさん、それってわかる？」
「わたしはムリですがぁ、ウォーターエレメント様ならわかると思いますぅ」
「ウォーターエレメント？」
　ボクとアーサー様、妖精さんたちは、声をハモらせていった。
「この泉の守護精霊様ですぅ。わたしはお会いしたコトないですけどぉ、呼び出す呪文なら知ってますぅ」
　と、うろこさかなびとさんは泉の中心まで泳いでいって、祈るように手を合わせた。そして、ちょっち間延びした呪文を唱える。

「ウォーターエレメント様ぁ、守護精霊様ぁ、どうかわたしの願いを聞き入れて、お姿を現してくださいぃ……」

ボクやアーサー様、妖精さんたちは、これからナニが始まるのかとうろこさかなびとさんのほうをじっと見つめた。

しぃ～～～～～～ん……。

だけど、なぁんにも起こらない。水をうったような静けさとは、まさにこのコト。

「あれぇ～、おかしいですねぇ～……」

とうろこさかなびとさんが首をひねった瞬間！

「はぁ～い！　守護精霊様はココですよぉ～ん！」

っていう声と同時に、うろこさかなびとさんのほうじゃなくてボクらの目の前に、ドロンと誰かが現れた。

それは、薄い布——っていうか帯を身体にまきつけただけの、ちょっとアブない格好をした、キレイなお姉さんだった。

ボクはおろかルルーだって負けちゃいそうなナイスバディにツヤツヤの黒髪、キレイで妖しい顔立ちをして、まるで綱渡りをするみたいに、爪先で水面の上に立ってる。

「ご用はなんなのかしらぁ～ん★」

身体と一緒にクネクネする声で、そのヒトはいった。

あっれぇ〜？　ウォーターエレメントさんって、こんなヒトだったかなぁ……。ちょっち違うような気がする。

「う、美しいぴよ……！」

「ほえ？」

突然、ため息まじりの声がした。ボクは反射的にそっちを見る。男のヒトで、こんなぴよぴよ声してるのは、いまのところ約一名しかいない。

「……ぴよ★」

もはや、アーサー様のカーくんみたいなちっちゃな黒眼はおっきなハートマークになっちゃって、完全にいきなり現れた女のヒトに釘づけ。相変わらず女のヒトは、アーサー様を挑発するように、色っぽくクネクネしてる。

よく見ると、そうなってるのはアーサー様ひとりしかいない。妖精さんたちも、うろこさかなびとさんも、唖然としちゃってる。そりゃそうだ。カーくんは別として、ボクも、妖精さんたちも、うろこさかなびとさんも女のコだもんね。そりゃぁ、ウォーターエレメント――仮称――さんのプロポーションや顔立ちはうらやましいケド、アーサー様みたいにデレェ〜っとするほどじゃない。

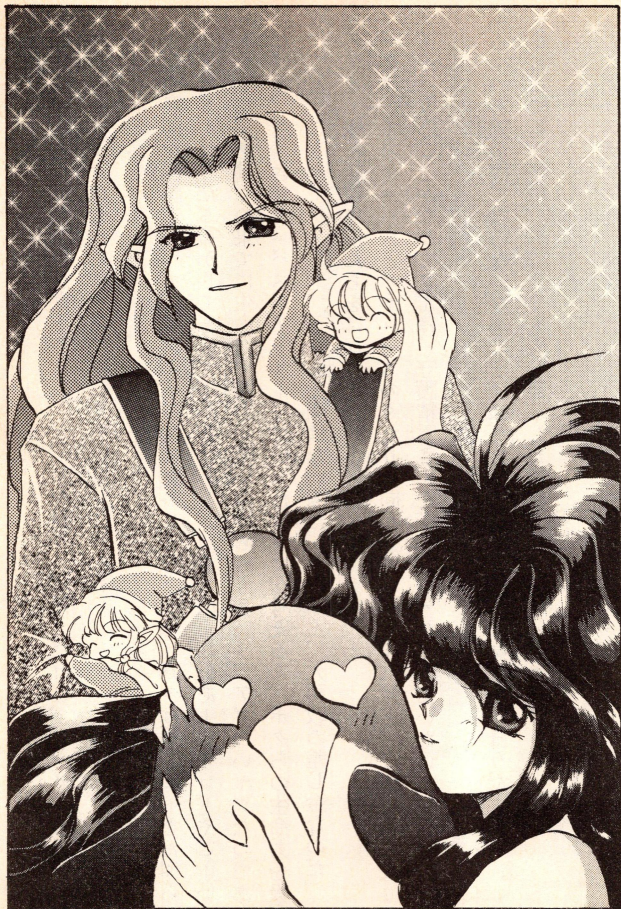
やっぱ男のヒトって、顔がキレイで、ナイスバディで、エッチな服装のヒトのほうがイイのかなぁ……？　ルシファー先生とかも、やっぱそうなのかなぁ……？

って、そんなコトはおいといて。
思い出したぞ！　エッチな格好で男のヒトをたぶらかすモンスター。ウォーターエレメントさんなんかじゃ、ぜぇ～ったいにナイ！
「みんな、気をつけて！　こいつはサキュバスだよ！　ウォーターエレメントさんなんかじゃない！」
「ええっ！」
ボクがいうと、うろこさかなびとさんも妖精さんたちも騒然となった。モンダイは、果たしてアーサー様の耳に届いてるかどうか……？
「じゃ、じゃぁ、本物のウォーターエレメント様はぁ……？」
と、うろこさかなびとさん。眼が、悲しげにうるうるしちゃってる。
「もしかしたら、どこかで捕まってるのかもしれない」
「わたし、探してきますぅ」
いうが早いか、うろこさかなびとさんはザブンと泉の中に潜っていった。
「あ～ら、バレちゃったのねぇ」
いつのまにか、デレデレのアーサー様に、ヘビみたいにしなだれかかってるサキュバスがいった。
「ま、いいわ。……さぁアーサー様ぁ、大司教がお待ちですわよぉん★　あたしと一緒に、お

城に帰りましょうねぇん★」
「ぴよぴよ、帰るぴよ★」
クネクネしたサキュバスの言葉に、アーサー様はキツツキのようにうなずくだけ。もう完全に骨ヌキ状態だ。
「アーサー様！　しっかりして！　これはワナだよ！」
「いや、これでいいんだよ」
という、別な男のヒトの声と同時に、
ポン。
と誰かが後ろからボクの肩を叩いた。
「ほえ……？」
振り返ると、これがまたイイ男！
シュッ、という音が聞こえてきそうな切れ長の眼に、冷たい氷のようなブルーの瞳。これでもかってくらいよく通った鼻筋に、カタチのいいとがったアゴ。手入れがカンペキに行き届いてる長いエメラルド色の髪……。どれを取っても、ルシファー先生やサタン、本当の姿のアーサー様をはるかに上回るカッコよさ！
そんなお兄さんが、いつのまにかボクの後ろに立っていた。
普通ならここで、お兄さんのカッコよさにクラクラぁってくるところだろうケド、ボクはそ

うならない。代わりに、お兄さんをキッ！　と睨みつけた。
なんでかっていうと、お兄さんがボクの好みのタイプじゃないから。
確かにカッコイイのは認めるけど、人を見下したようなキザったらしい微笑み、服装、ポーズ——指にバラをはさんじゃったりして——そのすべてがイヤ。なんか、いかにも下心ありますってカンジだし、それに、男のヒトは顔じゃないよ。中身と、それから、好きな人のことをどれくらいホンキで想ってるか、コレだよね。
そんなコトはおいといて……。
それに、ボクはこのお兄さんの正体を知っていた。サキュバスと一緒に現れた、このお兄さんは……！

「きゃぁ〜〜〜〜〜〜〜〜っ★」

ボクの考えを台無しにするように、いきなり黄色い悲鳴がこだました。カッコよさに騙された妖精さんたちが、お兄さんに群がっていったのだ。
「おや、これはこれはビューティフルな子猫ちゃんたち。悪いけど、キミたちの相手はあとだ。しばし待っていてくれたまえ。あとでタップリ可愛がってあげるから……★」
ウインクとともに、お兄さんは妖精さんたちに向かっていった。ボクにとっては歯がカユくなってくるようなセリフなんだけど、妖精さんたちはもうメロメロだ。

「騙されないで！　そいつはインキュバスだよ！」
ボクは妖精さんたちの眼を覚まさせようと、声を張り上げた。だけど、アーサー様みたいに眼がハートマークになっちゃってて、ゼンゼン聞いてやしない。
インキュバスとサキュバス——。
またの名前を淫魔（いんま）といって、インキュバスは女のヒトを、サキュバスは男のヒトをたぶらかすモンスターだ。たぶらかしてどうするかというと、口じゃいえないあーいうコトやこーいうコトをして、あげくの果てに生命力や魔力（まりょく）を吸い取っちゃうという、アブないヤツなのである。
だけど、さっきサキュバスがアーサー様にいったセリフを考えると、ボクらの生命力を吸い取ってどうこうってワケじゃ、とりあえずはないみたい。たぶん、大司教の差し金なのだ。
「アーサー様と妖精さんたちをはなしなさい！」
ボクは、インキュバスとサキュバスのふたりに向かっていった。だけど、二対一はかなりツライぞ。うろこさかなびとさんは、守護精霊（せいれい）さんを探しにいったきりでいないし。ちょっとピンチってカンジ……。
「ちょっと聞き捨てならないなぁ……。はなしてくれないのは彼女たちのほうだよ」
あくまでもキザに、あくまでも人を見下した態度でインキュバスはいう。
「む～～～～～っ……！」
なんだかムカツク！　ボク、こういうヒトってだいっっっっっキライ！

「それにしても、なぜキミはワタシの虜(とりこ)にならないのだ？」
「それは、男のヒトがカッコだけじゃないってコトを知ってるからだよ！」
　ボクはいい放った。
「格好だけじゃないぞ。ワタシの、このあふれんばかりの愛を、キミは感じないのか？」
「感じないよぉ〜だ！」
　インキュバスに向かって、ボクはあっかんべーをする。
「あんたのいう愛には、〝ハート〟がこもってないのよ！　〝ハート〟が！　そのウソの愛で、いったい何人の女のヒトを食い物にしてきたの？」
　我ながら、ちょっといいスギかなぁ……。でも、いってるコトは間違(まちが)ってない、と思う。やっぱ、恋愛(れんあい)は心だよ、うんうん。
「ふっふっふっふっふっ……」
　インキュバスはうつむいて、すくめるように肩(かた)をふるわせながら笑いはじめた。
「はっはっはっ……、は――――っはっはっはっはっ！」
　最後は高笑い。ひとしきり笑ったところで、インキュバスはボクをまた見下した。
「こんなにあけすけにいわれたのは初めてだ。物事をあんまりハッキリいいすぎるコは、モテないぞ。……まぁいい。しょうがないので実力行使に移させてもらうよ。……すまないがサキュバスくん、手伝ってくれたまえ」

「イヤよ」
インキュバスの言葉に、サキュバスはプイっとそっぽを向いた。
「その小娘(こむすめ)を連れかえるのはあんたの仕事でしょ、さっさとなんとかしなさいよ」
「しかたないなぁ……」
いいながら、インキュバスはサキュバスからボクに視線をうつした。どうやらこのふたり、あんまり仲がよくないみたい。
ジッ、とインキュバスの氷のような眼がボクを見下ろす。
逆にボクは、キッと見上げてやった。
ふたりいっぺんにじゃなくって、ひとりずつ戦うことになりそうだから、その点はラク。だけど、不利なコトはゼンゼン変わってない。モンダイは、アーサー様や妖精(ようせい)さんたちだ。呪文(じゅもん)で攻撃(こうげき)なんかしたら、みんなを巻き込んじゃう。困ったなぁ……。
「サキュバスがダメなら……」
インキュバスはいった。
「このビューティフルな妖精さんたちに手伝ってもらおう」
パチン！
インキュバスは指を鳴らす。その途端(とたん)！
ギッ！

と妖精さんたちの眼が、一斉にボクのほうを向いた。トモダチ同士の、和やかな雰囲気じゃない。敵をニラむ、鋭い眼だ。
「みんな！　ボクだよ、アルルだよ！　眼を覚まして！」
ボクは、必死になって妖精さんたちにいった。だけど、ゼンゼン元に戻る様子はない。なんだか、とっても悲しくなってきた。何年間も離れてたケド、それでも忘れなかったトモダチ関係だったのに……。インキュバスひとりに、それが壊されちゃうなんて……。
「ぐー！」
いきなり、カーバンクルがボクの肩にぴょ～んと飛び乗った。そういえば、いままでドコにいたんだ？　このコは。
「どうしたの？」
「ぐー！」
カーくんは、ボクにモミジの葉っぱみたいなちっちゃいものを手渡した。
「ナニコレ？」
いま自分が置かれてる危機も忘れて、ボクはそれをシゲシゲと見つめた。
それがイキナリ、
ポンッ！
と音を立てて、おっきくなる。

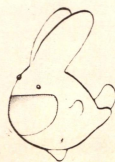
「うわぁ！」
驚きのあまり、ボクはそれを落としそうになった。
いまやそれは、モミジ、というよりはボクの顔くらいある、カエデのうちわみたいだ。ついさっきまでカーくんサイズだったそれの、握りのところがボクの手にぴったりフィットしてる。
「これ、〝芭蕉扇〟じゃない！」
「ぐー！」
〝日出る国〟で、七ぷよ神が持ってたアイテムだ。あおぐと突風が吹き荒れて、いろんなものを吹き飛ばすスゴイやつなのだ。
「コレ、持ってきちゃってたのね」
ひょんなコトから、〝日出る国〟に行く前に手に入れたヤツなんだけど、ぷよぷよ大明神を倒したあとに、てっきり返したと思ってた。
「ぐー！」
「え？　コレを使えって？」
ここでイキナリ突風なんか出したら、インキュバスやサキュバスはおろか、妖精さんたちやアーサー様まで吹き飛ばしちゃう……というコトはない。望んだものだけを吹き飛ばすことができるのだ。〝日出る国〟で使ったときもそうだった。ぷよぷよ大明神だけに突風を浴びせて、その正体をバクロしたんだもんね。

「よぉ～し……！」
ボクは芭蕉扇をかまえて、インキュバス、サキュバスをにらみつけた。
「用意は整ったかな？」
あくまでもキザったらしく、インキュバスはいう。
「悪いけど、そんなことをしてもムダだよ」
そして、サーカスの司会をする団長さんみたいなオーバーアクションで、
「さぁ～あ！　可愛い子猫ちゃんたちよ！　あの悪いコをこらしめてあげなさい！」
インキュバスの掛け声と同時に、妖精さんたちが一斉にボクに向かってくる。
だけどボクは落ち着いて、インキュバスとサキュバスを、思いっきり芭蕉扇であおいだ。
「インキュバスもサキュバスも、飛んでっちゃえ――――っ！」

ゴオオオオオオオオオオオオオッ！

ボクの目の前で、森全体を揺るがすようなモノスゴイ突風が吹き荒れる。
「うわああああああっ！」
「きゃあああああああっ！」
突風にあおられて、インキュバスとサキュバスは一気に吹き飛んだ。
キラ――――ン！

そしてふたりは、空のかなたへと消えていった……。

五　やれやれ、ひとまずは落ち着いたね
……そして、賢者様のおウチは？

インキュバスとサキュバスが飛んでっちゃうと同時に、妖精(ようせい)さんたちも、アーサー様も我にかえった。
みんな、おぼろげながらナニがあったのかわかってて、正気になると同時に、ボクに向かってあやまった。
それをボクは、
「悪いのは、あのインキュバスとサキュバスなんだから、気にしないで」
これだけで許してしまったのだ。う〜ん……、寛大(かんだい)だなぁ、ボクって。やっぱ、ルシファー先生みたいに、いっつも広い心でいなきゃね。
「そういえば、うろこさかなびとはドコぴよ？」
アーサー様が、辺りをキョロキョロしながらいった。

すっかり忘れてた。本物のウォーターエレメントさんを探しに、潜ったきりじゃなかったっけ？　まあ、うろこさかなびとさんはもともと水のモンスターだから、溺れるってシンパイはないんだけど……。

気がつくと、もう夕方だった。

真っ赤な夕日が泉の水面に反射して、オレンジ色というか、朱色に近い赤というか、言葉にしきれない微妙な色合いをかもしだしてる。夕方ちょっと前の、あのキラキラした虹色もいいけど、こっちもナカナカ捨て難い光景だ。

「それにしても、うろこさかなびとさんは遅いねぇ……」

ボクがそういうと、みんな——アーサー様も、妖精さんたちも、カーくんも、「う〜ん……」と心配そうにうなずく。

もう夕方ってコトは、あのインキュバスやサキュバスと、けっこう長いあいだ大騒ぎしてたことになる。それでもまだ帰ってこないのは、まだ守護精霊のウォーターエレメントさんが見つからないってコトなのかなぁ……。それとも、水の中に別のモンスターが待ち構えてて、うろこさかなびとさんまで捕まってたりして……。

そんなシンパイをしながら、ボクらはしばらく黙って水面を見つめた。

すると突然、

ザバッ！

ボクらの目の前の水面がいきなり盛り上がって、うろこさかなびとさんが顔を出した。
「ぷはぁ！」
「うろこさかなびとさん、無事だったんだね！」
「すいませぇん、守護精霊様を助けるのに時間かかっちゃいましてぇ」
「ってコトは、ウォーターエレメントさんも無事なんだね？」
「えぇ、泉の底で縛られてましたぁ。たぶん、サキュバスがやったんだと思いますぅ」
「なるほど……」
とボクがいうが早いか、誰かが水の中から姿を現した。
「はぁ～い★　お待たせぇ～ん★」
サキュバスとあんまり変わんない悩ましい声とともに、
「わたしがウォーターエレメントよぉ～ん★」
とみんなに向かって投げキッスを送ったのは、サキュバスとどっこいのキレイな顔とナイスバディを、バニーガールの衣装で包んだお姉さん。サキュバスとどっこいっていっても、アヤシイ感じじゃなくって、むしろ神々しい。格好はともかく、ああ、確かに守護精霊様だな、ってナットクさせるような雰囲気は持ってる。
「アブないところを助けてくれて、ありがとうねぇん★　お礼に出血大サービスで、なんでもお願いを聞いちゃうわよん★」

「では、〝南の賢者様〟を御存じぴよか？」
早速、アーサー様が聞く。
ウォーターエレメントさんはちょっと考えて、
「ああ、あのおジイさんねぇ★　あんまりわたしの好みじゃないケド、けっこうシブイ御方よね★　そのヒトがどうしたの？」
「その賢者様の家を教えて欲しいんだぴよ」
「へ？　それだけでいいの？」
ウォーターエレメントさんが、素っ頓狂な顔で聞き返した。
「もっとドーンとした願い事はないのぉ？　せっかくなんだから、思い切っていっちゃったほうがいいわよん★」
なんだか、ずいぶんゴーカイな守護精霊さんだね。
「じゃあ、わたしを元の姿に戻して欲しいぴよ」
「う〜ん……。さすがにそれはムリねぇ。魔法で姿を変えられてるんでしょ？　だったら、魔法をかけた本人をなんとかしなきゃ」
守護精霊さんは、心からすまなそうにいった。
「そうぴよか……。じゃあやっぱり、賢者様の家だけでいいぴよ」
「そ〜ぉ？　ゴメンねぇ★　〝南の賢者様〟だったら、ファイヤーエレメントの好きな場所に

いるわよん★」
「は？」
今度は、ボクらのほうが素っ頓狂な顔をする番だ。
「もっとこう……、ドコソコ、みたいに具体的に教えて欲しいんですケド……」
ボクはいった。
「ゴメンねぇち　わたし、現界の地名にはちょっとうとくて……。方向は南で間違いないんだけどねぇ」
「南のほうで、ファイヤーエレメントさんが好きな場所……」
ボクは腕を組んで考えこんだ。
火の精霊のファイヤーエレメントさんが好きな場所ってコトは、やっぱ、火がぼうぼう燃えてるところなのかなぁ。そんなところ、南のほうにあったっけ……？
あああっ！　地図がパッと頭の中に浮かんでこない！　もっとシンケンに地理を勉強しておけばよかった！
とボクが頭を悩ましてると、
「もしかして、火の山のことじゃないかしら？」
妖精さんのひとりがいった。
「火の山ってつまり、火山のコト？」

「っていうのかは知らないケド、この森を南に抜けて行くと、火の山があるの。そこはとっても暑くて、山のてっぺんからはいつも火が出てるんだよ。だから、火の山」
「確か、そんなような場所だったわよ★　わたしは暑いとこが苦手だから、近づけないんだけど……」
ウォーターエレメントさんがうなずいた。
「じゃあ悪いんだけど、そっちの森の出口まで案内してくれない？」
「うん、いいよ！」
ボクがお願いすると、妖精さんたちは一斉に快くうなずいてくれた。やっぱ、トモダチってこうでなきゃね。
というワケで、今日はもう出発するには遅い時間なので、ひとまず泉のほとりで野宿することになった。
アーサー様と、妖精さんたちと、うろこさかなびとさんと、カーくんと、ボクと、ゴハンを食べながらみんなでおしゃべりをした。こんな大勢でオハナシしたりするのは久しぶりで、とっても楽しい。おかげで、みんな寝たのはだいぶ遅くなっちゃった。
その反動かどうかわかんないケド、みんなが寝静まったところで、なんだか心がさみしくなってきた……。
これから、ボクはどうすればいいんだろう……？

このままじゃ、ボクは罪人のままだ。それをなんとかするために、アーサー様の光の剣(けん)を取り戻(もど)そうとしてるんだケド……。

ルシファー先生とかってどうしてるのかなぁ……？

いろいろ、ウラで働きかけたりとかしてくれてるんだろうケド、ホントはボクの目の前に現れて、助けて欲しいなぁ……。

そういえば、なんだかもう何年も先生に会ってないような気がする。それはタダの気のせいだってわかってるんだケド……。

ルシファー先生に、会いたいなぁ……。

わからないくん

ボェ

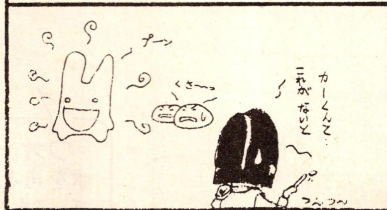
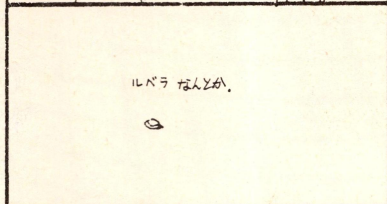
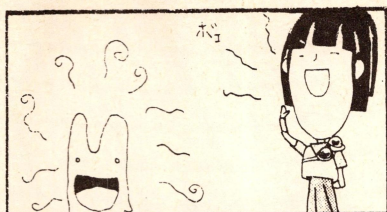
カーくん、どーしたのっ

ルベラ なんとか。

プーン

くさ〜っ

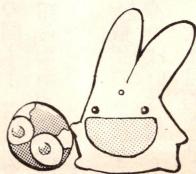
カーくんて…これが ないと

つんつん

by つまらないくん

ウォーターエレメント
水を司る精霊。だからといって、“水商売”のお姉さんじゃないわよん★

一　めざせ南へ！　火の山へ！

……ルシファー先生、どうしてるかなぁ

「来てしまった……」
ジャリッ……！
万感(ばんかん)の思いを込めたつぶやきとともに、はるか異国の地の、潮と砂にまみれた桟橋(さんばし)を、わらじを履(は)いた足がしっかりと踏(ふ)みしめた。
石造りの桟橋は、もはや水平線のかなたとなってしまった自分の国と、形状的にそれほど差はない。わずかながらに故郷を偲(しの)ばせるものは、それだけだ。あとは、齢(よわい)四十にして初めて見聞するものばかりだった。
行きかう人々、係留する船舶(せんぱく)、広がる街並み……。
「ふ〜む……」
男は息をもらした。剣道着(けんどうぎ)に酷似(こくじ)した着物に袴(はかま)、腰(こし)に佩(は)いた、鍔(つば)なしの刀……。そんな、い

かにもサムライといった、男と同じ格好をしている者は、まわりにはいない。織物と獣の革を組み合わせた彼らの服は、形状的には、男の国でいう襦袢や寝間着、作務衣によく似ている。上着などは、前あわせで帯でとめたりするものだけでなく、かぶって着るものも多い。確か、ちゅにっくやらしゃつやらずぼんとかいう名前がついてなかったか……？

建物にしてもそうだ。基本の設計思想からして異なる。壁などの材質は似たようなものだろうが、わらぶき屋根の家などはまったくない。平屋の家が少ないのも目立つ。サムライの国では、二階以上ある建物は城郭くらいしかないというのに。

「ウワサには聞いていたでござるが、これほどとは……」

サムライはまたつぶやいた。〝文化〟なるものの差をまざまざと見せつけられた思いだ。

なにしろ、ここまで渡ってきた船の性能からして驚いたものである。三角と四角の帆をいくつも使い、遠洋航海に耐えうるような強固で巨大な構造の船は、サムライの国――〝日出る国〟の造船技術にはないものだ。文字どおり大海を知らず、他の国の存在を知らなかった〝日出る国〟の民は、遠洋航海の必要性を感じなかったということもあるが……。

ようやく他国の存在を知り、その文化が民の耳に入りはじめたのは、ここ十数年のことである。サムライも、異国人の話や彼らが持ってきた文献などで他国の文化を学んではいたが、実際に足を運ぶのは初めてだった。たまたま〝日出る国〟に立ち寄った商船が、次の目的地はここだというので便乗させてもらったのである。

四十をすでに越え、ひたすら剣の修行に明け暮れた、もはや失うもののない男の、遠い遠い船旅……。そうさせずにはいられない〝思い〟が、彼を突き動かしたのだった。
「おぉ～い……、マサムネどのぉ……」
その〝思い〟を込めて港町をみつめるサムライの背後で、息も絶え絶えの声がした。
サムライ――マサムネは、ほりが深く、兵法を極めた男の精悍な造りの顔を無言でそちらに向けた。その拍子に、後ろで無造作にひっつめただけの長いザンバラ髪がゆれる。
「大丈夫でござるか？　博士どの」
タラップを降りてくる声の主にむかって、マサムネはいった。その向こうのタラップでは、もうすでにこの商船からの荷おろしが始まっている。
博士と呼ばれた男は、その名に似つかわしくない体格の持ち主だった。腕、足、胴体、どの部分を取ってもマサムネより筋骨隆々としており、それを袖なしの格闘技用胴着で包んでいる。そしてその上は、マサムネと同じく武闘を極めたといわんばかりに精悍で太い眉が特徴の顔立ち、スキンヘッドに巻いた鮮やかな真紅のハチマキ。
ただ惜しむらくは、それだけの体格の持ち主にも拘わらず、顔は病にかかったように青ざめてげっそりし、杖を失った老人のようなフラフラの足取りでタラップを降りていることだった。
「だ、大丈夫だ……。少し、休めば、元気になる……」
「さすがの博士どのも、船酔いには勝てなかったでござるか」

ぜぇぜぇとした博士の言葉に対して、冗談めかしてマサムネはいった。
この博士、名をケーニヒス・ティーゲル・フォン・シュテルンという。しかし〝日出る国〟では発音しにくい名前なので、マサムネは博士と呼んでいる。なぜ博士か？　という理由は本人から聞いたが、格好を見るに、どうも信じられない。格闘家であると同時に、魔導師であり、さらに機械技師でもあるということだが……？　これまでのつき合いでその能力の片鱗は見せてもらったが、それでも、いざ博士と呼ぼうとすると、そこはかとない違和感が沸き上がってくる。
「ふぅ〜……っ！」
シュテルンは大きく深呼吸をして、船から降りていくぶん楽になった呼吸でいった。
「さて、どっちから行くかね？」
マサムネがこの地を訪れた理由はふたつあった。〝思い〟の相手に会うためと、修行のためこの地に渡った家族の様子をうかがうため。シュテルンはよき友人、よき好敵手——稽古相手のよしみで、自ら居をかまえるこの地の案内役をかって出たのだった。そろそろ、仕事に戻らねばならない頃だろうし……。
「ふむ……」
マサムネは考え込むように鼻をならした。しかしシュテルンの問いは愚問であった。マサムネの心の内はすでに決まっており、それは彼自身も、シュテルンにもわかっている。

「問題は、どうやって行くかだな」
後頭部をかきながら、少々むつかしい顔でシュテルンはいった。
「というと?」
「普通の方法——徒歩だけどな——で行くと、ここから目的地までは半年かかる。さすがのマサムネどのも、また長旅をするとなるとツライだろう?」
「まあ、早く着ければ、それにこしたことはないでござるが……」
「となると、ちょっと変わった方法で行かなきゃならんワケだが……」
シュテルンは不意に真面目な顔になって、
「マサムネどの、半年の行程を一日と半で走りきることはできるか?」
「はぁ?」
マサムネは素っ頓狂な声をあげた。しかしシュテルンは、まったくのデタラメをいっているのではない。
シュテルンの住居は、この港町からはるか北の雪山にある。そこから彼らの目的地までは一年かかるが、以前、彼はそれを三日で走りきってしまったことがあった。速度は音速を越え、障害物——人工的建造物、つまり家などを含む——を蹴散らし、背後を衝撃波でズタズタにしながら……。
つまりは、それだけのパワーがあるということで、シュテルンはそれをかいつまんでマサム

ネに説明した。
「そ、それは拙者にはムリでござるよ」
さすがのマサムネも、少々狼狽して首をふった。
「そうか……。マサムネどのをかついで走るわけにもいかんしなぁ。なにか、瞬間移動の術かなにかはないか？　確か、ムソウカゲなんとか……」
「〝無双影刃〟のことでござるか？」
「そう！　それそれ」
マサムネは、〝日出る国〟にて最強といわれる剣法、〝鬼斬一刀流〟を伝承し、これを極めている。〝無双影刃〟はその剣法の奥義のひとつだった。
「〝無双影刃〟は見切りの術でござる。戦いの場でなければ使えん。もとより、拙者は魔法や妖術の類には縁のない人間でござる」
「そうかぁ……。じゃ、最後の手段を使うしかないか。あれ疲れるんだよな……」
気だるそうにシュテルンはいった。
「最後の手段でござるか？」
「ああ。ま、人目につくとマズイから、ひとまず街を出よう。……あ、それから、最後の手段を使ったときに、何が起こっても驚かないでくれ、いいか？」
「う、うむ……。心得たでござる」

念を押すシュテルンのえもいわれぬ迫力に、マサムネはうなずかずにはいられなかった。その一方で、心はすでに目的地に飛んでいた。

〝思い〟の相手、アルル・ナジャのもとへ……！

＊　＊　＊

妖精の泉をあとにしたボク、カーバンクル、〝飛べない鳥〟アーサー様は、ボクがちっちゃい頃にお友達になった妖精さんたちの案内で、森の南の出口のほうへと歩いていた。

もう、うろこさかなびとさんを背負わなくていいので、身も心もだいぶラク。せっかくトモダチになれたのに、もううろこさかなびとさんとわかれちゃうのは悲しいケド、まぁ別に、永遠のわかれっていうワケじゃない。ここに来れば、また会えるもんね。事件が解決して落ち着いたらまた会おうってコトで、うろこさかなびとさんとウォーターエレメントさんとわかれたのだった。

ここ妖精の森の中心である泉のまわりは、まるで、誰も入っちゃいけないよっていってるみたいに鬱蒼としてる。だからお日サマの光とか入ってこなくてワリと暗いんだけど、ほかの普通の森みたいにモンスターが暗がりにひそんでそうなコワイ感じはしなくて、むしろあったかでホンワカしてるのは、妖精さんがたくさん住んでるから。

で、ボクらは森の中心から外のほうに向かって歩いてるワケだけど、もちろん、そっちに進めば進むほど、木々がまばらになってくる。出発してからそんなにたってなくて、まだ午前中ってカンジだけど、木々のあいだから木漏れ日がだいぶ差し込むようになってきて、いまは結構明るい。

ボクらのこれからの行程は、とりあえず森の南へ出て、それからアーサー様が光の剣を預けたという〝南の賢者様〟のいる火の山に向かうこと。森を出てから火の山まで三日くらいはかかるらしいんだケド、妖精さんのハナシでは、森を出ると、火の山のてっぺんとそこからモクモクと出る煙が見えるんだって。けっこう高い山みたいだね。

まぁ、目的地が見えさえすれば、ワープの呪文でひとっ飛びだ。三日の距離なんて、なんのその！

というワケで、ボクらは森の出口めざして歩いているのだった。

これがシュテルン博士だったら、「うおりゃぁ〜〜っ！」とかいってダッシュして、今頃はもう火の山に着いちゃってるかもしれない。

なんってったって、博士のパワーはモノスゴイ。ボク、っていうかルシファー先生のおウチから雪山にある博士の研究所までは、普通に行けば一年はタップリかかるのに、それを博士は三日で走りきっちゃうのだ。その代わり博士が走った跡は、ものすごい台風と怪獣が一緒に通ったみたいになってたらしいケドね。

そういえば、シュテルン博士って〝日出る国〟から戻ってきたのかしら……？　博士はルシファー先生と同じく魔導学校の教師をやってるんだけど、ずっと前にボクらと〝日出る国〟に行ったきり、戻ってきてないのだ。もう授業が始まってる時期だというのに、博士がいなくて学校がとっても困ってるってルシファー先生がいってたっけ。博士のことだから、ゴーカイに学校のことを忘れて、マサムネさんと一緒に格闘技のお稽古してたりして……。

それにしても……。

「………」

ボクはなんとなく、ふるさとに思いをはせるってカンジで、木々のあいだのお空を見上げた。

いまごろなにしてるかなぁ、ルシファー先生……。

なんだか、昨日の夜から先生のコトが無性に気になってしょうがない。まぁ、先生の性格は知ってるから、ボクを助けてハイ終わりってするんじゃなくて、事件を根本的に解決しようとしてるんだろうな、っていうのはわかるんだケドね。そうやって、あとくされがないように周りから攻めていって、最後に目的をキチンと果たすのが先生のやり方なのだ。

でも、ときにはそれをジッと待つほうの身になって考えて欲しい、と思う。先生はホントにボクのコトを助けようとしてるのかとか、もしかして先生まで事件に巻き込まれたんじゃないかとかって、心配でしょうがないよ。そんな気持ちを安心させる方法はただひとつ。ルシファー先生の優しい顔を見るコト。

いや、ちょっと待って。

もしかしたら、先生はボクのコトを助けようとしてないのかもしれない……！　きっと助けてくれるっていうのは、単なるボクの思い上がり……？　先生は、ボクのコトを役立たずのおバカな弟子だと思ってて、いなくなって清々してたりして……！　そこまでじゃなくっても、ボクがすぐに死刑になる——はずだった——のも知らないで、裁判でも起こしてゆっくり解決すればいいやとか思って、いまごろは学校で授業してたりして……！

そ、それはちょっと悲しすぎる……！　涙が出てきちゃうよ。

信じたくないし、ボクから見たルシファー先生の性格を考えると、そんなコトをするヒトじゃない、と思う。だけど誰かに、ルシファー先生がそう考えてない可能性はゼロか？　って問い詰められたら、口ごもっちゃう。ヒト——正確には、先生は人間じゃないケド——のホントの心って、他人にはわからないものだし……。

「ふぅっ……」

なんか暗い考えになっちゃったな……。

そんな考えを追い払うように、ボクはうつむいてため息をつき、頭を振った。イキナリいろんなコトが起きたから、ちょっとホームシックみたいなカンジになっちゃったのかな？

ボクらしくないぞ！　そう心にいい聞かせた。

きっとルシファー先生は、ボクを助けようとなんとかしてくれてる。そう信じるコトが大切

なんだ。それに、もしルシファー先生が助けてくれなくても、自分でなんとかしなきゃ！　でないと一流の魔導師なんてまだまだ先だよ。いつまでも先生に頼るワケにもいかないし。もしかすると先生は、それを見越してボクの前に出てこないのかもしれないね。
世の中、なるようにしかならないし、なるように動かなければなにも起こらない。いつも先生はそういってた。
そしてボクらは、なんとかなるように——大司教の陰謀を暴いて、アーサー様をもとの姿に戻して、そしてボクの無実をはらすために、南に向かってるのだ！
「どうしたぴよ？」
いきなり、ボクの横をペンギンさんみたいな短い足でペタペタと歩いてるアーサー様が、ボクを見上げていった。黒真珠みたいなキラキラした眼が、心配そうにボクを見つめる。
「どうしたって、ナニが？」
「なんか、考え事してるようだったぴよから……。心配事でもあるぴよか？」
ボクがアレコレ考えてるのを見て、心配してくれてるみたい。
「大丈夫、心配しないで」
ボクはいった。それでもアーサー様は、ボートのオールみたいな羽をパタパタさせながらいう。ボクを元気づけようと一生懸命ってカンジだ。
「安心するぴよ。わたしが必ず、キミを守ってみせるぴよ。光の剣さえ手に入れられれば、そ

ぴよ」

「ありがと。アーサー様って、やさしいんだね」

そういってボクがニッコリすると、アーサー様はテレ隠しをするようにそっぽを向いた。

「いやまぁ……。どんな心配事があっても、世の中はなるようにしかならないし、なるように動かなければなにも起こらないぴよ。これは〝南の賢者様〟の口グセぴよが、なんだか元気の出る言葉ぴよ。なにしろ、いま我々はまさになんとかなるように動いてるぴよから」

「そうだね」

はいいんだケド、なんだか賢者様の口グセって、ルシファー先生のとよく似てるなぁ。もしかして、賢者様ってルシファー先生だったりして……！　いやまさか！　たぶん〝悟り〟みたいなもんで、一流の魔導師になるとそういう考えに行き着くんだよ。ボクも、早くそんな域に達することができるようにがんばらなきゃ……！

二　いま明かされる、ぷよぷよ大司教の陰謀っ！

……なんだか、すごいコトになってるぞ

森の中を歩きながら、ボクはアーサー様にたずねた。いままでずっとわたわたしてて、聞き逃してるコトがあったのだ。

「そういえば、ずっと気になってたんだケド……」

「なんだぴよ？」

「どうしてアーサー様は〝飛べない鳥〟に姿を変えられちゃったんですか？　それよりもなによりも、アノぷよぷよ大司教っていったいナニモノなんです？」

「その前ぴよに！」

ボクがセリフをいいおわるか終わらないかのウチに、アーサー様はペンギンさんみたいな羽をピッとあげた。ようするに、ヒトがよくやる、「ちょっと待った」とかいって制止するときに手のひらを相手に向ける、あのポーズみたい。

「なんです？」

「敬語はやめるぴよ」
「どーしてです? やっぱり城主様なんだから、それなりの礼儀をもってお話ししないと……」
やっぱ一流の魔導師たるもの、礼節はキッチリしておかないとね。ホントは、ルシファー先生に叩きこまれたんだケド……。
「そんなのは、この際忘れるぴよ。わたしは、キミを命の恩人だと思ってるぴよ。なにしろキミが来なかったら、ずっとあの地下独房を脱出できなかったんだからぴよな。それと同時に、キミのことを得難き友人だと思ってるぴよ。友人同士では、敬語など使わないだろうぴよ?」
「は、はぁ……」
「それとも、キミはわたしのコトを友人だと思ってくれないのぴよか?」
アーサー様の言葉には、とっても悲しい響きがあった。
「とぉ～んでもない!」
アーサー様の悲しげな心を吹き飛ばすように、ボクはぶんぶんと首を振った。
「だけど、ボクはスグ友達づきあいしちゃうクセがあるから、さすがに城主様相手にそれは失礼かなぁ～って思って……」
誰とでもスグお友達になれちゃうのが、ボクのいいところ。だけど、それがいつも通用するとは限らないのがオトナの世界。ってルシファー先生がいってた。

「やはり、思ってたとおりぴよ。キミは、誰とでも友達になれる、明るい心の持ち主だと最初に会ったときに感じたぴよ」

うんうん、とアーサー様は腕――羽を組んでうなずいた。そして今度は、オペラ歌手みたいに右の羽を高くかかげ、左は胸にあてて、歌うように語りはじめる。

「たとえば、我々を案内してくれている妖精たちぴよ。彼女らは俗世のしがらみなど関係ないから、誰とでも友達づきあいできるぴよ。アルルどの、キミは彼女たちと同じ汚れなき妖精のようだぴよ」

「はぁ……」

いきなりナニをいいだすんだ？　このヒトは……。

ボクやカーくん、妖精さんたちは、なんだかよくわからない論理の展開――っていうか、みょ～なキザなセリフに、あんぐりと口を開けてアーサー様を見た。いつのまにか、みんなの足は止まってる。

そんなボクらの視線に気がついたアーサー様は、テレ隠しにコホンと咳払いをひとつして、またしゃべり始めた。

「まぁとにかく、わたしとキミは友達なんだから、敬語も〝様〟をつけるのもやめるぴよ。どうしてもダメなら、領主として命令するぴよ」

「へ？　どういうふうに？」

ボクが問いかけると、アーサー様はイキナリかしこまっていった。
「アルル・ナジャ、我、アーサー・ペンドラゴン・キャメロットの友達になることを命ずるぴよ」
「トモダチになれ、なぁんてヘンな命令だね」
という妖精さんの言葉に、ボクらは——アーサー様も一緒(いっしょ)になっていっせいに笑った。確かに、そんな命令を出す領主様なんて見たことナイ。だけどアーサー様らしいといえば、らしいかもね。
「じゃぁさ、ボクからもひとついっていい？」
笑いがおさまった頃にボクはいった。
「なにぴよ？」
「〝どの〟っていうのはヤメテね。なんだかくすぐったいから」
ずっと前、マサムネさんからそういわれてたときにも、ちょっとくすぐったい感じがしてた。まぁ、マサムネさんはそういうセリフが似合うヒトだからいいんだケド、飛べない鳥の姿で〝どの〟とかっていわれるとちょっと……。
「わかったぴよ、アルル」
アーサー——様——は、うれしそうにこっくりとうなずいた。とにもかくにも、これでボクらはトモダチだ！　ってよく考えると、お城の地下牢(ちかろう)で初めて会ってから、ずっと友達づきあ

いしてきたような気がする……。モンダイなのは言葉づかいだけで。……ま、いいか。それでアーサーの気が済むんなら。
「で、大司教のコトなんだけど……」
気持ちを切り替えて、ボクはいった。そもそもボクは、コレが聞きたかったのだ。
「それなんぴよが……」
さっきの元気はどこへやらってカンジで、アーサーは急に悲しそうにうつむいた。姿カタチがモンスターで、人間みたいな表情がないケド、そういう雰囲気がヒシヒシと伝わってくる。
「が……？」
うながすつもりはないケド、ボクはいった。
「数年前、ヤツはキャメロットに流れてきたぴよ。そして、父上から新しい宗教を興す許しを得て、大司教と名乗るようになったんだぴよ。本当は、誰に対しても優しい父をいいくるめただけなんだろうぴよが……！」
「…………」
アーサーの言葉からにじみ出てくる悔しさと憎しみの迫力に、ボクらは声もでない。
「父ウーサーから許しを得た瞬間、ヤツは一気に行動を起こしたぴよ。まず身体の弱かった父を謀殺し、わたしを魔物に変えて地下牢に押し込めたぴよ。そして、世に父の崩御を発表し、精巧な人形を作って、それを後継者アーサーとして玉座におさめたんだぴよ」

「ああ、それで肖像画が掲示板に張り出されてたのね。なんだか、街もちょっと騒がしかったし……」
「キミ、知らなかったのか？」
「えへへ～、ずぅっと魔法の勉強ばっかりしてたから……」
街にお買物に行ったときに、ああ、掲示板にカッコイイ男のヒトの肖像画があるなぁ、誰だろう？　新しい領主様なんだ、ってくらいにしか思わなかったんだよね。もうちょっと世の中のコトにも眼を向けなきゃイケナイってはわかってるんだケドね……。
それはともかく。
「どうして、大司教はそんなコトをしたワケ？」
「それは……」
「あーわかった！」
出かかったアーサーの言葉を、ボクはさえぎった。
「大司教の興した、新しい宗教を広めるためだね」
そのために大司教は、手っ取り早く権力を握ろうとしたのだ。権力は、俗世のコトならなんでも思い通りになるコワイ力だ。それを手に入れるために大司教は、先代の領主様を殺し、ホントの跡継ぎのアーサーを牢に入れて、人形を玉座につかせたのだ。そうしちゃえば、まさか人形にできるわけないから、実際に政治をするのは大司教だけだもんね。

だけどアーサーは、ゆっくりと首を振った。
「確かに、表向きはそうだぴよ。ヤツが興したのは、ぷよぷよを完全生物と崇める宗教だぴよ。それゆえにヤツはぷよぷよ大司教と呼ばれているんだぴよ」
「なるほど、それで〝ぷよ類憐れみの令〟違反だとかいって、ボクを逮捕したんだね」
「そうだぴよ。しかし、宗教はヤツの野望のワンステップにすぎないぴよ」
「というと？」
「ヤツは、この世をぷよぷよで埋め尽くすとともに、光の剣と闇の剣をそろえて、キャメロットの領地、やがては世界を支配しようとしているんだぴよ！」
「え――――――――――――っ！」
ボクもカーくんも、妖精さんたちも飛び上がって驚いた。
なんだか、スゴイことになってきたぞ。この世をぷよぷよで埋め尽くそうなんて、まるでぷよぷよ大魔王みたいだ。それに世界を支配しようなんて、〝日出る国〟のぷよぷよ大明神みたい。
ぷよぷよ大司教って、もしかして、ふたり――二匹？――が合体かなんかしたモンスターだったりして。
「で、アーサーは、大司教にそうさせないために光の剣を南の賢者様に預けた、っていうワケ

なのね？」
　とボクがいうと、アーサーはますます悲しげにうつむいてしまった。なんだか、イヤなコトを思い出させちゃったみたい……。
「わたしは、見てしまったんだぴよ。賢者様の来訪を告げに父上の寝室に行ったとき、呪いで父の病の進行を早めている大司教の姿を……！」
　ギュッ！　ってコブシを握るみたいに、アーサーは右の羽の先っちょを丸めた。
「………」
　ボクらはコトバも出ない。アーサーはちょっと深呼吸して続ける。
「ヤツにずっとうさんくさいものを感じていたわたしは、そのとき初めて大司教の陰謀を悟ったぴよ。そしてとっさに光の剣を預け、巻き込まれないようにと賢者様を帰してしまったんだぴよ」
「そのあとに、呪いで飛べない鳥にされちゃったと……」
「そうだぴよ」
「でも、どうして大司教はアーサーをすぐ殺さなかったんだろ……？」
　ボクは首をかしげた。
「いままでのハナシからすると、大司教の陰謀を知ってるのはアーサーだけなんでしょ？」
「同時に、光の剣をどこにやったかを知ってるのもわたしだぴよ。大司教はそれを吐かせるた

めに、わたしを生かしておいたんだぴよ」
「あ、な〜るほど」
ボクはポンと手をうった。
「で、今度は逆に光の剣を取り戻して、大司教にガッ——ンとやるワケだね？」
ボクがいうと、アーサーはこっくりとうなずいた。
「もしかすると、光の剣の力で呪いが解けるかもしれないぴよ」
ってコトは、あの超カッコイイ本当の姿が間近で見れるワケか。それはちょっとグーなカンジ。事件が解決したら、サインかなんかもらっちゃおうかな。
なぁんて、ちょっちミーハーなコトを考えてると、アーサーは、ちっちゃな黒目のあったかな眼差しをボクや妖精さんたちに向けた。
「ホントはもうあきらめかけてて、大司教に光の剣のことを話してしまおうと思ってたところだったぴよ。だけど、結果的にそうはならなかったぴよ。それもこれも、アルルやみんなのおかげだぴよ」
「そぉんなコトないよぉ」
ポリポリ。
アーサーの言葉にテレくさくなって、ボクは頭をかいた。妖精さんたちも、もじもじしてる。
でも、まだここで安心しちゃぁイケナイ。なんてったって、事件がゼンブ解決したワケじゃ

ないんだもんね……！

＊　＊　＊

午前のさわやかな日差しを浴びて、ルシファーの家がたたずんでいる。
草原の真ん中で、バラの生け垣にかこまれた大きな白い家は、まるで有史以前からそこに存在していたかのような、持ち主と同じくあらゆる叡智を詰め込んだかのような重みをかもしだしていた。
人気はない……わけではない。しかし、ひとりふたりで住むにはあまりにも大きすぎるその屋敷は、いやにひっそりとしていた。
屋敷の、門がわりのバラのアーチの前に、シュテルンとマサムネは立っていた。
「ふぅっ……」
シュテルンは、しばし深呼吸をした。ここにたどり着くために大技を使ったため、呼吸が少々乱れていたのだ。
そこへ、背後から聞きなれた声。
『なんだ、シュテルンではないか』
シュテルンとマサムネは同時に振り返った。

「おう、サタン、ルルーくん」
　シュテルンとマサムネの後ろからやってきたのは、親友の双子の兄、サタンと、かつての教え子のルルー、そして彼女の従僕のミノタウロスだった。
『船酔いのおまえが、よく帰ってこれたな』
「おまえこそ、どこまで飛んだか知らんが、よくここまで戻れたものだ」
　和やかに悪態をつきあうふたり――そのどちらかといえばサタンのほうを、マサムネは若干の憎しみを込めた冷ややかな眼でみつめた。彼の故郷、〝日出る国〟で起きた事件は、もともとサタンが発端だったのだ。いまでこそすっかり事態は落ち着いているが、そうでなければこの場で斬り捨てているところである。またマサムネにとって、サタンは恋敵でもあった。さすがに、シュテルンのように会話はできない。
　そんなマサムネとは対照的に、ルルーは眼を剝いてシュテルンを見つめていた。驚きのあまり声も出ず、少々逃げ腰になっている。
「どうした？　ルルーくん」
　ルルーの表情に気がついたシュテルンが問いかけた。
「え？　あ、あの……その……」
『ルルーは、おまえが〝獣王変化〟した姿を見て驚いてるのだ』
　しどろもどろのルルーに、サタンが助け船を出した。

『こんな草原のド真ん中にあんな姿でいたら、丸見えに決まってるだろう』
「そういやぁ、そうだな」
がはは、とさして悪びれたふうもなく、シュテルンは笑い飛ばした。
「しかし、手っ取り早くマサムネどのとここに来るには、それしかなかったのだ」
そして視線をルルーに向けて、
「驚かせてすまん、ルルーくん。実は、あれがわたしの本当の姿なのだよ。〝獣王〟ケーニヒス・ティーゲル・フォン・シュテルンといえば、魔界で知らぬ者とてない、生きとし生けるものや地水火風の精霊を統べる者なのだ」
『要するに、ケモノの王様だな』
サタンの茶々を無視して、シュテルンは続ける。
「しかし安心したまえ、ルルーくん。別にキミをとって食おうとはしないし、キミを可愛い弟子だと思う心に変わりはない」
「そ、そうだったんですの……」
安堵しつつも、まだ若干の驚きを残しながら、ルルーはつぶやいた。
「ところでサタン、どうしておまえたちはここに?」
『おまえたちこそ、なぜ戻ってきたのだ?』
「いやまぁ、マサムネどのがどうしてもっていうからな」

『フン……』
軽く鼻をならして、サタンは睨むように目線だけをマサムネに向けた。
『残念ながら、アルルはここにはおらんぞ』
「なぜだ？」
『なぜかはわからん。だが、領主、正確にはキャメロット城の大司教とやらに逮捕されたのは事実だ』
「なんと！」
これまでじっと口をつぐんでいたマサムネが、驚きのあまり思わず声をあげた。そして、視線でサタンに詰め寄る。
「サタンどの！ 貴公というものがおりながら、なぜアルルどのの逮捕を阻止できなかったでござるのか？」
口調はまだおだやかで礼儀を含んでいたが、その中に、いまにも斬りかからんばかりの勢いが隠されている。
『オレが悪いんじゃない！ アルルの逮捕を止められなかったのは、ルシファーの責任だ。あまつさえあのヤロウ、姿をくらましやがった……！ オレは、アルル釈放の交渉をしに、わざわざキャメロット城まで赴いたのだぞ。この〝魔界の貴公子〟サタンがな！』

「しかしアルルくんがそばにいないところをみると、交渉は決裂したようだな」
皮肉っぽくシュテルンが口をはさんだ。
『そうではない。捕らえられた地下牢から、アルルは自力で脱出した』
「ほほう、なかなかにパワフルなことをやってのける娘だな。時の女神の小さい頃にそっくりだ」
『そうか、だからか！』
出し抜けにサタンが声を張り上げた。
『だからルシファーのヤロウはアルルを……！　いや、いまはそんなことを気にしてる場合ではない』
「というと？」
シュテルンが問う。
『オレたちは、闇の剣のことを調べにここに来たのだ。ヤツの書斎にはわけのわからん本が山ほどあるからな』
「闇の剣？　アルルくんではないのか？」
『そうだ。大司教が欲しいのは、アルル逮捕という事実だけだ。それで世論を操作し、その実、光の剣と闇の剣をそろえて世を支配しようと企んでるらしい』
で、サタンは大司教と話し合い、サタンが先にアルルを見つけたら、その報告を大司教に、

大司教がアルルを捕らえたら、その身柄をサタンに、ということになった。その契約を有利に運べるよう、サタンはまず闇の剣を探すことにしたのだった。
『ま、実際に大司教からすべてを聞いたワケではないが、オレの見立てに間違いはないだろう。それに、アルルは自力で脱獄できたほどの娘だ。多少救出が遅れても死ぬことはあるまい。逆にそうでなければ、オレの妃になる資格はない』
「可愛いコには旅をさせろ、か」
『まぁな』
「サタンどの、ひとつだけ確認しておきたいでござる」
神妙な面持ちで、マサムネが口をはさんだ。
『なんだ？』
「アルルどのは、真に犯罪をおかして捕らえられたのではないでござるな？」
『もしそうなら、それはアルルが悪いのだ。オレがわざわざ助けたりはしない。しかし今回は、大司教が自分の野望のために仕組んだことであって、アルルに明確な罪はない。それはオレが保証してやる』
「それを聞いて安心したでござる。礼といってはなんだが、代わりにいいことを教えよう」
『なんだ？』
「かの闇の剣、拙者の記憶が確かならば、シェゾなる魔導師が所有していたでござる」

『シェゾ?』
「ああ、あの悪役魔導師ですわね」
『知ってるのか? ルルー』
「ええ、ずいぶん前ですけど、アルルと一緒に戦ったことがありますわ」
「彼奴は、アルルどのの秘められた魔力を吸収しようとしているでござる」
『フン、人間風情が……。アレにどれほどの価値があるかも知らんで……』
サタンは重々しくつぶやいた。滅多に見せない、〝魔界の貴公子〟としての、魔界の王の後継者としての風格を漂わせている。
「アルルの潜在能力って、そんなに高いんですの?」
少々ムッとしながら、ルルーは尋ねた。
「まぁな」
サタンの代わりに、シュテルンがそれに答える。
「もちろんルルーくんにだって、アルルくんに匹敵する潜在能力がある。でなければ、アルルくんやルルーくん、サタン、ルシファー、マサムネどのやわたしがこうして邂逅することはなかっただろうからな」
「それは、どういうことですの?」
「大きな力と力は、ときとして強く引かれあうのだ。それは我々では変えられぬ、時の運命に

もとづく法則だ。ウソだと思うなら、歴史書をひもといてみるといい。力と力が引かれあい、ときには激しくぶつかって、ときには仲良く融合（ゆうごう）して、歴史が造られていくのだ」
「はぁ……」
まだ少々理解しかねているルルーを尻目（しりめ）に、マサムネが急（せ）かすようにいった。
「その法則とやらに従って、早急に闇の剣を手に入れるでござる。それが運命ならば、アルルどのを救出する手助けになるのでござろう？」
『そう急くな、マサムネ』
なれなれしいサタンの口調に、マサムネは少々顔をしかめた。
『ようは、そのシェゾとやらを見つければいいのだろう？　しかし、ルシファーのヤツはこういうときにしか役に立たんというのに、どこをほっつき歩いているのだ？』
「確かに、ルシファー先生の魔法の水晶玉（すいしょうだま）があれば、イッパツですわね」
「だったら、〝魔導レーダー〟を使えばいい。古い型だが、ルシファーにやったヤツが家にあるはずだ」
「まどうれーだー、とはなんでござるか？」
「要するに、占（うらな）い師やなんかが使う魔法の水晶玉みたいなことを、機械でできるようにしたものですわ」
マサムネの問いに、ルルーが答えた。

「目標の魔力を探知することができるんですって」
「ほう……。この地では、魔導を機械でなすでござるか。スゴイでござるな」
感心するマサムネに向かって、サタンは肩をすくめてかぶりをふる。
『いやいや、そんなことができるのも、やろうと考えるのも、この〝ケモノ王〟ぐらいのもんだ。……ま、とにかく家に入らねばハナシにならん。行くぞ！』
「あのー」
バサァッ！
『わぁっ！』
カッコつけてマントをひるがえした瞬間に出くわした少女の顔に、サタンは思わず飛びすさった。
「そんなに驚かれなくたって……」
『いきなりおまえが出てくるからだ、キキーモラ』
「だって、みなさんなかなか家に入ってこられないんですもの」
バラのアーチの下で、サタンのあまりの驚きようにムッとしながら立っていたのは、ルシファーが雇ったメイドのキキーモラだった。
「そういえば、ずいぶん長いこと話してたみたいだな」

空を見上げながら、シュテルンがいう。太陽はもはや、天頂からやや西よりに傾いている。つまり彼らは午前中に邂逅してから、午後になるまでずっとルシファーの家の門の前で話し込んでいたのだった。

『で？　なんの用だ？　キキーモラ』

サタンが問うと、キキーモラは一枚の紙切れを差し出した。

「ルシファー様からの伝言です」

『いまさら、なにを伝言しようというのだ……？』

いぶかしげに、サタンは紙切れに書かれた文字を読みはじめる。その、サタンやシュテルンら魔界の者にしか理解できない魔法文字を読み進むにつれ、次第に表情が勝利を確信した笑みに変わっていった。

「どうしたんですの？　サタン様」

『ルルー、悪いが闇の剣探しはおまえとミノタウロスだけでやってくれ。オレとシュテルン、マサムネはキャメロット城に行く』

「どういうことでござるか？」

『ルシファーのヤツも、たまには役に立つな……』

マサムネの言葉など意に介さずに、サタンはつぶやいた……。

三　賢者様のおウチについたぞ！

……だけど、そこにいたのは……！

『わ――――っはっはっはっはっは……！』

「がっはははははははははは……！」

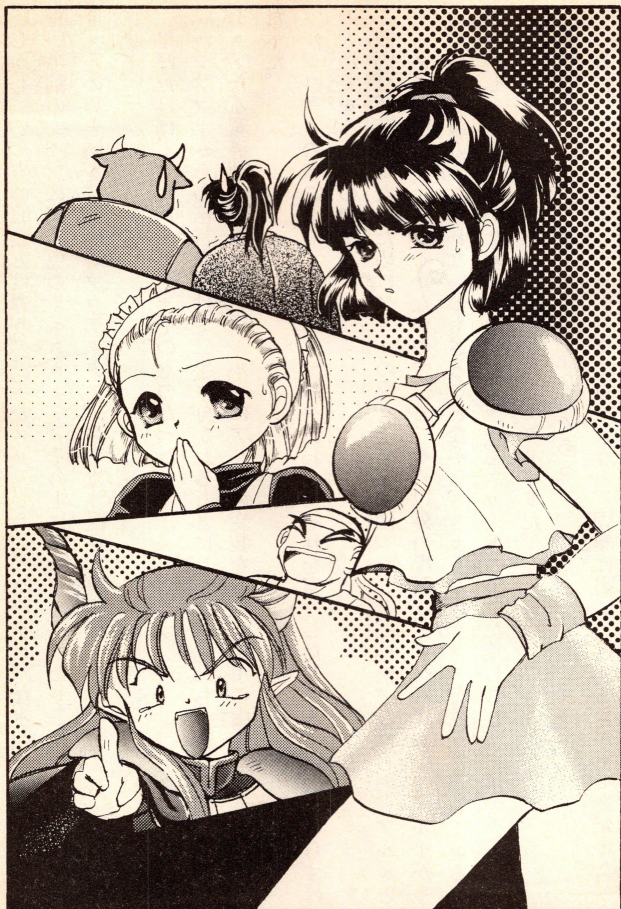
ルシファーの家のダイニングで、サタンとシュテルンは腹もよじれんばかりに笑いころげていた。

「…………ッ！」

表情を滅多に出さないマサムネやミノタウロスまでも、背を向けて肩をふるわせている。もちろん、破顔しそうになるのを必死でこらえているのだ。

キキーモラですら、こみあげてる笑いを我慢するあまり、可愛らしい顔が奇妙に歪んでいる。

「みんな、ヒドイですわ！　人にこんな格好させておいて！」

ただひとりだけ笑っていないルルーが吼えた。

しかし、いつもの服装とは違う。派手なスリットの入った悩ましげな水色のドレスではなく、青い半袖のシャツに同じ色のミニスカート。その上に袖なしのゆったりした白いシャツをかぶり、左の肩と胸を守る魔導プロテクター。豪奢な水晶色の長髪は、短い栗色のウィッグで隠してある。

格好だけは、アルル・ナジャそのものだった。

ルシファーからの伝言を受けて二手に分かれることにしたサタンたち一行は、闇の剣を持つシェゾなる魔導師の強さを案じ、ルルーにアルルの変装をさせて相手の虚をつこうと考えたのだった。

ルシファーの家に入り、キキーモラに手伝わせてそれを実行したところ、屋敷をゆらすほどの大爆笑をうんだのである。

敗因は、時間がないためにアルルの服をそのまま使ったことだった。なにしろ、アルルと同サイズの場所がウエストしかないのである。それ以外の場所は、すべてにおいてルルーが上回っている。服の丈があわないのもさることながら、スカートはヒップを危うく隠しているにすぎないし、胸が大きいために下の青いシャツをスカートの中にたくしこむことができない。プロテクターはストラップを最大に伸ばしてギリギリだ。

要するに、〝つんつるてん〟の状態なのである。

これに、アルルのように子供っぽく見せようと、両頬に書いたうずまきがトドメだった。

かくして、見るも無残なアルルの変装ができあがったのだった。
「サタン様がやれっていうから、こんな格好したのに……」
『いやははは……。すまんすまん』
ムクれるルルーに、サタンは涙目(なみだめ)であやまった。
「しかし、これで変装だってわかんなかったら、私はシェゾとやらに拍手(はくしゅ)を送りたいね」
いちはやく笑いの渦(うず)から立ち直りかけたシュテルンがいう。
「い、いや……、は、話に、よれば、シェゾとやらは、頭の中は三流と、聞くでござる。も、もしかすると、バレないかも、しれないでござる……」
「ちょっとマサムネさん、笑いたかったら思いきりやったらどうなんですの?」
笑いをこらえて言葉がとぎれとぎれのマサムネに、ルルーがまた吼(ほ)えた。
『ところでシュテルン、シェゾの居場所はわかったのか?』
できるだけルルーのほうに視線を向けないようにすることで、笑いから立ち直ったサタンが問いかける。
「うむ、意外と近くにいるぞ。ワープで運べる距離(きょり)だ」
水晶(すいしょう)の半球を金属の機械部品でゴテゴテと包みこんだ形状の魔導レーダーを操作しながら、シュテルンが答えた。古い型、という彼の言葉通り、水晶は少々曇(くも)り、金属部分はところどころサビている。

『わかった。ミノタウロス、ルルーを抱えろ』
「ぶも」
「ところで、その機械でアルルどのの居場所はわからないでござるか？」
ようやく立ち直ったマサムネが口をはさんだ。
「最初にやってみたが、ダメだった。さっきもいったとおり、これは古い型だからな、ちょっとでも魔力の干渉があったりすると、すぐ感知できなくなってしまうのだ。どうやらアルルくんは、そのような場所にいるらしい」
「なるほど」
『準備はいいか？　ルルー、ミノタウロス』
魔導レーダーの水晶を覗きこんで位置を確認したサタンがいった。
「オーケーですわ」
「ぶもー！」
屈強なミノタウロスの肩に座ったルルーがうなずき、それに呼応するようにミノタウロスも首を縦に振る。
『よし行くぞ！　ワープ！』
ビシュンッ！
サタンの声に応じて白い光がルルーとミノタウロスを包み、一瞬にしてふたりをこの場から

消し去った。
「さて、今度は我々の番でござるな」
いいながら、マサムネは壁に立てかけておいた刀をつかんだ。
「〝獣王変化〟はアリか？　久々に思いきり暴れたいぜ」
指をボキボキ鳴らしながらいうシュテルンに、サタンはゆっくりとうなずく。
『空間のつながりをブチ壊さなけりゃな。ま、せいぜいハデにやろうではないか！』

＊　＊　＊

ヒュウウウウウウウウウ……ウン！
ワープの呪文特有の、風がうなるような音が、眼をつぶって神経を集中させるボクらを包みこんでいる。
その音がだんだん弱くなっていって、とぎれると同時に、ふわふわしてなんだか頼りない、まさしく地に足がついていない感触も消える。いまでは、しっかり地面を踏みしめている。
ボクは眼をあけた。
さっき呪文を唱えるときに眼をとじる前とはゼンゼン違う光景が、ボクと肩のうえのカーバンクル、そしてボクの脇にいるアーサーのまわりに広がっている。

やわらかであったかな妖精の森じゃぁない。ゴッゴツしてて暑い火山地帯だ。まわりにあるのは草木じゃなくて、土くれやおっきな岩ばかり。

上を見ると、午後の太陽を覆いかくそうとしてるみたいにモウモウと立ち上る火山の煙。下には、ふもとの火山地帯の茶色から、森林地帯の緑に変わっていく鮮やかなグラデーションが広がっている。ボクらがワープしてきた妖精の森は、もはやどれだかわかんない。歩いて三日の距離を一気にワープしちゃったし、それに、上から見た妖精の森がどんなカタチかなんて知らないし……。

ボクらが立っているのは、だいたい火山の中腹くらい。森の出口から見えるところを目指してワープしちゃったもんだから、けっこう高いところに着いちゃったのだ。

そういえば、慌ただしくて妖精さんたちにお礼をちゃんといってないなぁ。落ち着いたら、それも兼ねてまた妖精の森に行こうっと。泉にも行けば、うろこさかなびとさんやウォーターエレメントさんにも会えるしね。

それよりもなによりも、モンダイは……。

「あ！　あれじゃないぴよか？」

いきなりアーサーが、ペンギンさんみたいな右手でナナメ下のほうを指した。見ると、そんなに離れてないところにちっちゃな木造りの家がある。家、っていうよりは、山のホッタテ小屋ってカンジだ。

「賢者様のおウチ、っていうワリには、ちょっとちっちゃくない？」
といいながらも、ボクははるか北の雪山にあるシュテルン博士の研究所のことを思い出した。博士の研究所も外から見たらちっちゃいんだけど、実は雪山の中に、広い広い地下室があるのだ。もしかしたら賢者様の家も、そうなってるのかもしれない。
それに、まわりを見渡しても、そこ以外に建物はないみたい。
「とりあえず、行ってみよっか」
ボクはいった。もしあそこが賢者様のおウチじゃなくても、そこに住んでるヒトに、なんか聞けるかもしれないし。
ボクらはその家に向かって、慎重に降りはじめた。ゴロゴロしてる岩のおかげで歩きにくくて、気をつけてないとスグに転びそうになっちゃうのだ。アーサーなんかペンギンさんみたいな短い足をしてるから、ホントに何度も転んじゃう。右足についたおっきな鉄球も、普通にあるくときよりずっと邪魔になってるみたい。
「おぶったげよか？」
「いや、いくら友達とはいえ、婦女子の手を借りるのは男の恥だぴよ」
そんな会話を何回か交わしつつ、ボクらはなんとか家の玄関に到着。
「こんちにちはぁ〜！　賢者様いますかぁ〜？」
ボクは質素な造りのドアを叩きながらいった。なんだか何百年もたったような家で、ちょっ

と力を入れて叩くと壊れちゃいそう。
「もしもぉーし!」
ドンドンドン!
しばらく待っても返事が来ないので、ボクはまた叩いた。だけど、やっぱり返事は来ない。
「誰もいないのかなぁ」
「そ、それは困るぴよ」
そりゃそうだ。せっかくココまで来たのに……。
ボクは、なにげにドアのノブを回した。すると……。
ガチャリ。
ドアは開いた。鍵がかかってなかったのだ。不用心だなぁ。
「しっつれいしまぁーす」
ルシファー先生のおウチに来たときのキキーモラちゃんのマネをして、ボクはそぉっと玄関を開けた。
家の中は真っ暗で、まるでイキナリ夜になっちゃったみたいだ。ボクは慌てて外のほうを見た。空では、やっぱり午後のお日サマが見下ろしてる。
「これは、どういうコトぴよか?」
アーサーが驚いてつぶやいた。ボクもおんなじ気持ちだ。

始めは窓の位置の関係とか、火山がお日サマの光を邪魔してるのかな？　って思ったケド、どうやら違うみたい。魔法かなんかで、光をさえぎってるみたいだ。完全な暗闇、っていうワケじゃないんだけど、小さな賢者様の家を見渡せないくらいには暗い。
「誰かいるの……？」
その誰かを探して、ボクは眼をこらして暗闇を見渡した。すると、床の上に倒れてる人影みたいなものを発見！
「あれは……！」
賢者様かもしれない！　と思ってボクは慌ててその人影に駆け寄った。……ケドそれは賢者様じゃぁなかった。ツンツンに立てた金髪に、クサリをぶらさげたり金属のトゲトゲをつけた革の衣装。パンクな火の精霊、ファイヤーエレメントさんだ。
「どうしたの？　大丈夫？」
とボクが問いかけても、ファイヤーエレメントさんは反応しない。死んではないみたいだけど、なんだかエネルギーがなくなって完全に動けないってカンジでぐったりしてる。
「どうしたぴよか？」
ようやくアーサーがぺたぺたとやってきた。それと同時に……！
「ひゃははははははは……！　おまえたちも、そこの精霊のようになるのだ！」
いきなり、天井のほうから邪悪な笑い声が響き渡った……。

＊　＊　＊

一方、キャメロット城の謁見の間でも、衛兵がいぶかしむほどの高笑いがこだましていた。インキュバス、サキュバスの報告を受けた大司教が発しているのだ。
「そうか、やはり光の剣は南の賢者のところにあったか……。ヤツを差し向けておいて正解だったな」
ひざまずく淫魔たちを見下ろし、大司教は満足げにいった。彼の背後では、魂なき城主がうつろな視線を空中になげかけている。
「しかも、アルルたちまで火山に向かっているだと？　一石二鳥とはまさにこのことだな。さしものヤツらも、我が最強の使い魔にはかなうまい。これで邪魔者も排除し、我が野望をなんの憂いもなく達成できるというワケだ」
「闇の剣はいかがなされるので……？」
顔をあげてインキュバスが問いかけた。
「なに、光の剣さえあればたやすく探せる。光の剣と闇の剣は、兄弟のように引かれあうらしいからな。剣をそろえて、あとはサタンらも始末して終わりだ！　きゃ――――っはっはっはっはっ……！」

大司教は、上体をのけぞらせ、まるで子供のような笑い声をあげた。
その拍子に、フードがほんの少しずりあがる。そこから縮れた長い金髪とともに、邪悪そうに赤く光る三つの眼がチラリと露になった……。

四 VSバンパイア！……イチかバチかの〝るいぱんこ〟！

「ひゃ――――――っはっはっはっはっはっ……！」
けたたましい、コウモリのキンキン声みたいな笑いが、真っ暗な南の賢者様の家中にこだまする。
「誰？　降りてきなさい！」
笑い声の中心、天井に向かってボクは叫んだ。よくよく見ると、確かに天井に誰かがいる。逆さまにぶらさがってるみたい。
バサァッ！
天井で、サタンがカッコつけてマントをひるがえしたときみたいな音がした。そして、羽根

を広げたコウモリみたいなものが、ボクらのほうに飛んでくる。
「よぉ〜〜こそ、南の賢者の家へ……」
コウモリみたいなヤツは、ボクらの目の前に着地していった。
「あなたが南の賢者様なの?」
そいつから出てくる邪悪な雰囲気からして、ぜぇ〜ったいに賢者様じゃないとは思ったケド、万が一と思ってたずねてみた。
「そいつは、賢者様などではないぴょ!」
「やっぱりね」
「くっくっくっくっくっ……」
アーサーとボクの会話に、そいつはイヤ〜な含み笑いをした。その口もとから、鋭いキバが見える。
そのキバに加えて、サタンみたいな高貴で冷たいカンジがするキレイな顔だちに、暗くてもハッキリわかる病気のヒトみたいな顔色。さらにコウモリの羽根みたいなマント、とくれば、相手の正体はイッパツだ!
「バンパイアね!」
ビシィッ! とボクは相手を指差した。
「そぉ〜〜のとおり」

お金持ちが貧乏なヒトをバカにするような口調で、バンパイアはいう。なんだかすっげーイヤなカンジ。
「ざぁ〜んねんながら、賢者様は御不在のようですな。キミたちも彼に面会しにいらしたのでしょう？」
「そうだけど……」
「だぁ〜がしかし、キミたちのそれは見果てぬ夢となってしまいましょう。そして、光の剣を手に入れるのは、この私です」
「まさか、大司教の差し金ぴよか？」
怒ったように手足をバタバタさせながら、アーサーがいった。
「そぉ〜のとおり！　もしや南の賢者のところにあるのではと見当をつけたのですが、どうやらそれが大当たりだったようですな。私、クジ運がいいんですよ。しぃ〜かも、そこへキミたちがやってくるとは、これまさに一石二鳥！　ひゃっはははは……！」
「そうはいかない！　ファイヤー！」
高笑いするバンパイアに向かって、ボクはいきなり呪文を唱えた。賢者様、ゴメンなさい。もしこの戦いでおウチが壊れちゃったら、ボクが責任を持ってもと通りにします……！
だけど、ボクが渾身の力を込めて打ち出した火の玉は、あっさりとバンパイアに片手で受け止められた。

シュウウウウウウ……！

その火の玉が、だんだんバンパイアの手の中に吸収されていく……！

「そぉ～んな中途半端な呪文は、私には効きません。かえって私にエネルギーをためさせるだけですよ」

「くっそぉ！　ジュゲム！」

ドゴォンッ！

呪文と同時に、バンパイアの足元がいきなり爆発した。モウモウとした煙が、ホコリと一緒になってバンパイアを包みこむ。

「やった！」

直撃の手応え！　ファイヤーより強い超攻撃呪文だから、ちょっとは効いてるはず……！

と思った瞬間……！

バサァッ！

煙の中からコウモリの羽根が出てきて、いきなりボクを抱え込んだ。

「し、しまった！」

「そぉ～んな呪文は効かないといったでしょう？　いちどいって聞かないコは、お仕置きですよ」

煙が晴れると同時にバンパイアの顔が出てきて、いった。そのまま抱えたボクに顔をぐぐっと近づけ、ボクの首筋にかみついた。

がぶっ！

「イタ――――ッ！」

キバがつきささった痛みのあまり、ボクは叫んだ。そのあいだにも、バンパイアはゴクンゴクンと喉（のど）を鳴らす。首筋から、ボクのエネルギー――血を吸っているのだ！

「あああ……！」

だんだん、ボクの意識がもうろうとしてきた。エネルギーがなくなっていく、っていうのがハッキリわかる。このままじゃ、死んじゃうよ……！

「よっこらせ！」

ぶぉん！

ボクの視線のはじっこで、アーサーが足につながれた鉄球を、バンパイアに向かって投げつけた。

「ちっ！」

ひゅっ！

バンパイアは舌打ちして、その鉄球をよける。そのおかげで、バンパイアの身体がボクから

離(はな)れた。その途端(とたん)、
「ふにゃぁ〜〜……」
ボクの身体はぐにゃぐにゃになってその場にへたりこんだ。もうダメ。立ってられない。
「アルル！　大丈夫(だいじょうぶ)ぴよか？」
「ぐー！」
「ふにゃ〜」
口々に心配してくれるアーサーとカーくんに向かって、大丈夫、っていったつもりだったケド、言葉になってない。
「ひゃぁ〜っはっはっはっはっはっ……！　ざぁ〜〜まぁありませんな。なにごとも中途半端(ちゅうとはんぱ)はよくない。どうです？　一気にエネルギーを吸われたほうがよくありませんか？」
ふにゃふにゃのボクに、高笑いとともにバンパイアがいった。た、たしかに、いっそのことラクにして、ってカンジだ。だけど、そうなったが最後、もうルシファー先生やみんなに会えなくなっちゃう……！
そんなのイヤだ！
「ファイヤー！」
ボクは気力を振(ふ)り絞(しぼ)って、呪文(じゅもん)を唱えた。
ポン！　ひゅるるるるる……！

だけどエネルギーがないから、火の玉の大きさも、スピードもへろへろだ。
「ふん！　きゅ〜しゅうする価値もありませんな」
バシッ！
バンパイアはへろへろの火の玉を、マントで弾き飛ばした。火の玉はさっきよりもスピードがついて、床に倒れてるファイヤーエレメントさんにブチ当たる！
ボォッ！
炎が、ファイヤーエレメントさんを包みこんだ。
「ああっ！」
ファイヤーエレメントさんが、死んじゃう……！
と思ったら、ファイヤーエレメントさんは炎をまとったまま、むっくりと起き上がった。
「バァ――ニ――――ング！」
元気いっぱい！　ってカンジでファイヤーエレメントさんは中指をつきたてた。もうふにゃふにゃのボクにとっては、ちょっちウラヤマシイ……。
そうか！　ファイヤーエレメントさんは火の精霊。だから、へろへろだったけどボクの火の玉を吸収して元気になったのだ！

「燃えろ――――――っ！」

グォォォォォォォォォォッ！

気合を入れると、ファイヤーエレメントさんを覆っている炎がさらに大きく広がった。そのあまりの勢いに家の中に充満してた暗闇が弾けて、もとの明るさが戻ってくる。ファイヤーエレメントさんのおかげで、もとの、ってよりはムチャクチャ明るいケド。

「うぉわっ！　まぶしっ！」

炎と太陽の光を浴びて、バンパイアが思わずひるんだ。バンパイアは太陽がニガテで、だから魔法で暗闇をつくってたのだ。

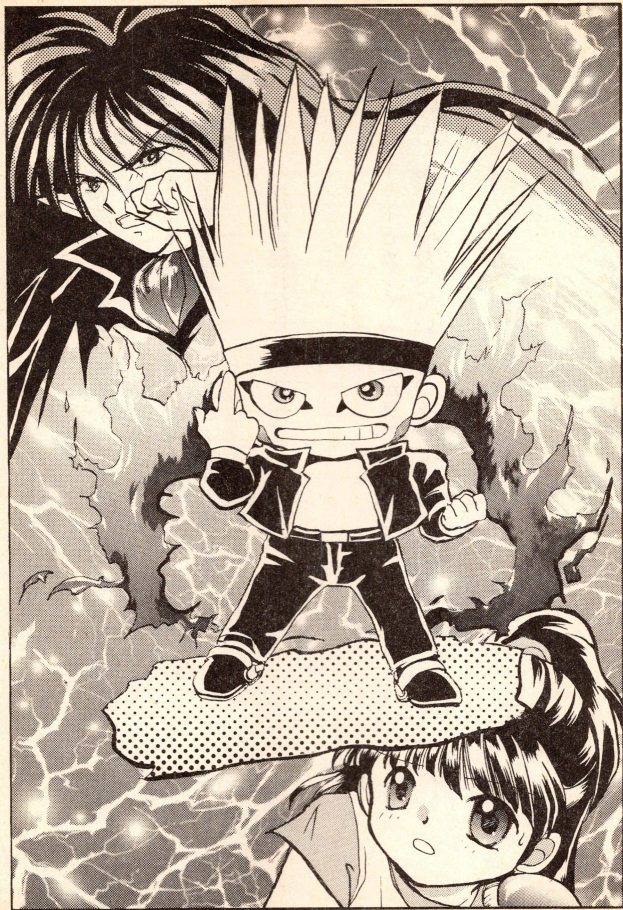
逆に、ボクは太陽の光のおかげでちょっとだけ元気になったぞ。このスキに……！

「るいぱんこ！」

イチかバチかの呪文をボクは唱えた。

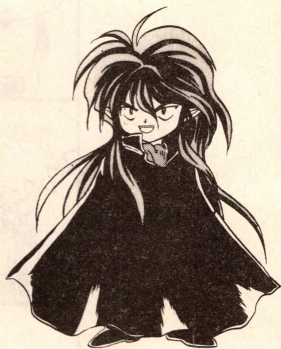
お願い！　バンパイアをなんとかして……！

というボクの必死のお願いが通じたのか、いきなり、バンパイアの後ろの空間が、おっきな口のカタチに裂けた。

「ぎゃ～～～～～～～～～っ！」

断末魔（だんまつま）の叫（さけ）びを残して、バンパイアはその口に飲み込まれてしまう。
ゴックン……！　げっぷ。
空間の口はどこにあるんだかわかんない喉（のど）をならして、げっぷをした。ちょっと、はしたないなぁ。
まぁ、とにもかくにも、バンパイアはいなくなった。
と思った途端、ボクの意識がいきなりプッツリと切れた。
ドタッ！
っていうボクの身体が倒れたらしい音と、
「アルル！」
「ぐー！」
心配そうなアーサーとカーくんの声が耳の中にこだまする。
それがだんだん小さくなっていって、そして、消えた……。

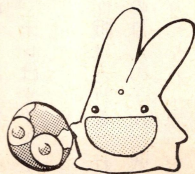
光の章

アルルちゃん

by セニョちん

ヴァンパイア

恐怖の吸血鬼！血を吸って相手のエネルギーを無くしちゃう。魔法だって吸収しちゃうぞ。でも明るいところは苦手。

南の賢者様登場！
……どっかで見たような……？

シェゾ・ウィグィィは、名もなき林の中の、直径が人の背丈ほどもある巨大な切り株の中心に座して瞑想していた。
結跏趺坐――。
あぐらのように足を組んで座り、背筋をピンと伸ばして眼を閉じる。〝日出る国〟などのある、東方の魔術で伝わっている独特の瞑想法であった。
魔の道を極めんと古今東西の魔術を知り尽くした男は、それを維持するための修行を怠らない。瞑想をすることで意識をクリアにし、いついかなる場合でも瞬時に、対面した状況に最適な魔法を、最大の魔力で大量の知識から引き出すことが可能となるのだ。
そう、魔力……。
心の中で、シェゾはつぶやいた。

魔導、魔法、妖術と呼ばれるたぐいの、あらゆる知識はもはや脳細胞のひとつひとつに収まっている。あと必要なのは、それらの術を最大限に発揮する魔力だ。

すでに自分の内で、魔の力が相当に高まっているという自覚はある。なにしろ、魔剣と呼ばれる〝闇の剣〟の邪悪な波動を克服し、手中に収めてしまったほどだ。それを上回る魔力の持ち主は、約一名を除いてほかにはいない。

アルル・ナジャ——。

それが、その約一名の名前だった。

表向きは、年齢のわりに幼い容姿をした小娘だが、その小さな身体の中に、本人すら自覚していない強大な魔力が眠っている。それを看破したのは、人間の魔導師ではシェゾ・ウィグィィただひとりであった。

そんな彼女に初めて出会ったとき、恋愛にも似た感情がシェゾの心の中に沸き上がった。

あの小娘の魔力が欲しい……！　あのとてつもない潜在能力を吸収すれば、オレはますます強くなれる……！

以来、彼はずっと——何年もの長きに亘ってアルルをつけ狙ってきたが、作戦はどれもこれも失敗に終わっていた。すべて、無意識的に発動した、アルルの超潜在能力のほんの一片に敗れてしまったのだ。そのたびにシェゾは素晴らしき膨大なパワーの魅力に取りつかれ、思いをつのらせてきている。

絶対に、あの魔力を取り込んでやる……！
その一点のみに集中し、シェゾはじっと瞑想にふけっていた。そこへ、
ガサッ。
下生えを踏む音とともに、ふと、人の気配を感じた。
「ほう……」
出し抜けに現れたその人物を見た途端、シェゾは思わず感嘆の吐息をもらす。
栗色の髪に、青で統一した半袖のシャツ、ミニスカート、ブーツ。その上にゆったりした丈の短い白いシャツをかぶり、左胸と肩を守るプロテクターをつけている。
シェゾが、その魔力を吸収せんと追い求めていた小娘が、そこに立っていた。
「珍しいな、お前から顔を見せるとは……」
いいながらシェゾは結跏趺坐の姿勢を解き、切り株のうえに立ち上がった。その拍子に、短い銀色の髪と、邪悪な己の心を映すような漆黒のマントがわずかにゆれる。
「あなたに恨みはないけど、闇の剣はいただくわよ！」
「闇の剣……？」
小娘の言葉に、シェゾは切れ味鋭くつりあがった眼をすぅっと細めた。
「面白い。この勝負にお前が勝てば、闇の剣はくれてやろう。ただし、オレが勝ったら今度こそその魔力をもらうぞ！」

ビシッ！
シェゾは闇(やみ)の剣(けん)を抜き、まさしく地獄(じごく)の闇のような刀身の先を相手に向けた。
「あ、あの〜……」
彼のその様を、小娘はポカンとした顔で見つめる。
「もしかして、ホントにわたくしのことをアルルだと思ってる……？」
「なに……？」
相手の意外な告白にシェゾは少々たじろぎ、そしてつぶさに観察を始めた。
よくよく見ると、確かにどこかがおかしい。
アルル・ナジャは、いまのように女性として魅力的な身体つきだったか……？　女として成長したのかもしれないが、一年や二年も顔をあわせていなかったわけではなく、それほど短期間に成長するとは思えない。それに服装もアンバランスで、いわゆる〝つんつるてん〟だ。
「貴様、アルル・ナジャではないな……？」
ようやくシェゾはいった。彼は、これまで魔導だけに精力を傾(かたむ)けてきたため、人間を観察して姿形を見分ける能力が若干欠けていた……。
「だぁ〜から、そういってるでしょうが！」
バサァッ！

相手はいいながら、引き破るように衣服を脱ぎ捨てた。その瞬間に、別の服装に入れ代わる。見事なプロポーションを、悩ましげに見せつける水色のドレス。腰まで伸びた水晶色の豪奢な長髪……。

「確か、ルルーとかいったな」

シェゾは、正体を現した相手の名をいった。

「あら、覚えててくれたのね。それはどうも」

頬に書いたうずまきを、ハンカチで消しながらルルーが答える。それとほぼ同時に、牛頭人身の巨漢が木の陰から姿を現した。ミノタウロスとかいう下僕だったな、とシェゾは記憶をまさぐった。

「それにしても、あなたってホントにおつむが三流なのね。そりゃアルルに何度も負けるワケよね。お————っほほほほほほほ……！」

高飛車に笑うルルーを、シェゾは冷ややかに見下ろす。

「三流かどうか、試してみるか……？」

チャキッ！

彼は闇の剣を構えた……。

＊　＊　＊

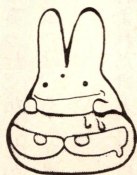
『おーい。アルルくん、朝だぞ。起きなさい』
耳の奥で、ルシファー先生の声がする。いつもの朝がやってきたのだ。
だけど、力が出なくてふにゃふにゃで、とっても眠い。
「あと五分だけぇ……」
ボクは眼をつぶったままでいった。
『やれやれ、しょうがないな……。カーバンクルくんに、朝御飯を全部食べられてもいいのか？』
「ええっ！　それはヤダぁ！」
先生のいつもの言葉にダマされて、いつものようにボクはがばっと跳ね起きた。
「あり……？」
だけど、目の前に広がっている光景は、いつものとは違っていた。
なんで、ボクはこんなトコに寝てるんだ？
ボクが寝てたベッドは、質素で飾りっ気のない、だけどふかふかで真っ白なシーツがかかっている。

もちろん、ボクの部屋じゃぁない。ちっちゃな衣装だんすや本棚くらいしか調度品のない、これまた質素でセマイ部屋だ。
そして、ベッドをとりかこむようにボクを見つめている、アーサーとファイヤーエレメントさんと、謎のおじいさん。たぶん、このおじいさんが南の賢者様なんだね。
カーくんはボクが寝ていたマクラの脇で、気持ちよさそうに眠ってる。
ボクはそこで、ようやくコトの次第を思い出した。
南の賢者様のおウチに着いて、そこで待ってたバンパイアと戦って、そんで……、そうそう、バンパイアにエネルギーを吸われちゃったんだ。でもなんとか〝るいぱんこ〟の呪文でバンパイアに勝って、その瞬間にキンチョーの糸がプッツリ切れちゃってボクは気絶したのだ。
ボクがいま寝てるベッドは、たぶん賢者様のものだろうね。
「アルル、大丈夫ぴよ?」
「う、うん……」
心配そうなアーサーの言葉に、ボクはうわのそらで返事した。
あれぇ〜? おかしいなぁ……? 確かに、ルシファー先生に起こされたような気がするんだケド……。だけどもちろん、そこに先生の姿はない。
「どうしたぴよ?」
「ねぇねぇ、ここにルシファー先生が来なかった?」

「ルシファー先生？　それは誰ぴよ？」
ボクの問いに、アーサーは首をかしげるばかり。ファイヤーエレメントさんとかもキョトンとした顔をしてる。
そりゃそうだよね。いきなりルシファー先生とかいったって、会ったコトもない——と思う——のにわかるワケないもんね。
ってコトは、先生に起こされたと思ったのは夢だったのかぁ……。すっごくリアルで、ホントに先生がいまココにいるみたいにあったかな感じがしたんだケド……。
まぁ、ルシファー先生はきっと忙しくて、ボクなんかかまってるヒマなんてないだろうから、こんなとこに来るわけないってわかってるんだケド、ちょっちカナシイな……。
「どうしたぴよ？　まだ具合悪いぴよか？」
ボクを覗きこむアーサーの眼は、とっても心配そうだ。ホンキでボクのことを考えてるってカンジ。
「大丈夫だよ、心配しないで」
とボクがニッコリすると、アーサーのちっちゃな黒目はホッとしたような色に変わった。
「いやぁ、一時はどうなるコトかと思ったぜェ」
ファイヤーエレメントさんも、安心したようにうなずく。バンパイアとの戦いのときに、間違って当たったファイヤーのおかげで、いまではボクより元気いっぱいだ。

「おまえが倒れた途端に、賢者様がナイスタイミングで帰ってきたおかげだナ」
「賢者様がアルルを介抱してくれたんだぴよ」
「そうなんですか？　ありがとうございます、賢者様」
『なに、礼には及ばんよ。ふぉっふぉっふぉっふぉっ……！』
ボクがペコリとおじぎをすると、おじいさんらしいかすれた声で賢者様は笑った。なんだか、ルシファー先生によく似たあったかな声だ。雰囲気もソックリだし。だからボクは、あんな夢を見たのかな……？
よく見たら、服装も似てる。もちろん、賢者様はもうお腰が曲がってよれよれだけど、身にまとってるローブは先生とおなじ黒だ。まぁ、そんなローブはどこにでもありそうだけどね。先生と同じく深く降ろしたフードからは、おヒゲと髪の毛が合体したような、白くて長い毛がはみ出してる。そのおかげで、ほとんど顔が見えない。ぱっと見が、ローブをまとった毛のオバケみたいだ。
ルシファー先生が、う～んとトシを取ったらこうなるのかなぁ……？
なんだか初めて会ったような気がしないのが不思議。
『ま、とにかく元気になってよかったのぅ』
ボクの頭の中が考えでぐるぐるしてるところに、賢者様はいった。
『ではまぁ、テーブルで茶でも飲もうかの。年寄りに立ちん坊はチトつらいて』

「あ、ごめんなさい」
ボクは慌ててベッドから降りた。そして、まだ眠ってるカーくんをそっと抱き上げる。
「じゃあ、行きましょう、ルシファー先生」
『そうだな』
え……？
あんまりにも雰囲気が似てるもんで、ボクは賢者様のコトをルシファー先生って思わず呼んじゃった。
だけど、それに即座に反応した賢者様っていったい……？

二 知って驚く意外なジジツ！
……ど、どうして先生が……？

『し、しまった……！』
賢者様は、思わずあとじさった。驚きのあまり、よぼよぼで曲がってた腰が、若い男のヒト

みたいにピンと伸(の)びちゃってる。声もかすれてなくって若々しい。
「も、もしかして、ホントにルシファー先生なの……？」
ボクも驚いてるケド、なんとかそう尋(たず)ねた。
『いやぁ〜はははは……。なぁんのことかな……？』
「やっぱりルシファー先生なんだね？」
『私としたことが、うかつだったな……』
カンネンしたように先生は頭を振(ふ)り、おじいさんのつけヒゲを外した。そこから出てきたのは、まごうことなきルシファー先生の顔——の下半分。もちろん、いつもの優しいニコニコ笑顔が張りついてる。
なんだかモノスゴク懐(なつ)かしくて、ずっとずっと会いたいと思ってた笑顔だ。だけど、それだけに賢者様のカッコで出てきたってコトに対して、ちょっとムッときちゃう。
「こ、これはどういうコトぴよ？」
ああっ！　アーサーにセリフを取られた！　どういうことなの？　ってボクが問い詰(つ)めようと思ってたのにぃ！
「先生、どうして賢者様の変装なんかしてたんですか？」
アーサーの言葉を引き継(つ)いでボクはいった。
『アルルくん、これは変装ではないのだよ』

「え────────────────っ！」

『私は確かに、南の賢者なのだ。もちろん、キミの師匠のルシファーであると同時にな』

「というと？」

ボクとアーサーは、同時に驚いた。

久々の大ショ────ック！ってカンジだ。

「どどど、どういうコトぉ？」

『アルルくんもアーサーどのも知ってると思うが、南の賢者は、数百年前からこの地に住んでいる』

確かにそうだ！ 魔導学校にいた頃、歴史の授業で習った。考えてみれば、数百年前に魔導を確立したのが南の賢者様だったたんだよね。

「じゃ、じゃあ、その頃からずっと、先生は南の賢者様をやってたんですか？」

ボクの問いに、先生は首を横に振った。

『正確にはそうではない。実は数百年前、私は先代の賢者に弟子入りしていたのだ』

「え──っ！」

さっきほどじゃないケド、またまたショック！

先生にもお師匠サマがいたなんて……！ ボクはてっきり、自分の力でいまみたいになった

のかと思ってた。
　そんなボクの驚きをよそに、先生は話を続ける。アーサーはもう、ポカンとして声も出ない。逆にファイヤーエレメントさんは、すべてを知ってるみたいで、派手な格好だけど静かにたたずんでる。
『私は魔族だが、先代賢者はあくまでも人間。よる年並みには勝てない。先代は、私とともに魔導を確立し、そのすぐ後に亡くなられたのだ』
　珍しく、先生の声がちょっと悲しみに沈んでいる。お師匠サマといえば、ほとんどお父さんも同然だ。そのヒトが死んじゃったときのコトを思い出すと、誰だって悲しくなるよ。ボクだったら、ルシファー先生が死んだらって考えただけで泣いちゃいそう。目の前にいるっていうのに。
『そして私は、先代の遺言に従い、二代目を襲名して、魔導の術の管理にあたることになったのだ』
「でもでも、そんなコト教科書に載ってませんでしたよ?」
『それはそうだ。真実を知っているのは、私と、このファイヤーエレメントだけだからな』
「どうして、隠したりしたんですか?」
『それは、魔導を悪用する者ができるだけ現れないようにするためだ。何百年もずっと賢者が目を光らせているとなれば、そうそう悪用もできないだろう? しかし、それでもこんな状態

になってしまったがな……』

先生の言葉はもはや、ほとんど独り言に近かった。ボクには、こんな状態っていうのが大司教の事件を指してるということがわかった。ダテにずっと先生にくっついてないのだ。

『少々、お遊びがすぎたのかもしれんな……』

「へ？　それって……」

どういうコト？　っていう前に、先生が続けた。

『ルシファーとしてキミの前に現れずに、ずっと南の賢者として術法の管理をしていれば、これまでのような事件は発生しなかったはずだ』

先生は、ぷよぷよ大魔王、ぷよぷよ大明神、そして今回のぷよぷよ大司教の事件、そして、その前からあった現界と魔界をつなぐ空間の歪み、それらすべての原因が、いまいったことにあるのだと説明した。

『しかし私は、キミの存在、キミのたぐいまれな潜在能力を知って、いてもたってもいられなくなってしまったのだ。ある種、サタンと同じようにな……』

「それってもしかして……」

ルシファー先生もボクのコトが……。

だけどそれは、声になって出てこなかった。代わりに聞いた。

「でも、どうしてですか？」

パサッ。

ボクの問いには答えずに、先生はフードを取った。サタンにウリふたつの、キレイな顔があらわになる。

これでルシファー先生の素顔を見るのは二回目だけど、そのときとは違って、すっごくマジメな表情だ。そんな先生なんて見たことないからちょっとコワイけど、優しい雰囲気はなくなってはいない。

『事実をありのままに話そう……』

ため息のように、先生はいった。

『私がキミの潜在能力に眼をつけたのは、私の後継として最適だと思ったからだ。つまり、魔導の知識をすべて受け継ぎ、ゆくゆくは三代目の賢者を襲名させようとな。もしくは、時の女神の後継か……』

「時の女神……?」

現界と魔界とのあいだにある〝時空の狭間〟に住み、時の流れや人々の運命を司っている女神様だ。ちなみにぷよぷよを消す――ホントは、そのためだけにあるんじゃないんだケド――オワニモの呪文は、その時の女神様の力を借りて発動させるのだ。

ボクが、その女神様の跡継ぎに……?　なんだか途方もなくて、ちょっとピンと来ない。

「先生は、女神様を知ってるんですか?」

『うむ……。アルルくん、キミは女神の幼少の頃によく似ているのだ。能力も、性格もな。私は、そんなキミが大好きだ。その感情が、弟子を愛でる師匠のものだということは十分に理解できるが、その裏にあるのが、本物の恋愛感情なのかはわからない。その昔にあった、角を失うことになった事件がトラウマになって、自分の恋愛感情について考えることを無意識的に拒否してしまっているのだ』

「その事件って、詳しく聞いてもいいですか？」

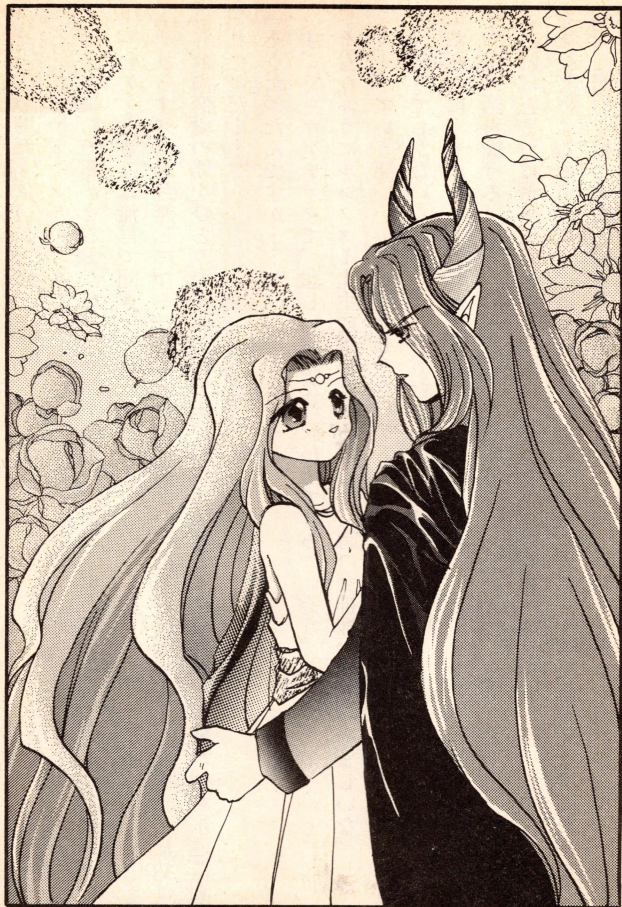
ボクがそう尋ねると、先生はニッコリ微笑んで、くしゃくしゃっと、だけど優しくボクの頭をなでた。

『そんな、辛そうな顔をするな。私が好きなアルルくんは、いつも元気いっぱいの娘のはずだぞ』

なんだか、すっごく元気が出てきたぞ。ボクは微笑みを返して、先生が話しはじめるのを待った。

『かつて、私は魔族の身でありながら、ある神に恋をした……』

「それが、いまの時の女神様……？」

『そう。彼女も私のことを想ってくれていたが、それは決して許される恋ではなかった。神と魔族の恋愛は、必ず災厄を産むのだ。それは、何千年、何万年と続く魔界の歴史が物語っている。その当時すでに、彼女は時の女神を継承することが決定していた。一方の私も、兄サタン

とともに次期魔界の王の座をうかがう立場にあった……』
「………」
物語を読んで聞かせるようなルシファー先生の口調に、ボク――そしてアーサーやファイヤーエレメントさんは無言で聞き入った。
『それらすべてが台無しになること、とりわけ彼女が女神の継承権を失うことを恐れた私は、許されぬ恋愛の罪をひとりでかぶった。その結果、角とともに魔界の王の継承権を永遠に剝奪されたのだ……』
「そうだったんですか……」
すごくロマンチックで、悲しいお話だ。涙が出てきちゃいそう。
そんなふうにルシファー先生に想われてるなんて、時の女神様ってうらやましいな。しょせん――っていう悪いいい方は好きじゃないケド――、ルシファー先生にとって、ボクは女神様の代わりでしかないいんだ。ちょっと、むなしい……。
『ちなみに、サタンのことだが……』
先生は話を続ける。
『あれほどまでにキミに固執する理由は、やはりキミの魔力が欲しいからだ。私のようにキミを後継者にするのではなく、いずれ魔界の王となったときに、その後継を産ませるためにな。強大な魔力を持つ人間と魔族とのあいだにできた子は、両親を陵駕するパワーを持つといわれ

ているのだ』
やっぱりね、ってカンジだ。
先生も、サタンも、シェゾも、みぃんなホントにあるんだかわかんないボクの魔力が欲しいのであって、ボク自身のコトが好きなワケじゃぁないんだ。
そりゃぁ、ボクはルルーみたいにキレイでスタイルがいいワケじゃないから、モテないだろうな、っていうのは自覚してる。だけど、やっぱり、好きになるんならボク自身のコトを想って欲しいよ……。マサムネさんみたいに。
という考えを頭の中でぐるぐるさせてると、いきなり先生がいった。
『この事件が解決したら、私とサタン、シュテルンはしばらく魔界に帰る』
「ええっ！　ど、どうして？」
『事態を根本から解決するためだ』
「それは、大司教を倒せばいいんじゃないんですか？」
そのためにボクとアーサーは、光の剣を受け取りに、この賢者様の家に来たのだ。
『確かに大司教を倒せば、その場は収まる。しかしそのままにしておけば、また新たな事件が発生するだろう。空間の歪みは、そこまでひどくなっているのだ。そして、次になにかあったら、歪みが完全に崩壊を起こし、現界も魔界も消滅するかもしれない……。それを回避するためには、空間を安定させる必要がある。つまり、現界は現界のままに、魔界は魔界のままにし、

しばらく互いに干渉しないようにするのだ』
「しばらくって、どれくらい？」
『さぁ……。十年か、百年か、あるいはもっとかかるか……』
「そんなに待てないよ！」
　ボクは、なんだか押さえきれなくなって叫んだ。
「先生、ボクを跡継ぎにするんでしょ？　だったら、それまで魔界に帰らないでよ！」
『そうしたいのは山々だが、この世が消滅してしまっては、跡継ぎどころの騒ぎではないだろう？』
「そ、それは、そうだけど……」
『それに、完全な今生の別れになるわけではないんだ。もしかすると数年で、あるいは数日で空間が安定するかもしれん』
「イヤだ！　そんなの！　大好きな先生と一緒にいられないなんてイヤだよ！　さみしくて死んじゃうよ！　だからお願い！　ちゃんとマジメに修行もします！　だから、魔界に帰るなんていわないで！」
　心のままに、ボクはまくしたてた。
　この気持ちが、恋だとか愛だとか、そういうものなのかっていうコトは、まだボクにはわからない。だけど、さみしい思いでずっといるのはイヤ！　ルシファー先生とずっと一緒に魔法

の修行してたいよ！　サタンやシュテルン博士とだって……！
『アルルくん……』
　ルシファー先生は、またボクの頭をなでた。
『キミの気持ちはよくわかる。それに、私のことをそこまで想ってくれることを嬉しく思う。しかしその気持ちは、もっと人生経験を積んで、真に心から想える人が現れるまで取っておきなさい。私には、キミに想われる資格はないよ』
「………」
『しかしアルルくん、ひとつだけ重大なことを忘れているぞ』
　急に、先生の口調がちょっとおどけたカンジになった。
『とにもかくにも、大司教をなんとかしなければ、私は魔界に帰れん。それまでは、イヤでもキミと行動を共にさせてもらうぞ』
「先生……」
　ルシファー先生は、いつものように、優しくてちょっとイタズラっぽいニコニコ顔をボクに向けていた……。

＊　　＊　　＊

林の中での戦いは、いまや最高潮に達していた。優劣がはっきりし始める頃合である。
「闇の剣よ、切り裂け！」
グォッ！
呪文とともにシェゾが剣をひと振りすると、剣先の描く軌跡が邪悪な波動を含んだ黒いカマイタチとなってルルーに襲いかかる！
「きゃぁっ！」
すでに満身創痍のルルーは、その刃を完全に避けきることができず、また新たな切り傷をこしらえた。すでにミノタウロスも傷だらけだ。一方のシェゾは呼吸ひとつ乱れておらず、薄笑いを彼女らに向けている。
「つ、強い……」
ルルーは思わずつぶやいた。
闇の剣の力もさることながら、それを使いこなすシェゾのテクニックに、有効打どころかパンチひとつかすらせることができないのだ。
「勝負は明白だ。殺される前に失せろ」
チャキッ！
闇の剣を鞘に収めながら、シェゾはいい放った。
「どうして？　あたくしはまだ負けてないわよ！　それに、あなたが勝ったらわたくしの魔力

を吸収するんじゃなかったの？」
「オレは魔導師にしか興味がない。貴様のような格闘家のパワーを吸収しても、なんの足しにもならん」
プッツ――――――――ンッ！
シェゾの言葉を聞いた瞬間、ルルーの中でなにかが弾けた。
このシェゾってヤツも、サタン様も、どうして魔導師――アルルがそんなにいいわけ？　魔力も格闘の気力も、根本は同じはずなのよ！　あのアルルにどれだけパワーがあるか知らないけど、あたくしだって力はあるはずなのよ！
「いやぁ～～～～っ……！」
気合いの声とともに、怒りを気力に変え、それをそのまま、目の前の敵に思いっきりぶつける！
「女王乱舞！」
ズドドドドドドドドドドドドド……！
猛烈なパンチキックの嵐を、力の限りシェゾに見舞った。
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

あまりの勢いに彼は避けきれず、一瞬にしてボロボロになる。
「はぁっ！」
ドゴン！
フィニッシュに、ルルーはシェゾの身体を思いきり蹴りあげた。
「ミノタウロス！」
「ぶもー！」
ルルーに命じられるまま、ミノタウロスは宙を舞うシェゾにタックル！
ドッゴォ――――ンッ！
更にスピードを上げて魔導師の身体はキリキリ舞いし、木に激突！　そのまま、その木にもたれかかるように彼はくずおれた。
「ふん！　わたくしをバカにするからよ！　約束通り、闇の剣はもらっていきますからね」
いいながら、剣が収まった鞘をシェゾの身体から引きはがした。
「や、めろ……。そ、その剣は、貴様などに扱える、代物ではない……！」
まだ気を失っていないシェゾが、息も絶え絶えにいった。
「なにいってるの。あなたに扱えて、わたくしにできないはずないわ」
スラリ！
思わずルルーは剣を抜いた。その瞬間！

ドォンッ！

漆黒の刀身から発するパワーが、いきなりルルーの精神に襲いかかった。それは、怒りや憎しみといった、邪悪な波動だった。

ルルーの意識はあっという間にその波動に飲み込まれ、同時に形相が凶悪さを帯びはじめる。

サタンを取ったアルルが憎い……！　振り向いてくれないサタンが憎い……！　ルシファーも、シェテルンも……！　なにもかも破壊しなければ、心は安らがない……！　剣が血を吸わなければ、心の渇きは癒されない……！

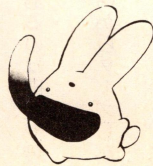
「ぶもー！」

主人に異変を感じ取ったミノタウロスが、傷だらけの身体をひきずってルルーの手から剣を放そうとするが、闇の剣の導く圧倒的な剣力によって叩きふせられてしまった。

「ぶもぉ〜〜っ……！」

倒れるミノタウロスの悲痛な声も、もはやルルーの耳には届いていない。あるのは破壊や殺人の衝動だけだ。

ルルーはやがて、剣を高く掲げ、刀身から発した黒い光に包まれて、その場からワープした……。

三　キャメロット城は大騒ぎ！
……コレ、どうやって収拾するのぉ？

火山の小屋に隠しておいた光の剣を取り出し、ボクとカーくん、アーサー、ルシファー先生は、キャメロット城まで一気にワープした。ファイヤーエレメントはお留守番。
出発するまでのあいだ、アーサーの様子がヘン――先生にはそっけなくて、ボクにはとことん優しい――だったのがちょっち気になったけど、お城のアリサマを見た瞬間に、そんなのはイッペンに吹き飛んだ。
なんと！　お城の真ん中で、ちょっとした山よりもおっきな怪獣が暴れているのだ！
サーベルタイガーと、ライオンと、クマと、ドラゴンを合わせて、とてつもなくおっきくしたような怪獣だ。
「キシャ――――ッ！」
怪獣はひとしきり吼えて、どんどんお城を崩していく。

「いったい、なにごとだぴよ？」

驚きで声が出ないのを、ムリヤリしぼりだすようにアーサーがいった。ボクも、まったく同感だ。

『あれは、シュテルンだ』

「え――――――――っ！」

ルシファー先生の言葉に、ボクはまたまた飛び上がって驚いた。

先生の説明によると、あれはシュテルン博士の本当の姿で、魔界では動物や精霊を治める、とってもエライひとなんだって。

そうか、わかったぞ！　だからずっと前に〝るいぱんこ〟で呼び出した炎の精霊さんが、博士に向かってぺこぺこしてたし、ケーニヒス・ティーゲル・フォン・シュテルン……だっけ？　そんなタイソウな名前があるんだ。

『おー―い！　シュテルン！　なにをやってるんだ！　いますぐやめろ！』

「おう！　ルシファーか！　遅かったな！　アルルくんも一緒か！」

先生の怒鳴り声に気がついて返事した怪獣の声は、サイズにあわせてとっても大きいケド、確かにシュテルン博士のものだ。

『私は城を壊せと伝言した覚えはないぞ！』

「え？　そうなのか？　サタンのヤツは城ごと大司教をブチ倒そうといってたぞ！」
『事件の責は大司教だけにある！　城の人間に罪はない！』
「そうだよ！　このお城は、ホントはアーサーのものなんだよ！」
　ボクも博士に向かって怒鳴った。
『サタンはどこだ！』
「大司教のところ、たぶん謁見の間だ！　マサムネどのもいるはずだ！」
「え？　マサムネさんも来てるの？」
　ボクらはさっそく、お城の中に駆け込んだ。
「な、なんということぴよ……」
　中の惨状に、思わずアーサーがつぶやく。
　そこはまさに地獄だ。大理石や豪華そうな石で造られた天井や壁や柱はコナゴナになってて、高そうなビロードの絨毯やそのほかの調度品も、もはや原形をとどめてない。
　そして、そんなガレキの山のあちこちに、騎士さんたちが倒れてる。サタンやマサムネさんにやられちゃったんだ。パッと見たところでは、みんな死んではいないみたいだケド……。
「ああっ、もうこの城はおしまいだぴよ……」
「アーサー！　いまは落ち込んでるバアイじゃないでしょ！　大司教をなんとかしなきゃ！」
「そ、そうだぴよ」

その場にへたり込みそうになるアーサーをうながして、ボクらはさらに奥へと進んだ。
やがて、すっかり青天井になった謁見の間に到着。
そこでは、サタンとマサムネさんが、玉座のある舞台に立っている大司教と睨みあっていた。
大司教の後ろには玉座があって、そこにカッコイイ男のヒトが座ってる。あれが、アーサーの身代わりの人形だ。
そして、サタンたちの足元では、デーモンサーバントとインキュバス、サキュバス、バンパイアがばたんきゅ〜してる。大司教の命令でサタンたちにかかっていったんだけど、あっさり倒されちゃったみたいだ。
「サタン！　マサムネさん！」
ふたりの名前を呼びながら、ボクは駆け寄った。
『おう、アルルか！』
「アルルどの、無事だったでござるか」
『サタン、これはどういうことだ？』
ルシファー先生がいった。
『私は、大司教のみを押さえろと伝言したはずだぞ』
『うるさい！　オレに指図をするな！　それに、貴様こそなんだ！　敗北宣言をしたくせに、なぜアルルと一緒にいる！』

『敗北宣言？』
『アルルをオレに任すといったろうが！』
『あれは、私にアルルくんを救出するヒマがなかったから、お前に伝言したまで。そのあと、その余裕ができたので、今度はおまえに大司教のほうを頼んだのだ』
『きっさまぁ〜、オレをハメやがったな！』
『そう思うのはお前の勝手だが、それは被害妄想というやつだぞ。それに、私より先にアルルくんを救出できなかったお前が悪い』
『こぉのぉ〜〜っ！　いわせておけば……！』
「ちょっとちょっと、ふたりとも！　兄弟ゲンカなんかしてるバアイじゃないでしょ！」
ボクはサタンとルシファーのあいだに割ってはいった。
「大司教をなんとかするのが先！」
『そ、そうだったな……』
ようやく、ボク、カーバンクル、アーサー、ルシファー先生、サタン、マサムネさん、そして怪獣のシュテルン博士が一斉に大司教に注目した。
そこへいきなり、アーサーがぺたぺたと前に出た。そして、サイズのあわない光の剣をよっこらしょと抜き、両手で持って先っちょを大司教に向ける。
「大司教！　お前の陰謀はもう暴いたぴよ！　観念するぴよ！」

おおっ！　なんだか勇ましいぞ。飛べない鳥の格好じゃなきゃ、もっとりりしいんだケドね……。

「冗談じゃない！　誰が観念するものか！」

ちょっとダダッ子みたいなカンジで、大司教が吼えた。

『大司教……』

その大司教に向かって、ルシファーは穏やかにいった。

『いや、デビルくん……。キミのやっていることは、この世の空間すべての崩壊を早めているのだぞ』

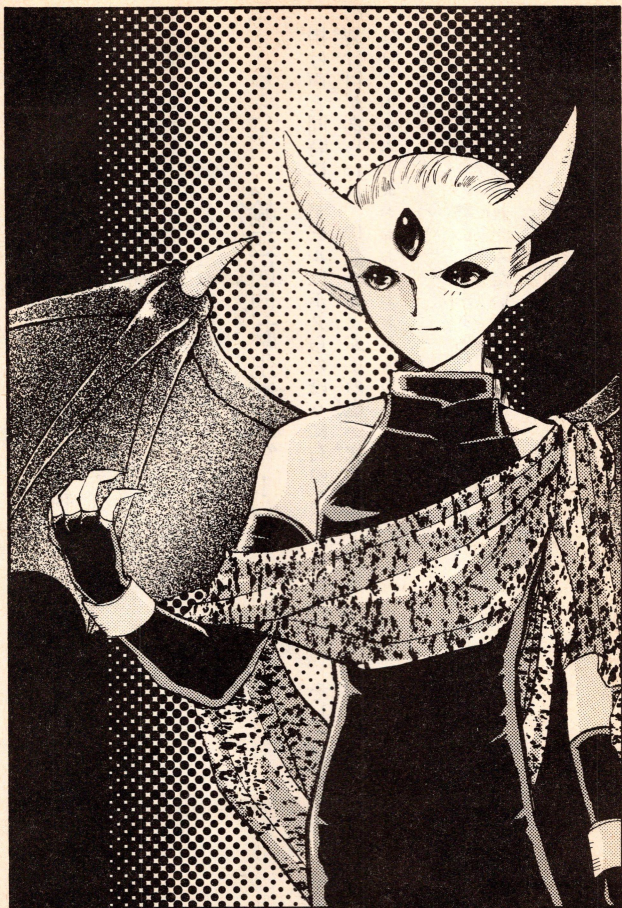
「デビル、くん……？」

ボクとアーサーは、意外な名前をいった先生と、その相手の大司教を交互にみつめた。サタンやシュテルン博士、マサムネさんは、もう知ってるって顔をしてる。

デビル、っていえば、サタンみたいな貴族じゃないケド、魔界でワリと位の高い悪魔だ。大司教が、そのデビルってワケ……？

「ちっ、なんだバレてるのか……」

舌打ちしながら、大司教はローブを取った。そこから出てきた顔は、ちょっとウェーブのかかったキラキラする長髪に、サタンほどじゃないケド太くてリッパな二本のツノ、そしてなによりも異様なのは、赤く光る両眼の真ん中の、もうひとつの眼。確かに、悪魔らしい邪悪さを

持った三つ眼だ。
「確かに、オレはデビルさ。サタン、ルシファー、シュテルン、あんたらなんかよりちっぽけな魔界の住人だ。だけどオレはある日、〝力〟を手に入れたのだ！　あんたらなんかに負けない、この世を支配するにふさわしい力をな！」
きゃ――――っはっはっはっはっは……！
と、デビルは子供みたいなカン高い声で笑った。
『その力が、この世の空間すべてを歪ませているのがわからないのか？　最後には空間が消滅してしまうのだぞ』
「ふん！　この期におよんで見え透いたウソをつくな！」
『ウソではない。だいたい、なんの代償もなく、そんな力が手に入るわけないだろう。だからその力は、厄災や破滅といった、〝悪い〟性質のものなのだ』
「哲学的な話だが、〝良い〟ことというものは、来そうでなかなか来ないものだ。逆に〝悪い〟ことは、ふってわいたようにやってくるのだ」
はるか頭のうえで、怪獣のシュテルン博士が解説する。
「博士ぇ！　人間の姿にもどったらぁ？」
ボクはうえを向いていった。

「ハナシにくくてしょうがないよ！」
「しかし、この姿になると、しばらく人間にはなれんのだ。大量のエネルギーを使うんでな」
「ええ――――い！　うるさいうるさいうるさぁ――いっ！」
いきなり、デビルが声を張り上げた。
「お前たちの戯言（ざれごと）なんか信じるもんか！　オレの力を見せてやる！」
そういって、呪文（じゅもん）を唱えるみたいに指で印を結ぶ。
「くらえ！　〝輪廻崩壊蘇生地獄（りんねほうかいそせいじごく）〟！」
掛（か）け声と同時に、デビルはボクらのほうに右のてのひらを向けた。そして、その辺りに空間の裂（さ）け目があらわれ、無数のぷよぷよの嵐（あらし）が吹（ふ）き出す！
ひゅごぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！
「わぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
ぷよ嵐のあまりの勢いに、ボクらはおもわずひるんだ。おっきな石や、魔法のエネルギー球を思いきりぶつけられたみたいで、すんごくイタイ！
「そして！　〝赤光潰斬波雷精地獄（しゃっこうかいざんはらいせいじごく）〟！」
ひとしきりぷよ嵐が吹き荒（あ）れたところへ、間髪（かんはつ）を容（い）れずにまたぷよ嵐！

ゴォォォォォォォォォォォォッ！

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

って、ちょっと待って。

「名前が違うだけで、おんなじ攻撃じゃない！」

嵐がやんだところで、ボクはいった。

「甘いな。ぷよの数が違うのだ」

「いくつ？」

「一個」

「こぉ～んないっぱいあるのに、そんだけじゃわかるわけないでしょ！」

いまや、床――っていうかガレキ地帯に、いっぱいのぷよぷよたちがいる。

あり……？　よく見ると、このぷよぷよたちの色はいつもと違う。青とか赤とかじゃなくって、みんな透明感のある黒だ。

ってことはつまり、アレが使えるってコト。

「ルシファー先生！　オワニモ使っていい？」

とっさに、ボクは聞いた。

オワニモは、ぷよぷよを時空の狭間に送り込む呪文。空間の歪みはオワニモの使いすぎも原因だから、事件が終わったら封印するって先生がいってた。

『この黒ぷよは、時空の狭間に送り込まれて色を失った、憐れなぷよぷよだ。即座に送り返してやるのが情けというものだろう』

使っていい、ってコトだ。

「よぉ〜し……！」

ボクは右腕をぶんぶん回して気合いをためた。そのとき……！

「ハァッ！」

掛け声とともに、モノスゴイ殺気がボクの背中に走った……！

四　女神様まで出てきたぞ！

……ルルーは闇の剣にとりつかれてるし……

「あぶないっ！」

ドン！

「わぁっ！」

悲鳴に近い声に背中を押されて、ボクは前につんのめった。転ばないようにこらえながら見たものは、刃の黒い剣を持ったルルーに切りつけられる、マサムネさんの姿！

ビシュッ！

「ぬぅっ……！」

左肩あたりから血がほとばしる！　マサムネさんは苦痛のうめきをあげ、思わず刀を落としてしまった。

「マサムネさん！」

「大丈夫、かすりキズでござる」

「ちょっとルルー！　マサムネさんになんてことすんのよ！」

ボクは怒りをルルーにぶつけた。

「殺す……！」

「へ？」

「サタン様を取った憎い娘、アルルを殺す……！　サタン様も、ルシファー先生も、シュテルン博士も、みんなみんな殺す……！」

ルルーの眼は、完全にイッちゃっていた。もうパーフェクトにプッツンしてる。いったい、ルルーになにが起きたの……？

「きゃはははは！　どうやらその娘は、闇の剣の黒い波動に飲み込まれたようだな。これはおもしろいことになってきたぞ」
　ボクらを見下ろすデビルが、また高笑いした。
「娘！　そいつらを血祭りにあげろ！」
「がぁぁぁぁぁぁっ！」
　ルルーは、まるで猛獣みたいな叫びをあげて、闇の剣を大きく振りかぶった。
「そうはさせないぴよ！」
　いうが早いか、光の剣をなんとか構えてアーサーがぺたぺたとルルーにいどみかかる。
　だけど、
「邪魔よっ！」
　どかっ！
　アーサーはルルーに思いきり蹴飛ばされた。
「うぁっ！」
「アーサー！」
　ポォンとマリみたいにアーサーの身体は飛び跳ね、その手から落ちた光の剣がカラカラとボクの前に転がってくる。
　ほんの一瞬のあいだ、ボクは、ほのかに光を放つその剣を見下ろした。闇の剣に対応する光

の剣なら、ルルーの眼を覚まさせることができるかも……！
「殺す……！」
ルルーがまた、ボクに襲いかかってくる！　ボクはとっさに光の剣を拾い、その一撃を受け止めた。
カシィンッ！
白い刃と黒い刃が乾いた音を立ててぶつかった瞬間……！
グォォォォォォォォォォッ！
ものスゴイ力の波動が、ボクとルルーを包みこむ。その波動はやがてまばゆい光になって、ボクとルルーを跳ね飛ばした！
ドォン！
「うわっ！」
「きゃぁっ！」
跳ね飛ばされた勢いから身体を立て直すあいだに光は薄れ、そこからひとりの女のヒトが現れた。
クリーム色の薄くゆるやかなシルクのドレスを着て、手には先端に三日月をあしらった長い杖、足元まで届きそうな長いルビー色の髪の下には、ルルーもかなわないほど神々しいキレイ

な顔がある。
肖像画を見たことあるぞ。時の女神様だ！
「大変な事態になってしまいましたね……」
鈴のような、心にひびく声で女神様はいった。
「さすがのわたくしも、こうなるとは予測できませんでしたわ……」
『面目ない』
「ルシファー様が謝ることはありませんわ……。これは、様々な要因が複雑にからみあって、起きた事件なのですから……」
そして女神様は、玉座のほうを見上げた。
「デビルさん、どのようにして得られたかはわかりませんが、いまの力はあなたには過ぎたものです……。残念ですが、わたくしが消去させていただきます……」
「冗談じゃない！　オレはこの力で世界を支配するんだ！」
デビルの言葉は、もはや完全にダダッ子だ。
「なりません……！」
女神様が一喝した。
「世を消滅させるような行動は、わたくしが許しませんよ……！」
「ううっ……」

女神様の静かな迫力に、まるでお母さんに怒られたみたいにデビルは縮こまる。
「オレだって、力が欲しいんだ……。そしてサタンやシュテルンみたいに、魔界で認められるような大物になりたかったんだ……！」
「だったら、そうなるように努力しなきゃ！」
ボクはいった。
「サタンだってシュテルン博士だって、ルシファー先生だって、最初からそんなに力があったワケじゃないと思うよ。ずっと努力してきただろうし、いまでも力を維持するために努力してるんだよ。それは人間でも同じで、ボクはいま一流の魔導師になるために一生懸命だし、ここにいるルルーやマサムネさんだって、血のにじむ思いをして、誰にも負けない格闘技や剣術を手に入れたんだから！　なあんにも努力しないで手に入れた力なんて、ホントの力じゃないよ！」
「そうか……。そうかもしれないな……」
デビルはうつむいてそういい、やがて、顔を上げた。
「わかったよ。魔界に戻ってイチから出直すよ。もう、時空の狭間からぷよぷよを引き戻す力もいらない」
「聞き分けがよくて、大変結構ですね……」
女神様は、ニッコリと慈愛にみちみちた微笑みをデビルに向けた。

これで一件落着。よかったよかった。
「あとは、黒ぷよたちをもとの時空に戻さなければ……」
という女神様のつぶやきとともに、ボクらはまわりを見渡した。
「あり……？」
おかしいな？　あんだけいた黒ぷよぷよが、一匹もいなくなってる。もしかして、逃げちゃったのかな……？
さらにつぶさに観察すると、床のうえでお腹をパンパンにして眠ってるカーバンクルを発見。
「あ――――っ！　まさか！」
ルルーだとか女神様だとかの騒ぎの最中に、カーくんはひたすら珍しい黒ぷよぷよを食べちゃっていたのだ！　どぉりで静かだと思ったら……。
「カーくん！　起きなさ――い！　起きて、ペッしなさい！　ペ――ッ！」
ゆすっても叩いても、カーバンクルは起きない。
「ぐ～ぅ、ぐ～ぅ……」
満腹で、これ以上ないってくらい気持ちよさそうに眠ってる。
『まあ、いいではないか、アルル。黒ぷよとやらはいなくなったのだし』
「女神の手間もはぶけたしな」

お気楽なサタンとシュテルン博士が口をそろえていった。
まぁ確かに、とにかくこれで、ぷよぷよ大司教の陰謀はついえて、世界が消滅するかもしれない危機はさったワケだ。
カーくんのおかげで、ちょっと拍子抜けしちゃったケドね……。

エピローグ
別れはちょっとツライけど……
……きっとまた、会えるよね！

「じゃあオレ、魔界(まかい)に帰るよ。……アルル・ナジャ、次に会ったときは、トモダチになれるといいな」
「そうだね。……ってちょっと待って！　まだ帰っちゃダメ！」
魔界に帰るための呪文(じゅもん)を唱(とな)えようとするデビルを、ボクは慌(あわ)てて引き止めた。
「なんだ？」
「アーサーの呪(のろ)いを解いてよ」
「そうしてやりたいのはヤマヤマだが……」
ポリポリ、とデビルは申し訳なさそうに後ろアタマをかく。
「オレにはムリだ」
「え――――っ！　どぉしてぇ！　キミがかけた呪いでしょぉ？」
「悪ぃ、〝絶対に解けない〟呪いをかけちまったんだ」

「じゃ、じゃぁ、アーサーは一生あのまま……？」
そ、それはちょっとカワイソすぎるぞ。もとがあんなにカッコイイのに。
……ちょっと待てよ。
ボクはアーサーとの会話を思い起こした。よくよく考えると、アーサーは呪いをかけられたとはいってたケド、いま玉座にいるあのカッコイイ人形——ボクが街の掲示板で見た肖像画がもとの姿だとはひと言もいってない。実はアーサーの本当の姿って、木彫りの操り人形にヨロイを着せたようなモンスター、パペットナイトかなんかだったりして……。それはちょっと、いや～んなカンジ。
はは、まさかね……。
「大丈夫、安心しろ」
ボクの心配をよそに、デビルがいった。
「絶対に誰にも解けないかわり、時間さえたてば、自動的にもとに戻る」
「どれくらい？」
「さぁ……。明日か、来年か、十年後か……」
「それじゃぁ、なんの解決にもならないよ！」
『いや、方法はあるぞ、アルルくん』
いきなり、ルシファー先生が口をはさんだ。

「方法、って……?」
『なに、簡単なコトだ。自分で考えてごらん』
「う〜ん……」
時間さえたてば、もとに戻る、か……。時間、ジカン……。
「あ――わかった！　魔法で時間を進めればいいんだ。アーサーそのものの時間を進めちゃうと、おじいさんになっちゃうかもしれないから、アーサーにかけられた呪文だけにすればいいんじゃないんですか?」
『その通り。よくできたな、アルルくん。パーフェクトな答えだ』
「えへへぇ〜」
うれしいな。先生にほめられちった。
「……でも、そんな呪文、ボク知らないんですケド」
「術の有無はともかく、その発想が大事なのですよ……」
今度は女神様がいった。
「時間を進めるのは、わたくしがやります……。アーサー様の身体をここに……」
ボクは、さっきの戦いでルルーに蹴られて飛んでった方向を探した。お城はすっかりガレキの山で、まるで溶岩地帯にいるみたいに歩きにくい。屋根なんかはもうなくってて、ピーカンの青空が広がってる。

お城がこんなになっちゃって、うまくもとに戻れたとしても、アーサーはやっぱりカワイソウだね。
やがてボクは、ガレキに埋もれて眼を回してるアーサーを発見。もちろん、飛べない鳥のまだ。ボクはアーサーを抱き上げて女神様のところに持っていき、床——っていうかガレキ——のうえに置いた。早速、女神様が呪文を唱え、杖をひと振りする。
その途端、
シュォォォォォォォォォッ！
アーサーの身体が、真っ白な光に包まれた。しばらくして光は弱まり始め、その中から姿を現したのは……！
「ふぅ、ようやくもとに戻れた……」
インキュバスと、ルシファー先生やサタンの中間のような男前——ビミョーな違いだけどね——で、だけどインキュバスみたいにイヤミなカンジはなくって、若いけれど城主様らしい威厳に満ちている。光の剣と、白——っていうよりはプラチナに近い馬がよく似合いそうな王子様だ。もちろん、デビルが作った替え玉の人形にソックリ。
「よかったね、アーサー」
パペットナイトかなんかじゃなくてよかった、なぁんて思いながら、ボクはいった。
「ありがとう、アルル。なにもかもキミのおかげだぴよ」

「え……？」

ぴよ……？

「あああっ、しまった！　飛べない鳥のしゃべり方がクセになってしまった……ぴよ」

「ホントは、アーサーはやっぱり、飛べない鳥なんじゃないの？」

ボクがいうと、みんな笑った。もちろんボクも。

まぁなんにしても、よかったよかった……。

＊　＊　＊

アーサーがもとの姿に戻ったあと、デビルは魔界に、時の女神様は時空の狭間に帰った。その頃にはもうルルーも正気に戻ってて、彼女のお願いで、ルシファー先生が呪文でミノタウロスをここまでワープさせた。シュテルン博士も、いつのまにか人間の姿になってる。

とにもかくにも、もうすっかりもと通りってカンジだ。お城だけをのぞいて……。

そういう現実があるせいか、アーサーの表情はそんなに明るくない。お城の復興で、ボクが手伝えることがあったら、なんとかしてあげよう。

だけど、かくいうボクも、あんまり喜ぶ気持ちになれない。それはこれから、ちょっち寂しい別れがやってくるから……。

「さて、我々もそろそろ帰ろうか。魔界にな」
シュテルン博士がいった。いよいよ来た！　ってカンジだ。
「なに、頻繁にここにこなけりゃいいだけのハナシだろう？　それに、魔界からでもアルルくんやルルーくんのことを見守ることはできるはずだぞ」
『そうだな……』
ルシファー先生がつぶやいた。サタンのほうは、ちょっとムスっとしててしゃべらない。
「マサムネさんはどうするの？」
ボクはあえて、マサムネさんのほうに問いかけた。だって、ルシファー先生とかになんていっていいか、わかんないんだもの。
「拙者は、この地にいるはずの息子を探すでござる」
「ええっ！　マサムネさん、子供がいたの？」
そりゃぁ確かに、いてもおかしくない年齢だけど……。
「うむ。隠しておくつもりはなかったが、忍びを志す、ムラサメなる息子がひとりいるでござる」
「ムラサメくんって、あのニンジャの……？」
ルルーがいった。
「知っているのでござるか？」

「うん。魔導学校で一緒のクラスだったよ」
今度はボクがいう。
「そうでござったか……」
「でも信じらんない。マサムネさんとムラサメくんて、ゼンゼン似てないんだもん」
「あれは、母親似なのでござる」
ちょっと悲しそうにうつむいて、マサムネさんはいった。
「拙者の妻は、ムラサメを生んですぐに死んでしまった……。拙者は、ムラサメを忍びの里に出し、自分は剣術に明け暮れることで、その悲しみをまぎらそうとしていたのでござる」
「もしかして、その奥さんって、ボクに似てるとか……？」
「その通りでござる。アルルどのを初めて見たとき、拙者は我が妻が再びこの世に舞い戻ってきたのかと思ったでござる」
「そうなんだ……」
ルシファー先生もそうだけど、みんな、悲しくてロマンチックな過去を持ってるんだなぁ。ボクも、そういう恋愛を経験するのかなぁ……？
でも、それと同時に、なぁんだまたかってカンジは捨てきれない。やっぱりマサムネさんも、ボクを誰かの身代わりにしようとしてたのであって、ボク自身のことが好きなワケじゃぁないんだ。

拙者には「ムラサメ」という息子がいるのだ
ムラサメっていうと――
こーいうの。
マサムネさんに似てないねえ…
うん
うむ…あれは母親似でな
想像図
んー
うふっ
マサムネ
母
ムラサメ
こんなのか…。
ムラサメを産んですぐ死んだのだ。
ぐすん…
妻とアルルどのは生き写しのようなのだ…
マサムネさんから見たアルル
ガーン
っていうと、ぼくはムラサメくんと生き写し!?
?
どーしたでござるか?
おーほっほっほ
さーあっ?
ガーン ガーン

悲しいなぁ……。
これから先、こんな気持ちをずっと味わわなきゃならないんだったら、ボクは恋愛なんてしたくないよ。そのままおばあちゃんになってもいいから、ひたすら魔導師の修行をしちゃうよ。
「そういえば、大事なコトを忘れてましたわ」
突然、ルルーが口を開いた。
「サタン様、例のお約束を……」
『ああ、アレか……』
『約束?』
ルシファー先生が聞き返す。
「サタン様がどうしてアルルに執着するのかを、事件が終わったら教えていただくことになってるんですわ」
『そうか、だったら私から教えよう』
先生は、火山の小屋でボクに話したことをルルーに説明した。
「そうだったんですの……。でしたら、アルルを超えるような魔力をあたくしが身につければ、サタン様のお妃になる資格が出るかもしれないワケですわね」
『その可能性は、あるかもしれんな』
『いや、オレはアルルのほうがいい。もちろん、ルルーのことがキライ、というワケではない

がな』

　いつになくマジメな顔で、サタンがいった。

「どうしてですの？」

『魔界でも現界でも、オレにいい寄ってこなかった女はアルルただひとりなのだ。始めはそれが気に入らなくて、次にアルルの秘められた魔力を知って、ムリヤリ妃にしようとしていたのだが……。その一連の行動で、オレは、人を想うということがどんなものなのかを知ったような気がするのだ』

「拙者とて、心持ちは同様でござる。アルルどのでなければ、たとえどんなに妻の面影を残している女子が現れても、こうまで心を動かされることはなかったでござる。それがなぜなのか、はかりかねていたところがござったが、先程のデビルに対する言葉、あれで理由を垣間みたような気がするでござる。目標に向かってひたむきに努力する心と、それを他人に伝えるカリスマを……」

『確かに、アルルくんの魅力が、潜在能力の大きさにつながっているのかもしれんな。私もアルルくん以外に後継とする気は起きなかったからな』

『その魅力から、カーバンクルも離れないでいるのだろう。……しかしルルー、フォローするわけではないが、お前がそれで悲観することはないぞ。なにしろオレたちは気まぐれだからな。アルルとお前の立場が、いきなり逆転するかもしれん』

「…………」

ルルーは無言で、サタン、ルシファー先生、マサムネさんの言葉に聞き入っている。

ボクはボクで、みんなボク自身のことを想ってくれてないとかって考えてたのが恥ずかしくなってきた。やっぱり、〝その人〟じゃないとダメなんだ。ボクだって、いろいろ魔導師がいるなかで、ルシファー先生以外のところに弟子入りする気はなかったもんね。

〝その人〟じゃないとダメ――。

そうやって想う気持ちが、人を愛する気持ちにつながるのかもしれない……。

いまのボクのその気持ちは、ルシファー先生のほうに傾いてるケド、もしかするとこれから人生経験を積んでいけば、別のいい人が現れるかもしれない。

さっき、恋なんてしない！　とかって思ったけど、やっぱりヤメ。たくさん恋をして、同じようにフラれて、それで、〝その人〟を見つければいいのだ。もちろん、魔導師の修行をしながらね。ちょっとタイヘンだなぁ……。

「話は終わったかね？」

あくまでも第三者の顔で、シュテルン博士がいった。

「そういえば、シュテルンどの……でしたっけ？　あなたに想い人はいないのですか？」

ここで初めて、アーサーが口を開く。

「アーサーどのはどうなのだ？」

「わたしは、よければアルルを妃にと思っていたのですが、城のありさまをみる限り、どうやらそういうワケにはいかなくなったようです。城の復興が済むまで、アルルとは友達関係でいて、後に考えることにしますよ」
「そうか……。ま、私は人間の格好をしてはいるが、動物や精霊たちの長だ。人間の恋愛感情に興味はあまりないのだよ」
『なにしろ、ケモノの王だからな』
「またそれをいう……」
サタンの突っ込みに、シュテルン博士は口をとがらせた。
その仕草がとってもおかしくて、ボクらは一斉に心から笑った。
ゼンゼン別れの雰囲気じゃないね。まぁ、これから絶対に一生会えないってワケじゃないし。
そう思えば、あんまり悲しくない。場合によっては、魔界に行けるような術をボクが身につければいいのだ。
そうなる日を夢見て、また新たな修行の旅がこれから始まる……！

がんばるぞぃ！

ひとまずは、めでたしめでたし。

あとぐぁ〜き

魔導物語はとぉっても楽し、
みんなでぺらぺらしゃべりますぅ〜。
あ〜らえっさっさ〜ぃ★
とまぁ、のっけからうかれポンチの山本でございます。そしてついに魔導物語3巻のお目見え！
いやぁ〜、今回はちょっと早かったでしょ？　2巻から半年くらいしかたってないし。一生懸命がむばったですよ、ボクは。ホメてホメて。
でぇ〜もやっぱり、締め切りはあいかわらずブッちぎり状態なんだよなぁ〜……。
はぁぁっ！　担当のディアブロン1号さん、イラストの壱さん、そのほかの皆々さま、ごめんなさひ。
というわけで、今回にてアルルとルシファー先生たちのお話は、ひとまず終了です。といっても、魔導物語を書くのをやめるというワケではありませんので、安心してください。なにしろ、コンパイルのMOO仁井谷社長から「百巻出してもいい！」という御墨つきをいただいて

ますので、死ぬまでボクは魔導を書き続けるですよ。だから応援してくださいね★
まぁ、一応は3巻にて《サタン&ルシファー先生》編は終了、というコトで……。また4、5、6巻その先その先で、また彼らが顔を出すでしょうケドね。
そういえば、2巻でのあのサタンとルシファー先生の〝アレ〟。やっぱりかなり反響高かったっスね。そういうアブナイ（別にそうでなくてもいいケド）ネタがあったら、ボクに教えてくれると嬉しいな。この先に書くときに、参考にしたいと思います。
え？　〝アレ〟を知らない？
それはいけません。今すぐ本屋さんに行って、「魔導物語2巻、ぷよぷよ大明神の復活っ！をください！」とおっきな声で叫ぶのです。大丈夫、お金を払ったら誰でももらえます。ついでに1巻の『ぷよぷよ大魔王の降臨っ！』も買うとグッドですよ。
もしいまこれを立ち読みしているなら、1〜3巻までまとめて買えるので、超おとく！　でないと即座に〝ぷよ攻めの刑〟に処す！
ところで、おかげ様で多数のおたよりをいただいているんですが、その中に「小説に出てくるキャラクターはオリジナルなんですか？」という質問を結構いただきました。この場を借りて、それにお答えいたしませう。
まぁ、話せば簡単なんですよ。ルシファー先生とシュテルン博士、マサムネさん、アーサー様だけがボクのオリジナルです。ぷよぷよ大魔王や大明神なんかは、名前と設定を変えたって

程度です。あとは必ず、『魔導物語1―2―3』『魔導物語ARS』『ぷよぷよ』『ぷよぷよ通』に出てきます。パソコンやスーパーファミコン、メガドライブ、ゲームギアとか、いろんなハードウェアで出てますので、一度プレイしてみてください。

ちなみに今回登場したぷよぷよ大司教ことデビルくんは、スーパーファミコンで発売される（この本が出るころには、もうされてるのかな？）『魔導物語〜はなまる大幼稚園児〜』に登場します。姿形はちょっと変えてありますけどね。

いやぁ〜、しかしまぁ、魔導の勢いは留まるところを知りませんな。セガサターンでも『ぷよぷよ通』が出ましたし。ボクもその勢いに負けず、そしてトラの威を借るキツネのごとく（笑）、バンバン魔導（だけでなく）小説をかきまくりますんで、よろしくお願いしますね★

あ、いただいたお手紙は、ちゃぁんと穴があくほど読んでます。必ずお返事を書きますんで、気長にお待ちください。ずびばぜん。

新たな決意と感謝の気持ちを込めて、最後に一言……。

ふははははははははは……！　また会おう……（デーモン小暮調で）。

一九九五年十月吉日　ＦＥＡＲ事務所にて

魔導物語 3

ぷよぷよ大司教の陰謀っ！

山本 剛

角川文庫 9822

平成七年十二月一日　初版発行

発行者――角川歴彦

発行所――株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話　編集部(〇三)三二三八―八四五一

営業部(〇三)三二三八―八五二一

〒一〇二　振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八

印刷所――旭印刷　製本所――千曲堂

装幀者――杉浦康平

定価はカバーに明記してあります。

S 56-3　ISBN4-04-415603-4　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

いつも「スニーカー文庫」を
ご愛読いただきありがとうございます。
今回の作品はいかがでしたか？
ぜひ、ご感想をお送りください。

〈ファンレターのあて先〉
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店 書籍第一編集部気付
「山本 剛先生」係